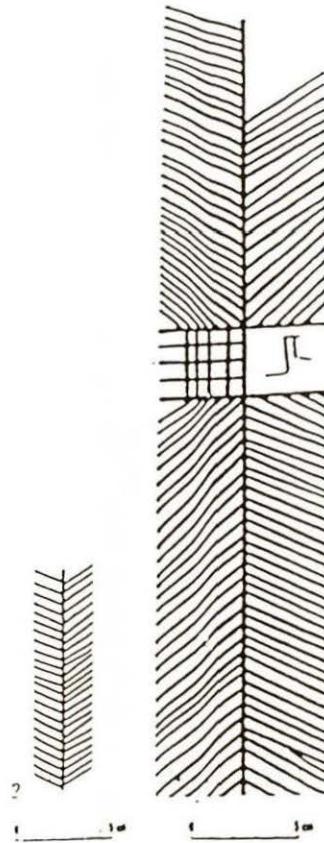


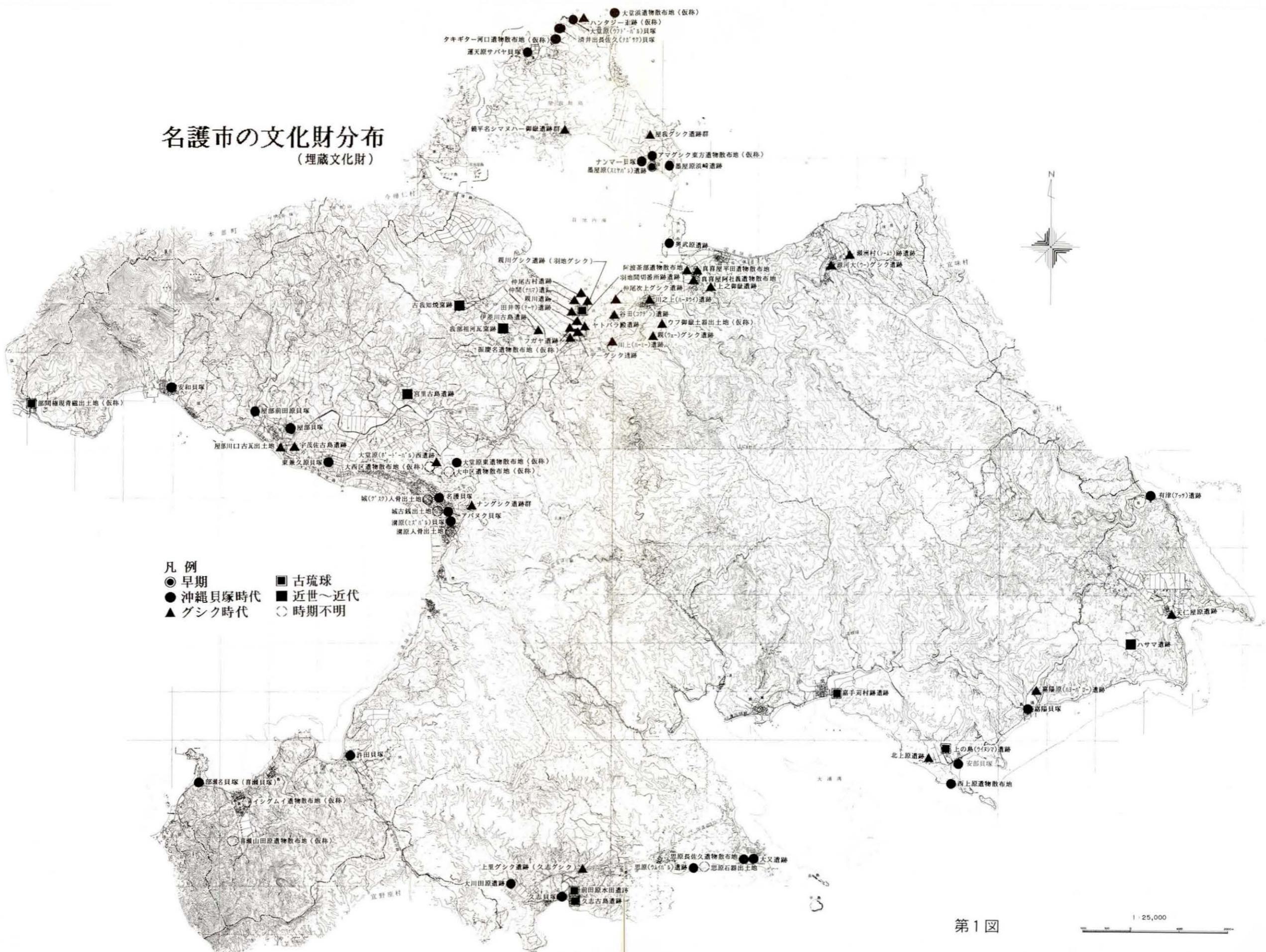
宇茂佐古島遺跡

—宇茂佐第二地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財—
—範囲確認調査報告書—



1992年3月
沖縄県名護市教育委員会

名護市の文化財分布 (埋蔵文化財)



第1図

宇茂佐古島遺跡

—宇茂佐第二地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財—

—範囲確認調査報告書—

1992年3月
沖縄県名護市教育委員会

はじめに

本調査報告書は、名護市宇茂佐第二地区画整理事業の計画に伴い、国、県の補助を得て、県文化課の協力を得ながら名護市が主体となって発掘調査を実施した成果の記録です。

今回の発掘調査は区画整理事業との調整を目的に主に遺跡の範囲や、歴史的価値と性格を把握する。

「まちづくり」を進めるにあたって開発は必要不可欠な行為であるが、そのことによりいちじるしい自然環境の破壊や歴史環境の保全が損なわれるようなことがあってはならない。

現在、宇茂佐古島（屋部古島）遺跡には三ヵ所の井泉が残りカーウガミに宇茂佐や屋部の区民が訪れる。

ムラの移動を知る上において、字誌づくりなどにもなくてはならない歴史遺産であるとともに、生を受けた井泉を挾む「心」のよりどころとしても引き継ぐべき「文化遺産」である。

調査の成果をふまえて、これらの歴史環境を生かした開発計画の策定を申し入れるとともに、保存についての調整を進めていきたい。

関係者並びに市民の御理解と御協力をお願い致します。

平成4年3月

名護市教育委員会

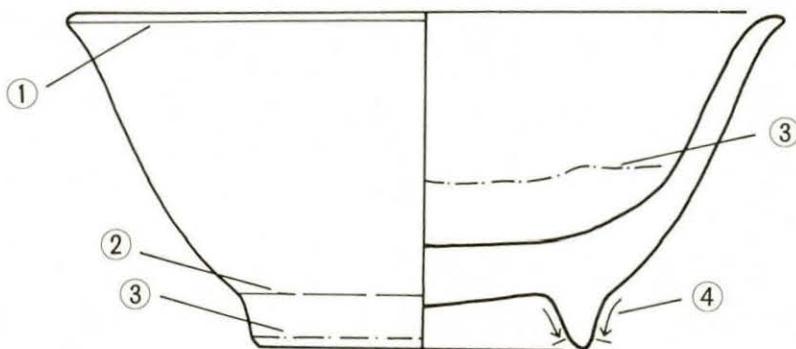
教育長 玉城嘉眞

例　　言

1. 本調査報告書は、平成2年、3年度に実施した宇茂佐古島遺跡の範囲確認調査の内容を記録したものである。
2. 本事業の経費については、文化庁（80%）、沖縄県（10%）の補助を得た。
3. 発掘調査については地主の格別の御理解と御協力が得られた。記して謝意を表す。
岸本キミ工氏、岸本利仁氏、山入端一正氏、岸本光雄氏、吳屋信三氏
比嘉敏雄氏、岸本嘉松氏、比嘉アイ子氏、比嘉辰旨氏
4. 調査の実施および資料整理においては、次の方々の指導、協力をいただいた。
記して謝意を述べたい。

発掘調査協力・教示　　沖縄県教育委員会
　　文化課
陶・磁器の同定　　大橋康二氏（九州陶磁文化館）
瓦の蛍光X線分析　　三辻利一氏（奈良教育大学）
高麗系瓦の同定・教示　　小渡清孝氏

5. 遺跡の分布図は名護市役所発行の1/25,000地形図によった。
6. 遺跡の位置図その他は、国土地理院発行の1/5,000国土基本図によった。
7. 本書の執筆、編集は当市教委、社会教育係、文化財担当者があたった。
8. 実測図の表現は以下に示すとおりである。



- ①稜線(明瞭な線であることを示す)
- ②稜線(不明瞭な線を示す)
- ③軸薬のさかいを示す
- ④軸薬がかかっている範囲を示す

目 次

はじめに

例 言

I. 調査の目的と調査の経過	8
II. 調査の組織	9
III. 宇茂佐古島の位置と歴史的環境	9
IV. 調査結果の詳細	13
1. 発掘調査の範囲と方法	13
2. 層 序	17
3. 遺 構	21
4. 遺 物	23
(イ)土器	23
(ロ)磁器	24
(ハ)陶器	54
(ニ)石製品・金属製品	58
(ホ)瓦	59
V. 高麗系古瓦の産地推定に関する一試み	64
沖縄本島の遺跡出土灰色瓦の蛍光X線分析	
奈良教育大学 三辻利一	68
VI. 調査の成果と課題	76

宇茂佐古島遺跡(図版目次)

第1図	名護市の文化財分布(埋蔵文化財)	46
第2図	名護市の位置	9
第3図	宇茂佐古島遺跡の位置	10
第4図	宇茂佐古島遺跡周辺の小地名図	14
第5図	グリット設定図	15
第6図	層序断面図	18
第7図	層序断面図	19
第8図	層序断面図	20
第9図	遺構図	21
第10図	遺構図	22
第11図	土器	23
第12図	青磁	24
第13図	青磁	26
第14図	青磁	28
第15図	青磁	30
第16図	青磁	32
第17図	青磁	34
第18図	白磁	36
第19図	白磁	38
第20図	染付	40
第21図	染付	42
第22図	染付	44
第23図	染付	46
第24図	染付	48
第25図	染付	50
第26図	染付・色絵	52
第27図	擂鉢	54
第28図	陶器	55
第29図	陶器	56
第30図	陶器	57
第31図	石製品・金属製品	58
第32図	高麗系瓦	59
第33図	高麗系瓦	60
第34図	高麗系瓦	61
第35図	高麗系瓦	62
第36図	高麗系瓦	63
第37図	灰色瓦のRb-Sr分布図	72
第38図	灰色瓦のK-Ca分布図	73
第39図	灰色瓦のクラスター分析	74
第40図	灰色瓦の分布図	75
第41図	琉球古瓦出土地	76
第42図	琉球古瓦押型復原	78
第43図	格子瓦A型	79
第44図	格子瓦A型	80

宇茂佐古島遺跡(表目次)

第1表	第12図に対応する分類表	25	第11表	第22図に対応する分類表	45
第2表	第13図に対応する分類表	27	第12表	第23図に対応する分類表	47
第3表	第14図に対応する分類表	29	第13表	第24図に対応する分類表	49
第4表	第15図に対応する分類表	31	第14表	第25図に対応する分類表	51
第5表	第16図に対応する分類表	33	第15表	第26図に対応する分類表	53
第6表	第17図に対応する分類表	35	第16表	高麗系瓦の分布調査表(1)	66
第7表	第18図に対応する分類表	37	第16表	高麗系瓦の分布調査表(2)	67
第8表	第19図に対応する分類表	39	第17表	沖縄灰色瓦の分析値	71
第9表	第20図に対応する分類表	41	第18表	琉球古瓦分類出土地一覧	77
第10表	第21図に対応する分類表	43	第19表	名護市の遺跡編年一時代区分表	107

宇茂佐古島遺跡(写真目次)

写真1	発堀風景	13	写真17	染付	92
写真2	断面	17	写真18	染付	93
写真3	集石遺構	21	写真19	染付	94
写真4	柱穴	22	写真20	染付	95
写真5	胎土分析をおこなった高麗系瓦	64	写真21	染付	96
写真6	東屋部川	81	写真22	擂鉢	97
写真7	発堀風景	82	写真23	陶器	98
写真8	発堀風景	83	写真24	陶器	99
写真9	青磁	84	写真25	石製品、金属製品	100
写真10	青磁	85	写真26	高麗系瓦	101
写真11	青磁	86	写真27	高麗系瓦	102
写真12	青磁	87	写真28	高麗系瓦	103
写真13	白磁	88	写真29	高麗系瓦	104
写真14	白磁	89	写真30	高麗系瓦	105
写真15	染付	90	写真31	高麗系瓦	106
写真16	染付	91			

I. 調査の目的と調査の経過

昭和62年、名護市宇茂佐第二土地区画整理組合設立準備委員会から区画整理事業の計画が示され、その実施にあたり文化財の有無について当教育委員会に照会がなされた。

土地区画整理事業区域内にこれまでの遺跡分布調査の結果から、屋部川口古瓦出土地と、宇茂佐古島遺跡の存在が知られていたため、区画整理事業との調整資料を整えるため、発掘調査を行うことになった。

現在、宇茂佐古島（屋部古島ともいう）遺跡には三ヵ所の井泉が残り「カーウガミ」に宇茂佐や屋部の区民が訪れる。

「水」に対する習俗と「生」を受けた井泉を挿む風習については、民俗調査を入れ利用の状況把握に務めた。

遺跡の範囲がほとんど畠として利用されているため、発掘可能地は限られた土地のみである。

西兼久原、古島原、安田根川原の土地について全筆、法務局で土地調査を行った後、所有者に会い、同意の得られた場所から試掘に入ることになった。

当初は、地主からの聞き取りの状況などから、かなり攪乱されている事が言われ、遺跡の保存状況は良くないと考えられていた。

表面調査の結果からも、バックホーで掘削したのがわかり、かなりの攪乱が予想された。

収穫の終えた土地について、短期間で調査を終えるという条件で地主の協力が得られたので、測量に入り、可能な限り調査範囲を広げ、グリットの設定を行った。

試掘地点については、グリット設定後、遺跡の範囲がある程度つかめるように選定した。

現場での杭打ちが完了した時点で、名護市の都市計画課と調整して調査がスムーズに行くように、地主へさらにお願いをした。

地主の同意が得られるたびに、試掘地点を広げるという調査の経過を取らざるを得ないが、昭和63年度の試掘調査の結果では、当初の予想よりは、はるかに遺跡の保存状況は良いと判断された。第1層は、耕作機械により土地の切り返しがあるが、第3層はしまった固い土質で遺物を多く含む層が確認できた。昭和63年8月18日、土地区画整理組合設立準備委員会、名護市、宇茂佐区、屋部区、関係地主などへ連絡し、現場において、説明会を開催し、遺跡の本格調査の必要性と、遺跡の保存、地主への協力を依頼し、埋蔵文化財等の可能な限り詳細な情報を早期に把握する作業に入ることを確認した。

Ⅱ. 調査の組織

調査総括 名護市教育委員会教育長 玉城嘉眞

調査責任者 社会教育課長 島袋正敏

総務責任者 社会教育係長 仲宗根敏雄

総務 仲村京子

調査員 島福善弘、比嘉久

調査補助員 松田博文、岸本利枝

民俗調査員 比嘉ひとみ

資料整理 仲村美代子、仲原順子、仲村美香、渡辺晴美、古波ひとみ

(実測、トレース)

発掘作業員 松本優一郎、仲間八重子、村山セイ子、仲村志津子、大城ウト

伊豆味良子、吳屋太郎、大城一、古堅正子、宮城千代、渡久地トミ子

比嘉健、岸本憲晃、比嘉広彦、田中郁子、安富晶子、我部早苗

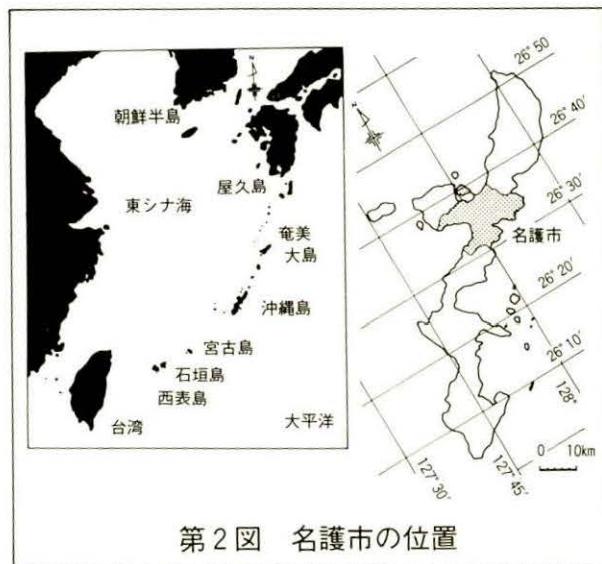
仲村慎子、山城ありさ、池間和代、照屋洋枝、長山さおり、宮城茂也

國吉ゆかり、兼次せい子、比嘉司、比嘉克也

Ⅲ. 宇茂佐古島遺跡の位置と歴史的環境

宇茂佐古島は東屋部川の東岸に位置し、屋部橋から東へ約300m離れた二つの谷筋にある。

北側にピーザンと呼ばれる丘陵があり、それが東側に連なり南側のユアギ森まで三方森で囲まれ、冬の北風や台風から身を守るのに適した地形である。





第3図 宇茂佐古島遺跡の位置

北側の谷には、上ヌ井、中ヌ井、下ヌ井の井泉が残っており、なかでも中ヌ井は保存がよく、強く古島時代の存在をアピールしているかのようである。

宇茂佐古島は屋部古島とも呼ばれ、現在でも、宇茂佐や屋部の区民を中心に盛んに「カーウガミ」などが行われている。

また、屋部川の河口はかつて良港だったということである。古老からの聞き取りや地名調査（小地名図参照）によると、まずトウンチマガイという曲がり（カーブ）した所に唐船の停泊場があり、さらに川を登った所に、シンドウガニク（舟頭の浜）やシキジンという船着き場、アジムンイシ（写真一-6）という唐船を結んでいたという岩があった。文献にも合衆国議会版として、日米和親条約締結（1854年）を目的としたペリー一行の航海記録『日本遠征記（1～3巻）』に、「宇茂佐で、私達は、すばらしい船と木材置場を発見した。そこはかつてジャンク船（帆のある船）を造っていた所である。」と記してある。山原船も、屋部川のかなり上流まで、航行しているという伝承を考えると、屋部川の河口は良港として利用されていたことがうかがえる。

宇茂佐古島力一（井泉）民俗調査

1988 6/5. / 6

聞き取りした事項を以下に列挙する

宇茂佐売店のおばさんより（50代位）

- 出身は屋部の久護
- 屋部の久護は正月3日に古島の力一を拝んでいる。供物は酒と花米である。
- 正月3日には、宇茂佐は宇茂佐売店と県道を隔てた向かいのムイの下方にある力一を拝む。古島の力一を拝むかどうかは知らない。

屋部 道路を歩いていた70代程のおばあさん3人より

- 正月3日に3つの力一を大一門の家庭が拝んでいる。各家庭毎に拝む。ウガンのみで水を汲むということはない。
- 正月の水撫では各家庭にある井戸の水で行った。
- 2つの力一は水はないが、1つはまだ涸れていない。

名護鉱材隣の岸本家のおばあさんより 70歳程

- 4、5年前に越してきたばかりなので古島の力一の詳細については知らない。2つの井戸の場所は知っているがもう1か所は分からぬ。
- 旧正月3日は屋部区から拝みに来る。宇茂佐の人はみかけない。他の部落の人も時々拝みに来る。

比嘉マツ 屋号テップヤー（鉄砲屋） 屋部768番地（久護1班）

明治36年生

- 3つのカーともブルジマガーと呼んでいる。
- 旧正月3日のハーウガミ行事の日に拝む。1年に1回しか拝まない。
- 5月ウマチーには拝まない。時間は特に決まってなく、その日の内に行けばよい。
- 屋部ではブーイチムンのみが拝む。家庭ごとに1人出る。普通は女人が行くが男人の人でも構わない。話者は現在は行かない。嫁が行っている。
- 供物は酒と米、線香（2平半 火はつけない）である。
- 祈願の内容は去年の御礼と今年のあいさつである。
- 3つのカーを拝む順は本来なら上、中、下の順だが今は適当に拝んでいる。
- 宇茂佐が拝んでいるかどうかは分からぬ。
- 中のカーのみ水が残っている。戦後すぐまでは名護鉱材と道を隔てた向かいの家（宇茂佐区）は中のカーの水を汲んでいた。他の2つのカーは戦前から水はなかった。
- 子どもが生まれた時の産水は家の井戸から汲んだ。それ以前は部落内にいくつかあったカーから汲んできた。死者の湯灌に使う水も家の井戸から汲んだ。古島のカーを利用したことはない。
- ブーイチムンの出身であれば他部落に嫁に行っても拝みに来る。

V. 調査結果の詳細

1. 発掘調査の範囲と方法

第5図に示した地形測量に基づいてグリットの設定を行い、発掘調査の同意の得られた休耕地を選んで可能な限り広範囲に及ぶように調査を進めた。

古島の生活層が残るかどうかの確認のため、まず、0列において東西方面に試掘を行い層の観察を行った。

この結果、保存のいい遺物包含層が確認されたため、遺跡のひろがりをつかむのを目的に南北方向にも試掘トレーンチを延ばし調査区を広げていく方法をとった。

川添いの513番の土地についても試掘を試みたが、そこは兼久（砂地）で遺物は採集されなかった。

また、図に示すような遺物包蔵地の確認ができ、宇茂佐古島遺跡の広がりとして一応のラインが把握できた。

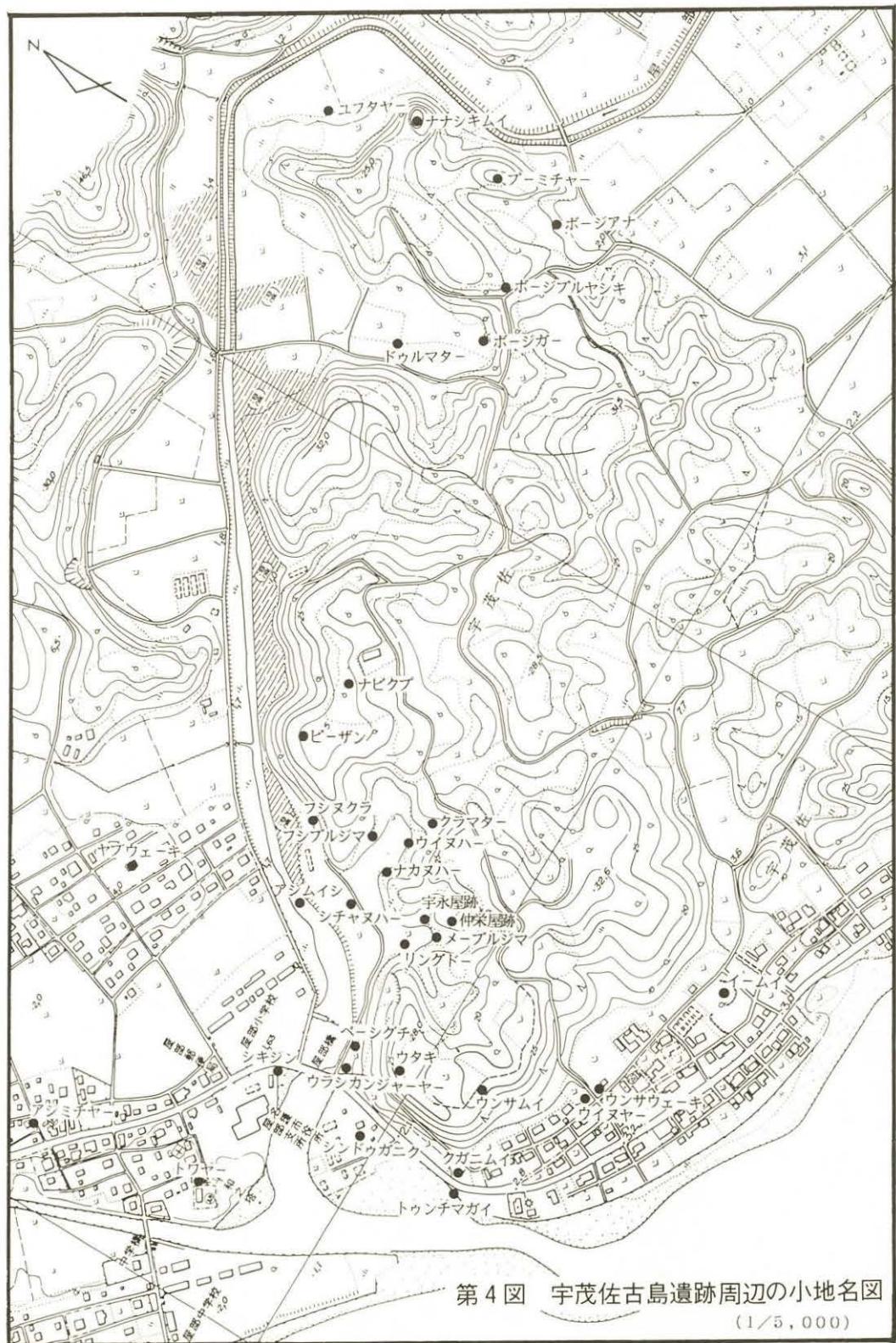
以上の成果をもとに、2次調査を計画し、調査の範囲を決めるにしたが、昭和63年10月に予定されていた区画整理組合の設立が遅れ、古島の範囲は農作物が植えつけられ、発掘承諾書が得られない状況になった。

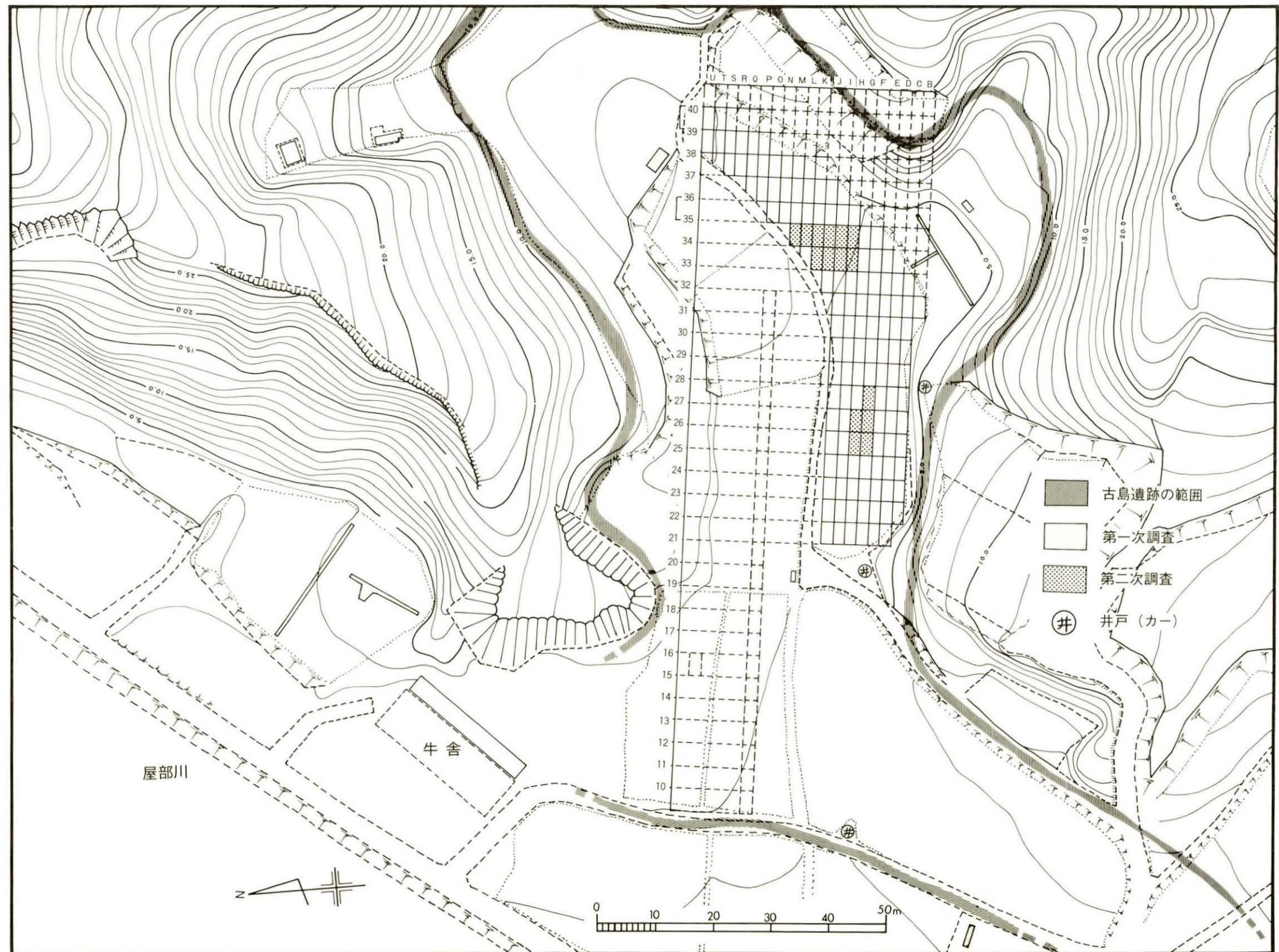
したがって、二次調査は557番、546番、547番の三筆についての発掘調査である。また最後に発掘承諾書の得られた582番についても試掘を行うことになった。

宇茂佐古島遺跡は長期にわたり、利用や廃棄がくりかえされた複合遺跡である。遺構、遺物の共存、先後関係をとらえるため、一層ずつ土を除去しながら作業を進めた。



写真1 発掘風景





第5図 グリッド設定図

2. 層序

調査地域は、キビ畑やミョウガ畑や休耕地である。遺物包含層はⅠ～Ⅲ層まであり、Ⅳ層は、いわゆる地山である。特にⅢ層の古島時代の層位は良好な保存状況であり、50cmくらいの厚みで分布しているのがわかった。

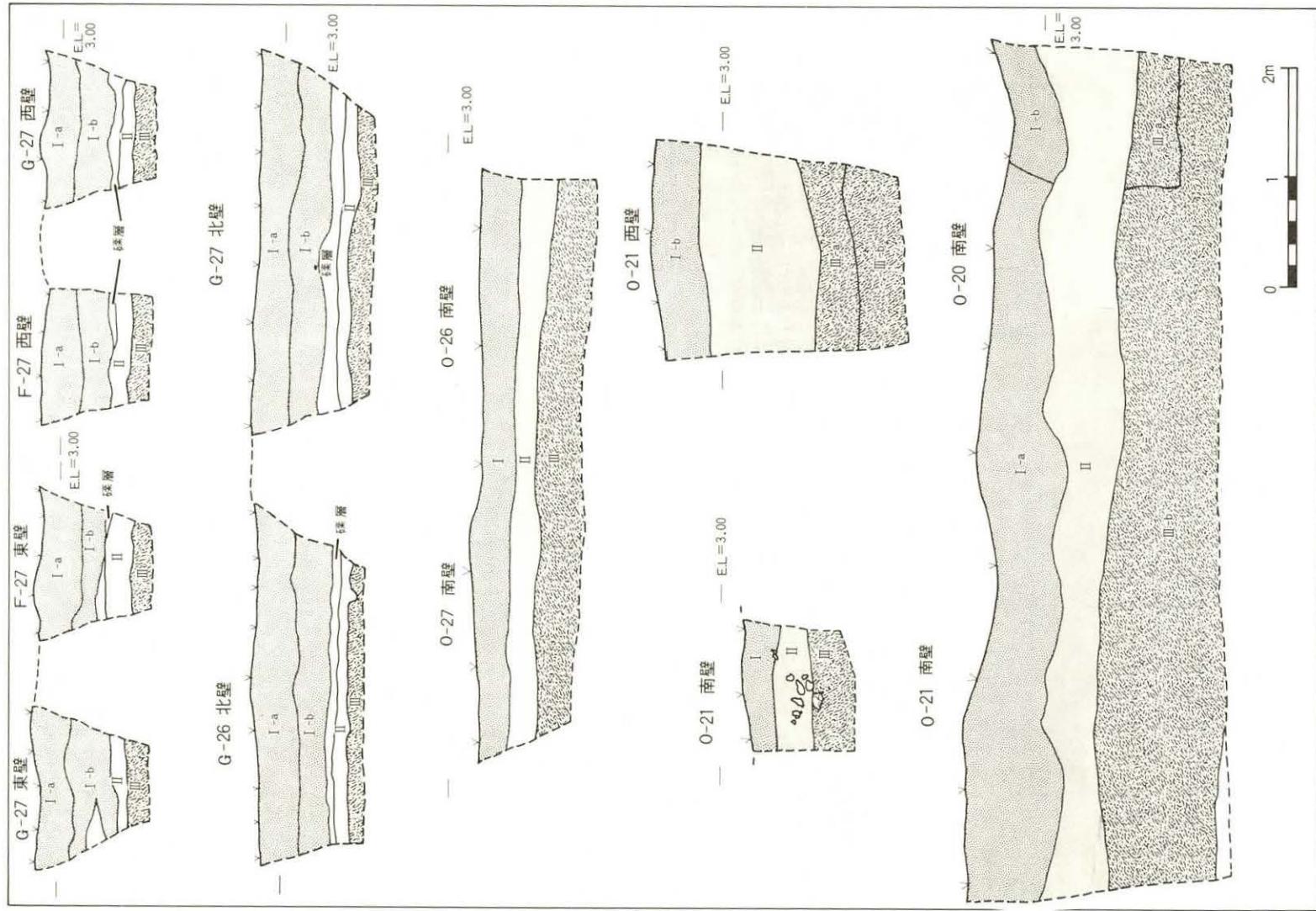
また、上ヌ井から下ヌ井にかけて礫の層が観察された。以下、基本的な層位について述べる。

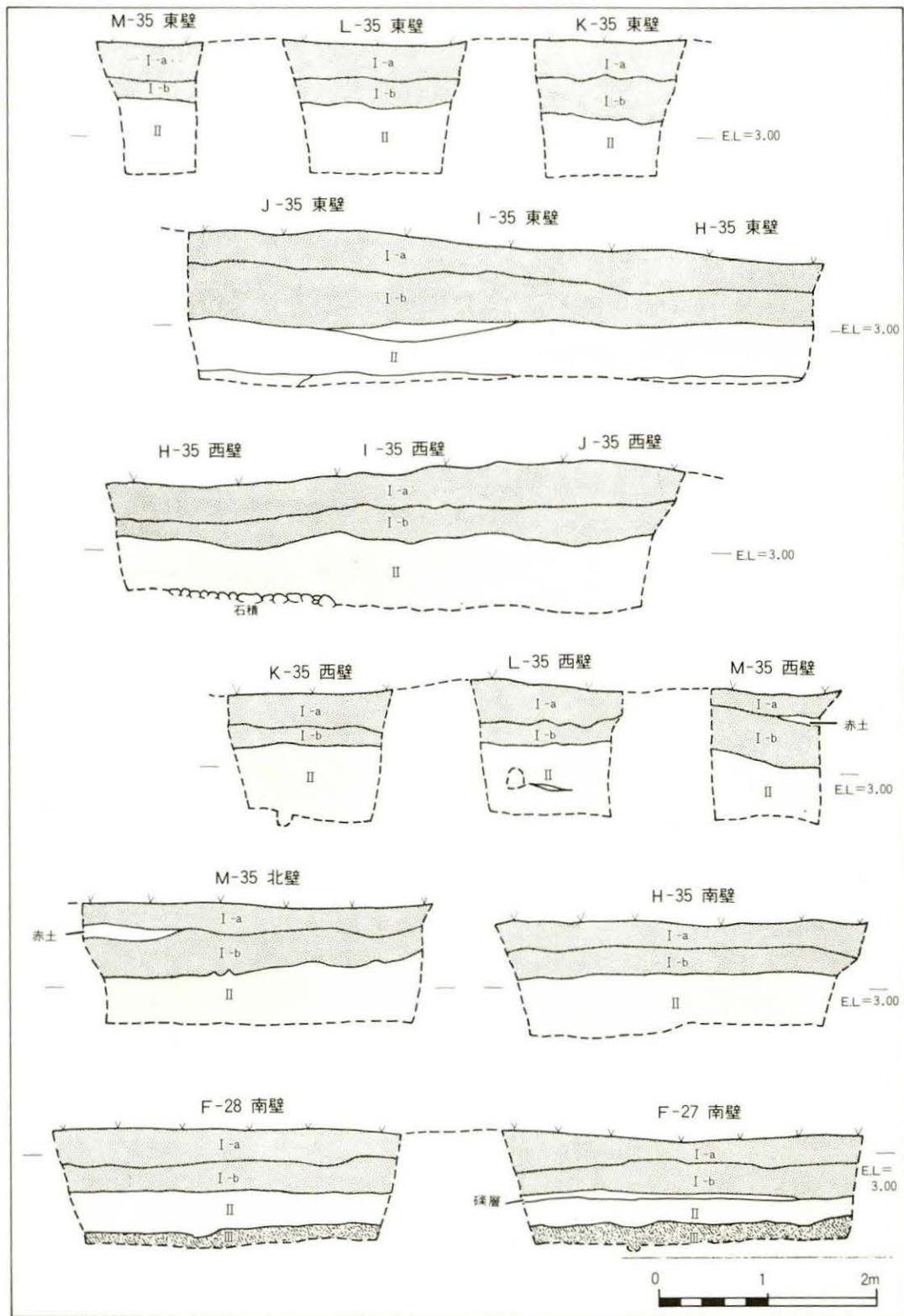
- | | | |
|---|----------|----------------------------------|
| Ⅰ | 層（茶褐色土層） | 表土層、畑の耕土。 |
| Ⅱ | 層（明褐色土層） | 攪乱層、まだら状（黒色土と赤褐色土が混在）を呈する。 |
| Ⅲ | 層（黒褐色土層） | 遺物包含層。木炭、グスク土器、陶磁器、瓦、獸骨、自然遺物を含む。 |
| Ⅳ | 層（黄褐色土層） | いわゆる地山、シルト質土層。遺物はまったく含まない。 |



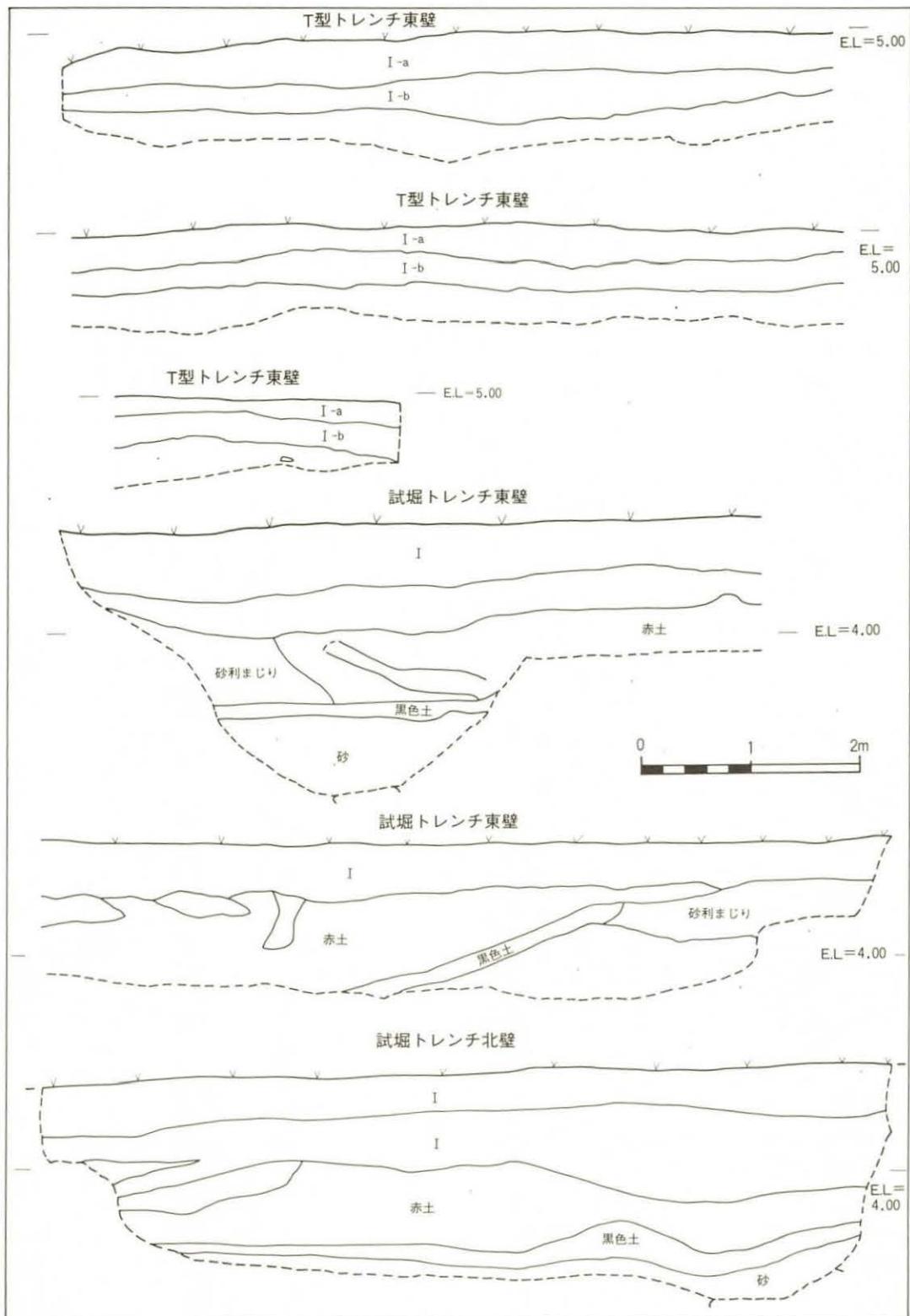
写真2　断面

第6図 層序断面図





第7図 層序断面図



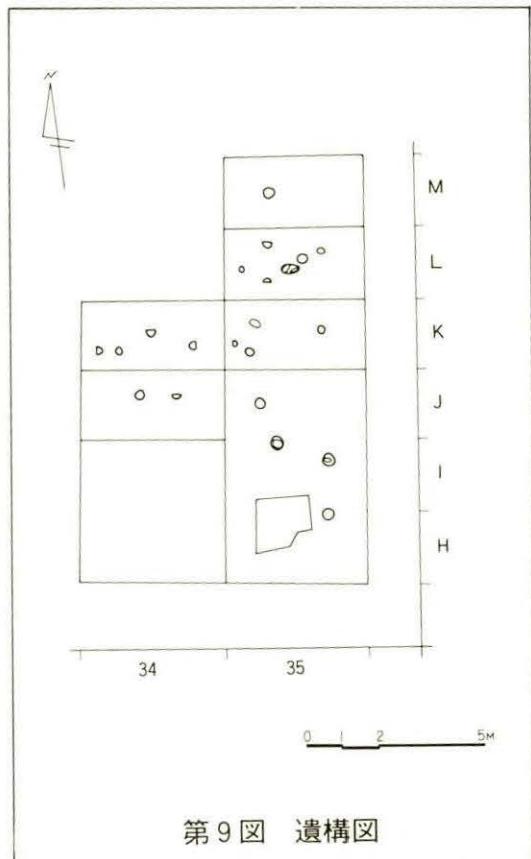
第8図 層序断面図

3. 遺構

1次の試掘調査で、遺物包含層が良好な状態で保存されていることがわかつっていた。2次調査は、その遺物包含層の広がりを確認するとともに、住居跡や、瓦の製作遺構などの検出を課題とした。

今回発掘したグリットで、遺構らしきものが確認できたのは、第9図、第10図に示すように、G-26、G-27、F-26、F-27、そして、H-35、I-35、J-35、J-34、K-34、K-35、L-35、M-35である。

上記のグリットで柱穴らしきものを確認したものの、住居跡のプランをつかむまでにはいたらなかった。しかし、K-35に見る、明らかに火を受けたと思われ



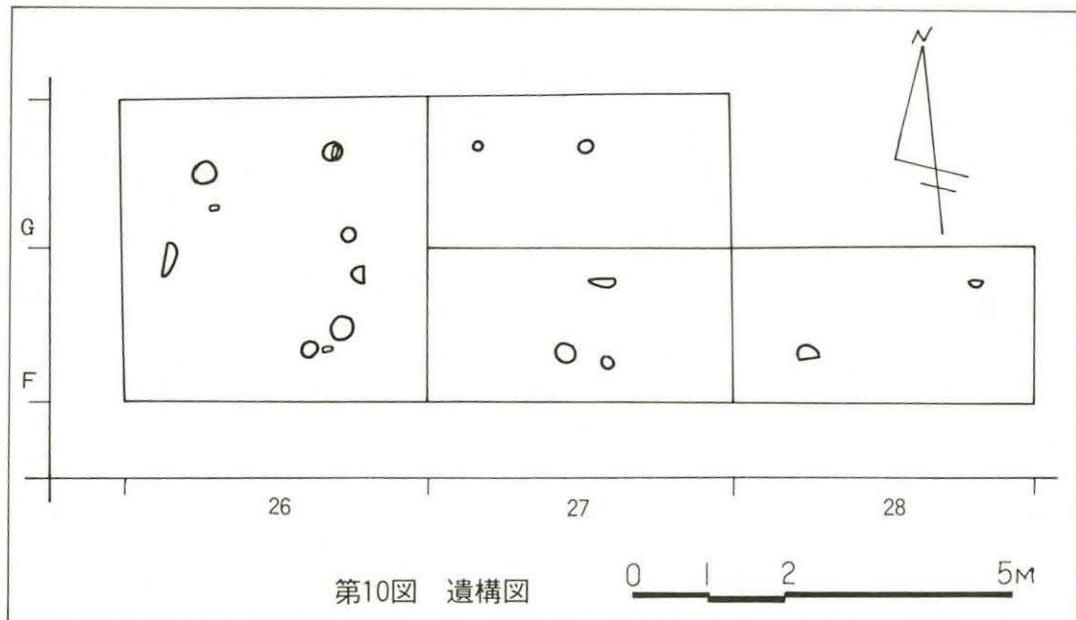
第9図 遺構図



写真3 集石遺構

る焼石や、L-35の焼土と炭は、人間が生活した痕跡を示す遺構だと思われる。また、H-35～J-35のグリットに見える石灰岩の集石遺構も人間の生活に関わるなんらかの施設と思われるが、今の時点で、その判断はできなかった。

今後、発掘グリットを広げることによって、住居跡のプランや、瓦などの製作遺構が検出されることも考えられる。



第10図 遺構図



写真4 柱穴

4. 遺物

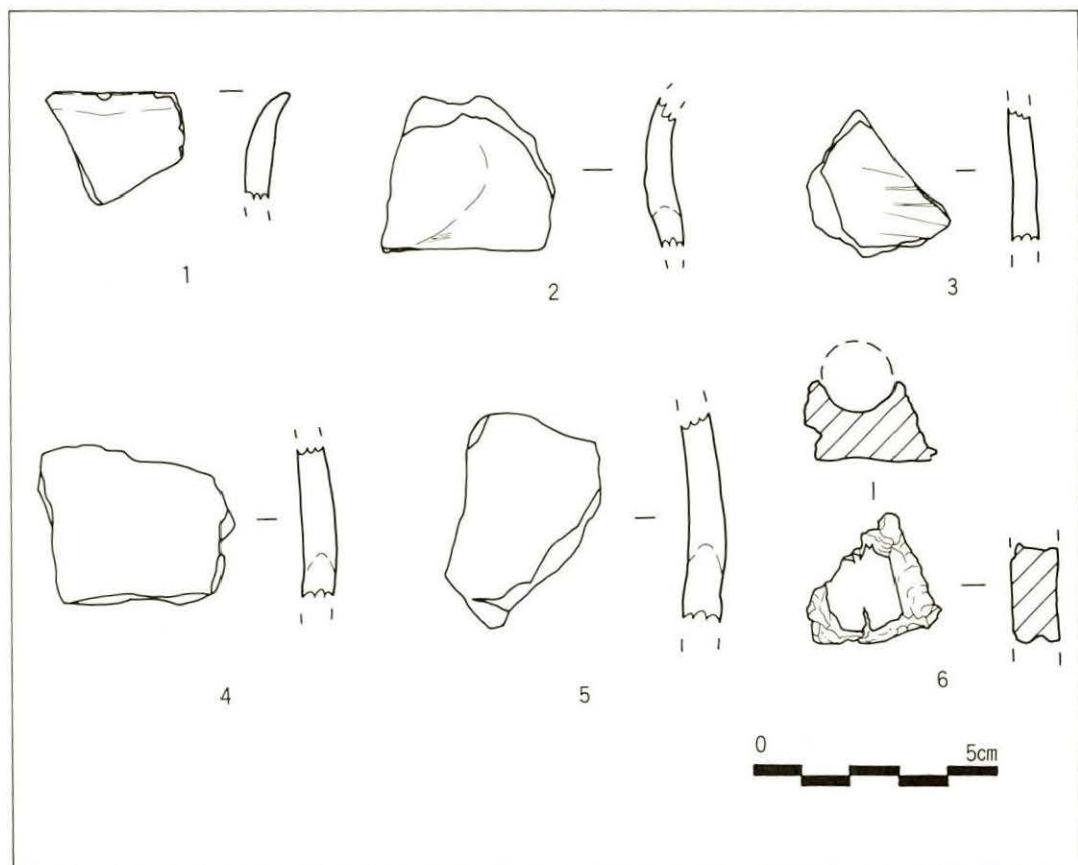
出土遺物は、人口遺物と自然遺物に分けられたが、Ⅲ層からの出土遺物はほとんどが人口遺物である。自然遺物の採集が少なく、また、最近のものも混じっているためこの項においては、人口遺物を中心に述べる。

(イ) 土器 (第11図)

出土する土器片はいずれも小破片で数も少ない。ほとんどが胴部であるため、器形については判断できない。

1は1片のみの口縁部である。口唇部は舌状で外反する。器面調整は2以外は内外器面とも指頭あるいはヘラナデによる調整痕がみられる。

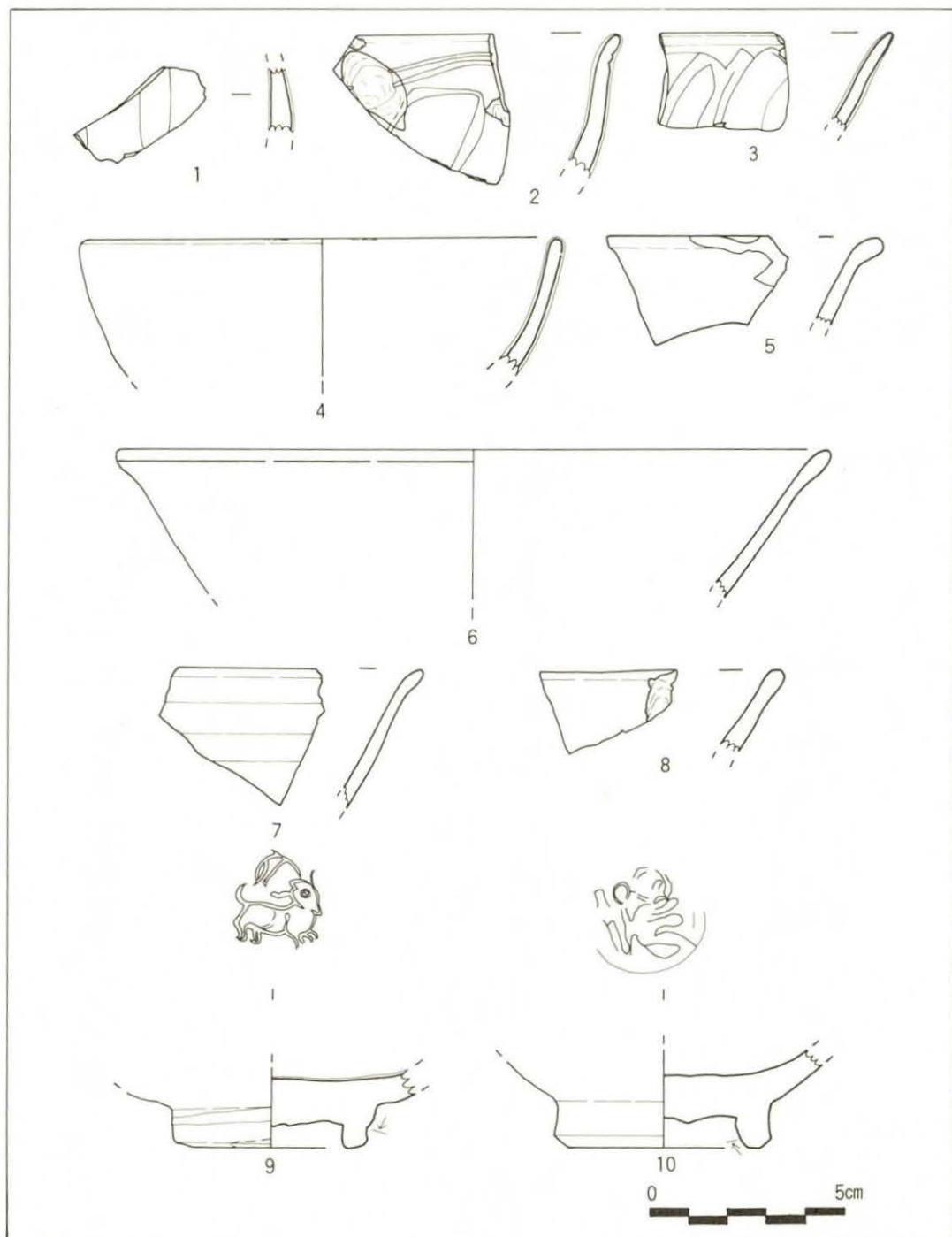
胎土は泥質で、混入物に砂粒がある。焼成は良い。3は器面が黒色である。



第11図 土器

(口) 磁 器

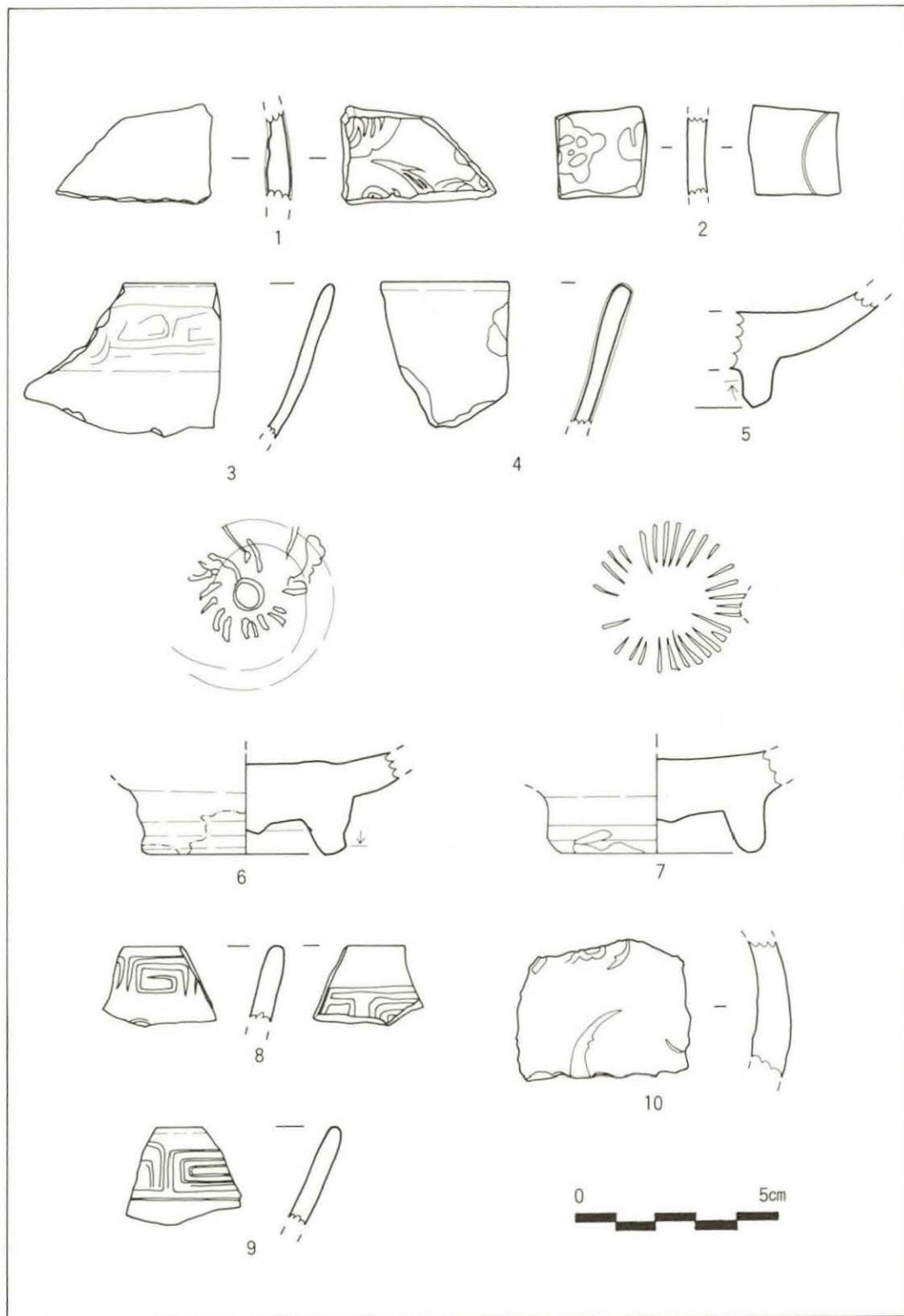
青磁、白磁、染付、色絵など輸入物が出土遺物の大半を占める。各遺物に関する事項は、対称表に器種、製作地、年代、特徴を整理した。



第12図 青磁

第1表 第12図に対応する分類表

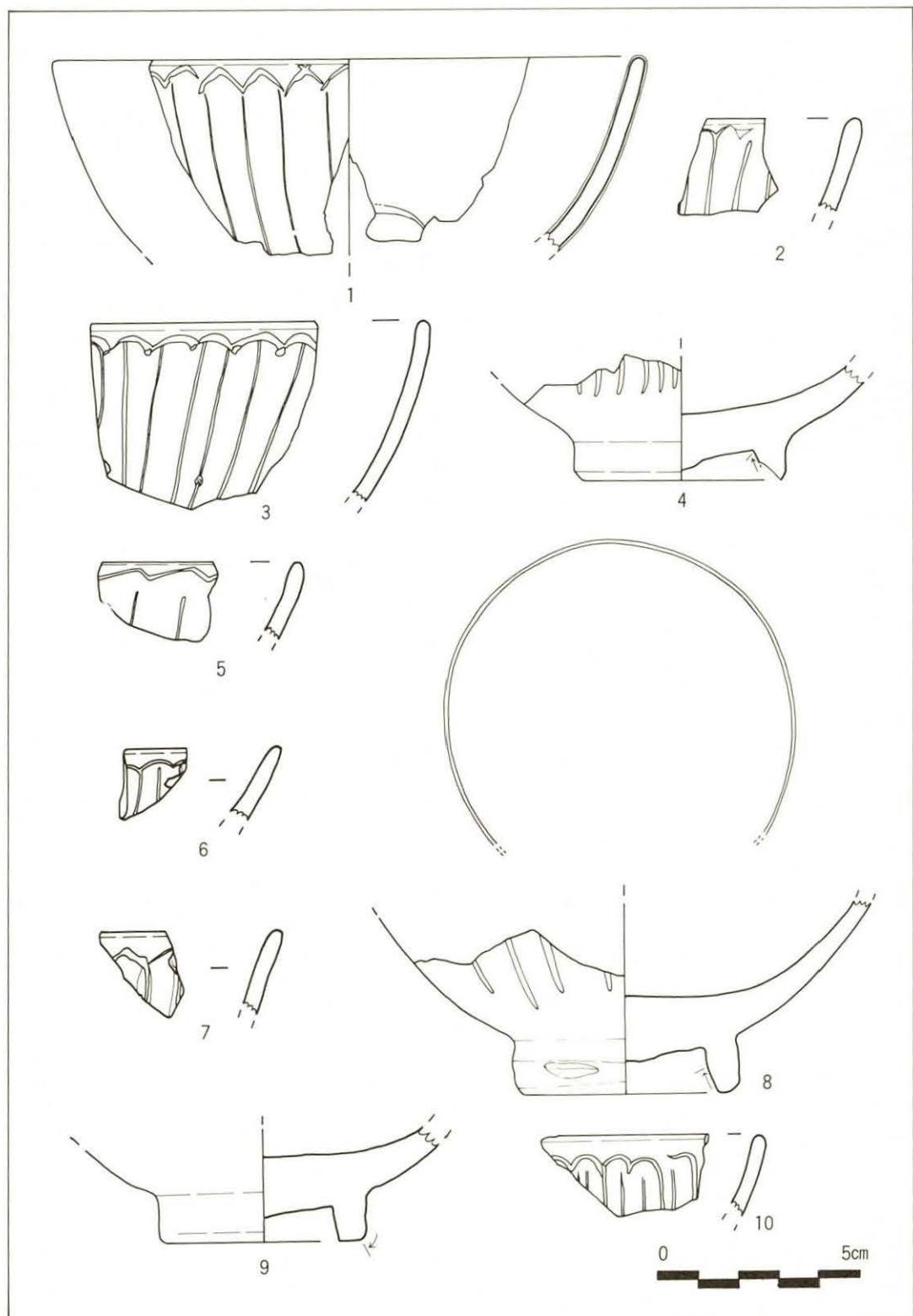
器種		年代	備考
①編蓮弁文碗	中国竜泉窯系	13c後半~14c	
②	"	14c後半~15c初	
③編蓮弁文碗	"	14c中葉~末	
④	"	14c後半~15c前半	
磁器-青磁-碗	⑤端反形碗	"	14c末~15c中葉
	⑥ "	"	"
	⑦ "	"	"
	⑧ "	中国	"
	⑨印花文碗(鹿か)	中国竜泉窯系	14c末~15c
	⑩印花文碗	"	"



第13図 青磁

第2表 第13図に対応する分類表

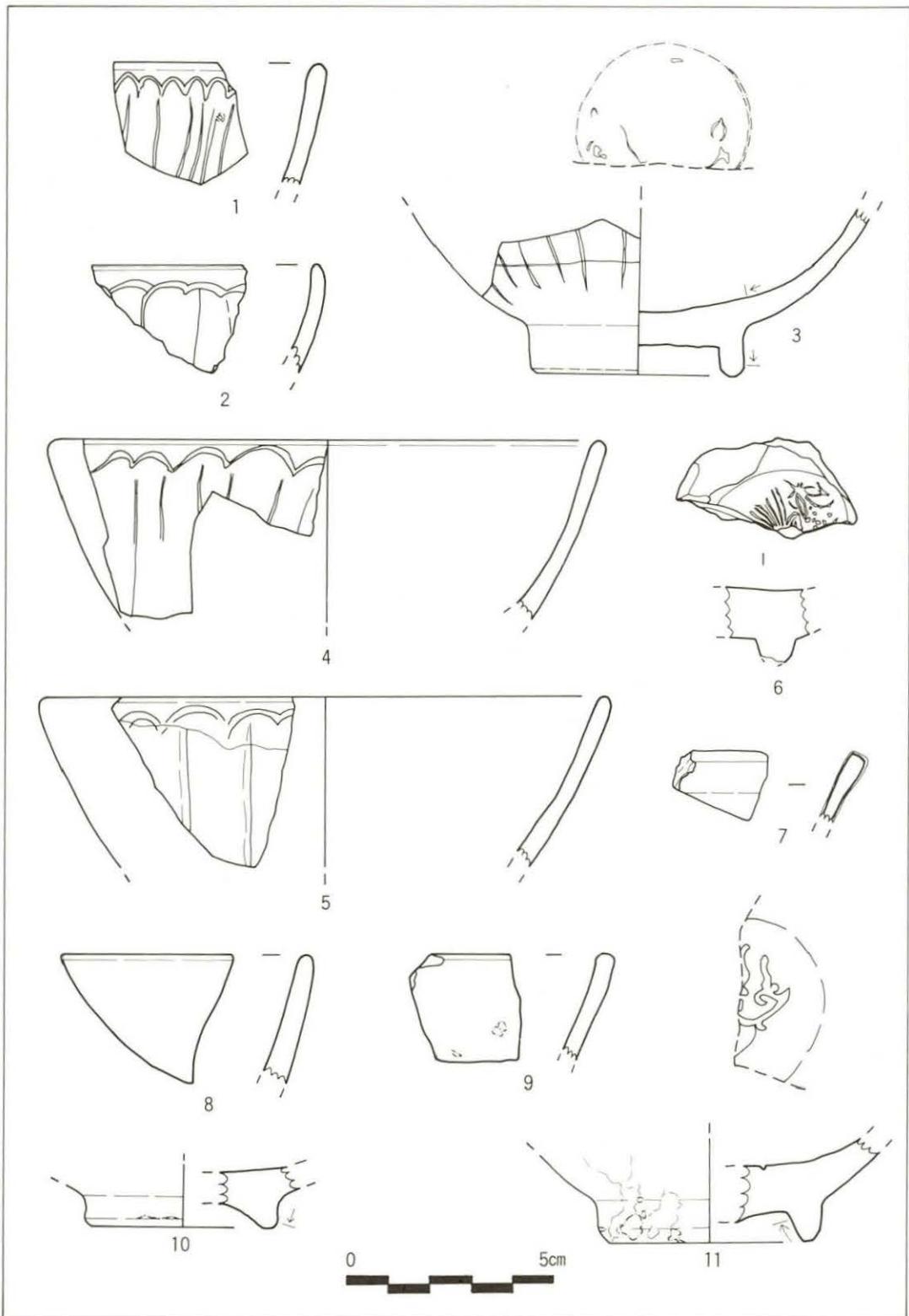
器種		年代	備考
—①	中国竜泉窯系	14c末～15c中葉	内面に陰刻文
—②	〃	14c末～15c	〃
—③	中国	15c	雷文帶？
—④	中国竜泉窯系	〃	
磁器—青磁—碗	—⑤	14c末～15c	
—⑥印花文碗	—中国福建・廣東系	15c	
—⑦〃	—中国竜泉窯系	15c中葉～16c前半	
—⑧	〃	〃	印花雷文帶
—⑨	〃	〃	〃
袋物—⑩	—中国	14c末～16c	



第14図 青磁

第3表 第14図に対応する分類表

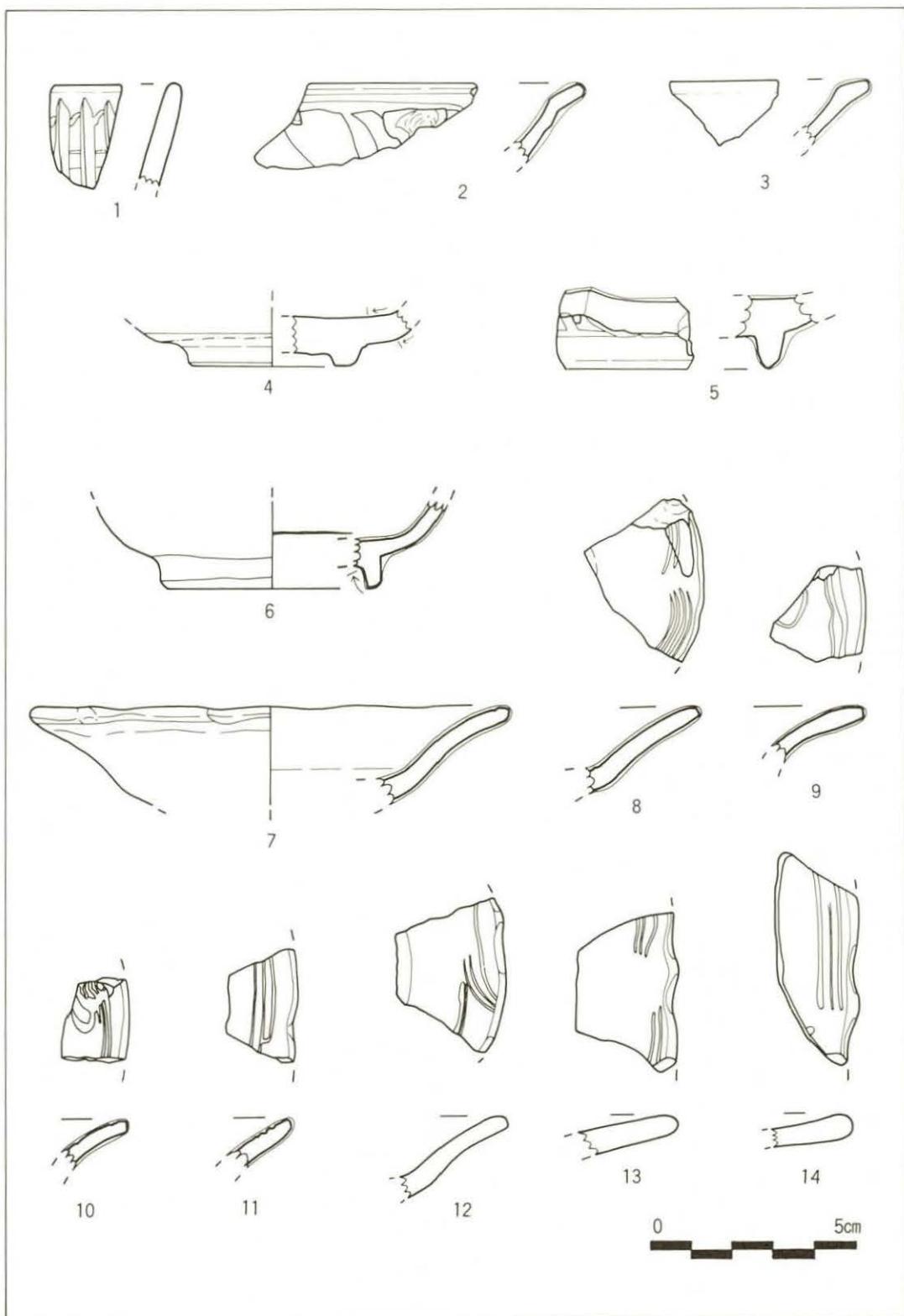
器種			年代	備考
①剣先蓮弁文碗	—	中国竜泉窯系	—	15c中葉～16c中葉
② "	—	"	—	"
③ "	—	"	—	"
④ "	—	"	—	"
磁器-青磁-碗	⑤	"	—	"
⑥ "	—	"	—	15c後半～16c中葉
⑦ "	—	"	—	15c中葉～16c中葉
⑧ "	—	"	—	"
⑨ "	—	"	—	"
⑩ "	—	"	—	15c後半～16c中葉



第15図 青磁

第4表 第15図に対応する分類表

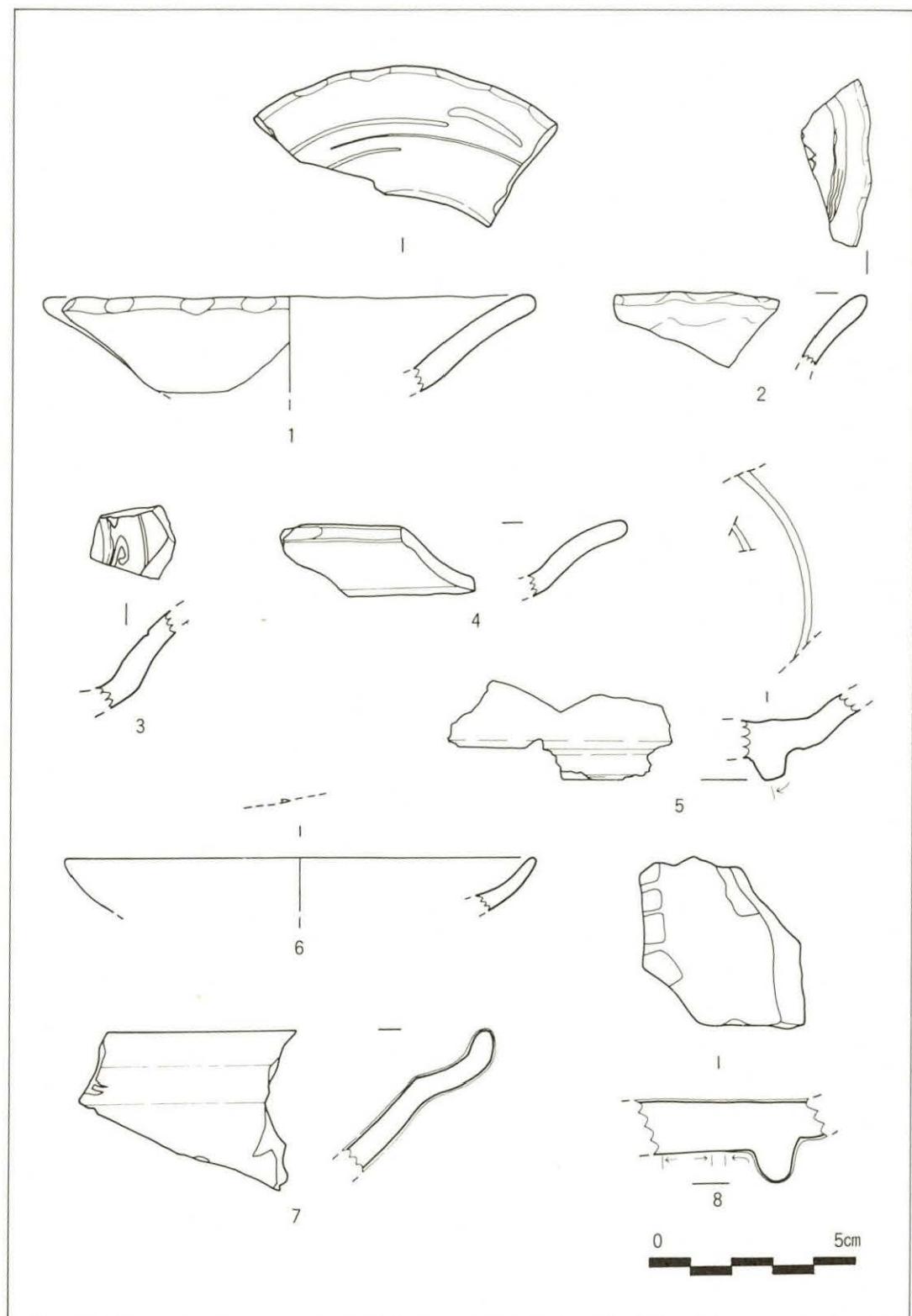
器種	年代	備考
①剣先蓮弁文	中国竜泉窯系	15c後半～16c中葉
② "	"	"
③ "	"	"
④ "	"	"
磁器-青磁-碗	⑤ "	中国福建・廣東系
		15c後半～16c
⑥印花文碗	中国	15c～16c中葉
⑦	"	明
⑧	"	15c～16c
⑨	"	"
⑩	中国	15c～16c中葉
⑪印花文碗	中国竜泉窯系	"



第16図 青磁

第5表 第16図に対応する分類表

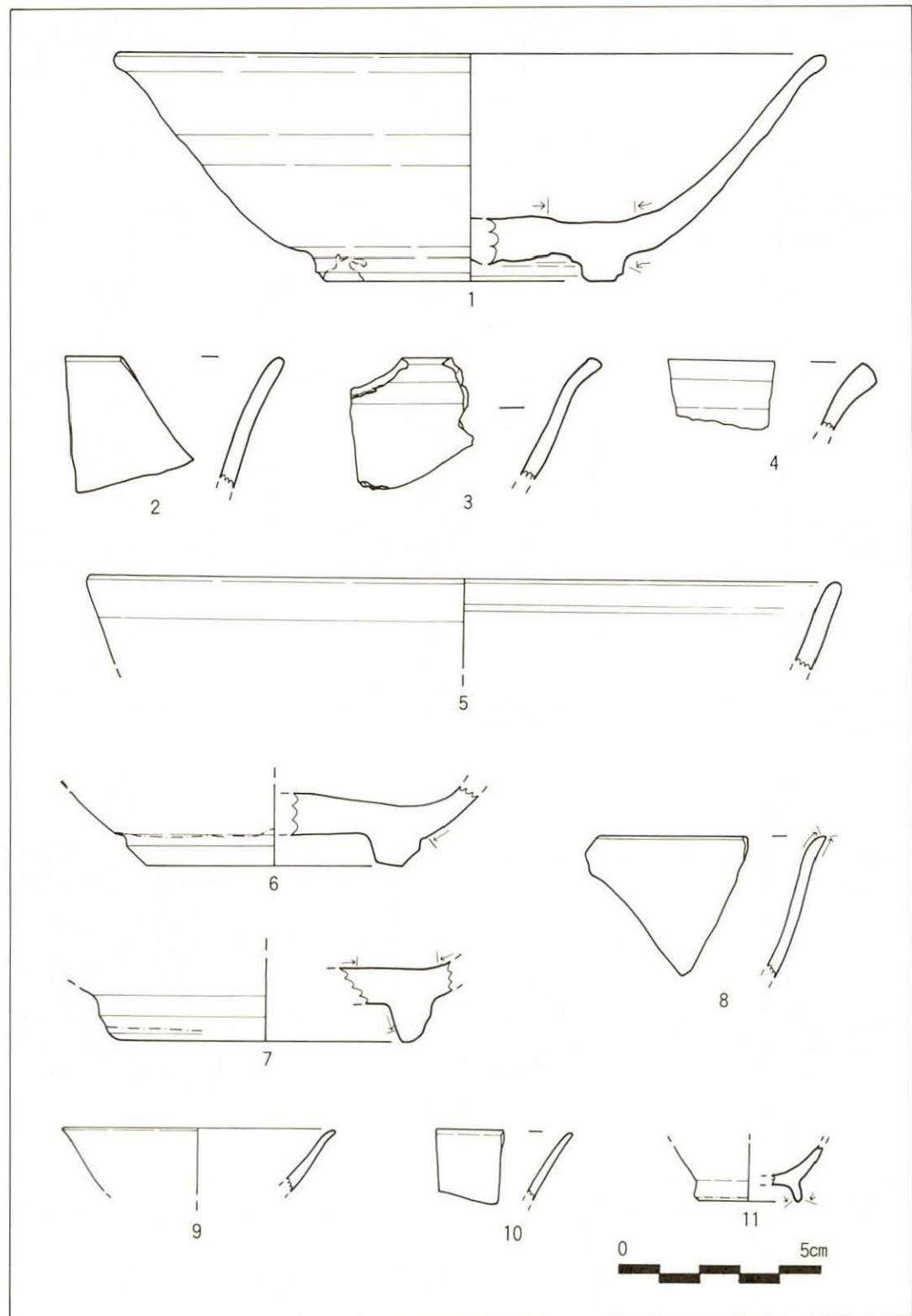
器種		年代	備考
碗	① 剣先蓮弁文碗	中国福建・廣東系	16c
	②	中国龍泉窯系	14c後半～15c前半 外側面ヘラ彫蓮弁文
	③	"	"
	④	中国	15c中葉～16c
磁器-青磁-皿	⑤ ヘラ彫蓮弁文皿	中国龍泉窯系	14c後半～15c前半 高台内蛇ノ目釉剥ぎか
	⑥	"	"
	⑦ 稜花形皿	"	15c中葉～16c前半
	⑧ "	"	"
	⑨ "	"	"
	⑩ "	"	"
	⑪ "	"	"
	⑫ "	中国	15c中葉～16c
盤	⑬ 稜花形盤	中国龍泉窯系	14c後半～15c中葉 口縁部に櫛描文
	⑭ "	"	"



第17図 青磁

第6表 第17図に対応する分類表

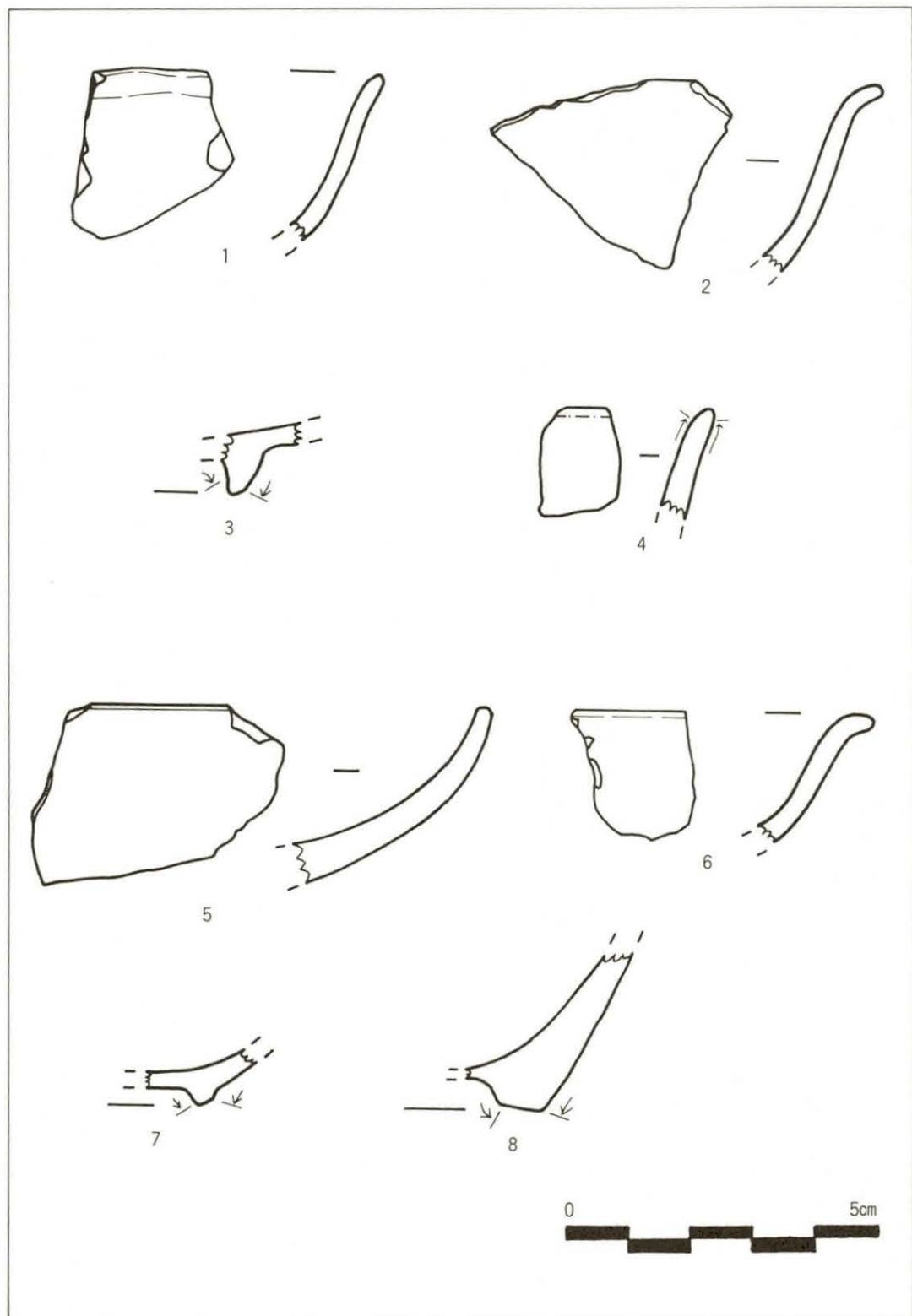
器種		年代	備考
①稜花形皿	中国	15c中葉～16c	
② "	中国龍泉窯系	15c中葉～16c前半	
③ "	中国	15c中葉～16c	
磁器-青磁皿	④ "	"	"
	⑤ "	15c中葉～16c前半	
	⑥クロム青磁 皿	国産 明治～大正	見込に縁彩あり
盤	⑦	中国龍泉窯系 14c後半～15c中葉	
	⑧	" "	見込印花文 高台内蛇ノ目釉剥ぎか



第18図 白磁

第7表 第18図に対応する分類表

器種		年代	備考
①	中国福建・広東系	16c~17c	高台にモミガラ熔着 見込蛇ノ目剥ぎ
②	中国景德鎮窯系	17c後半~18c	口錆を施す
③	中国福建・広東系	17c~18c	
④	"	"	
碗			
磁器-白磁	⑤	"	17c後半~19c
	⑥	"	17c~18c 高台にモミガラ熔着
	⑦	"	17c後半~19c
	⑧口禿小碗	中国福建系	18c後半~19c 型押し成形
	⑨	国産	明治以降
坏	⑩	"	"
	⑪小坏	中国景德鎮窯系	18c~19c



第19図 白磁

第8表 第19図に対応する分類表

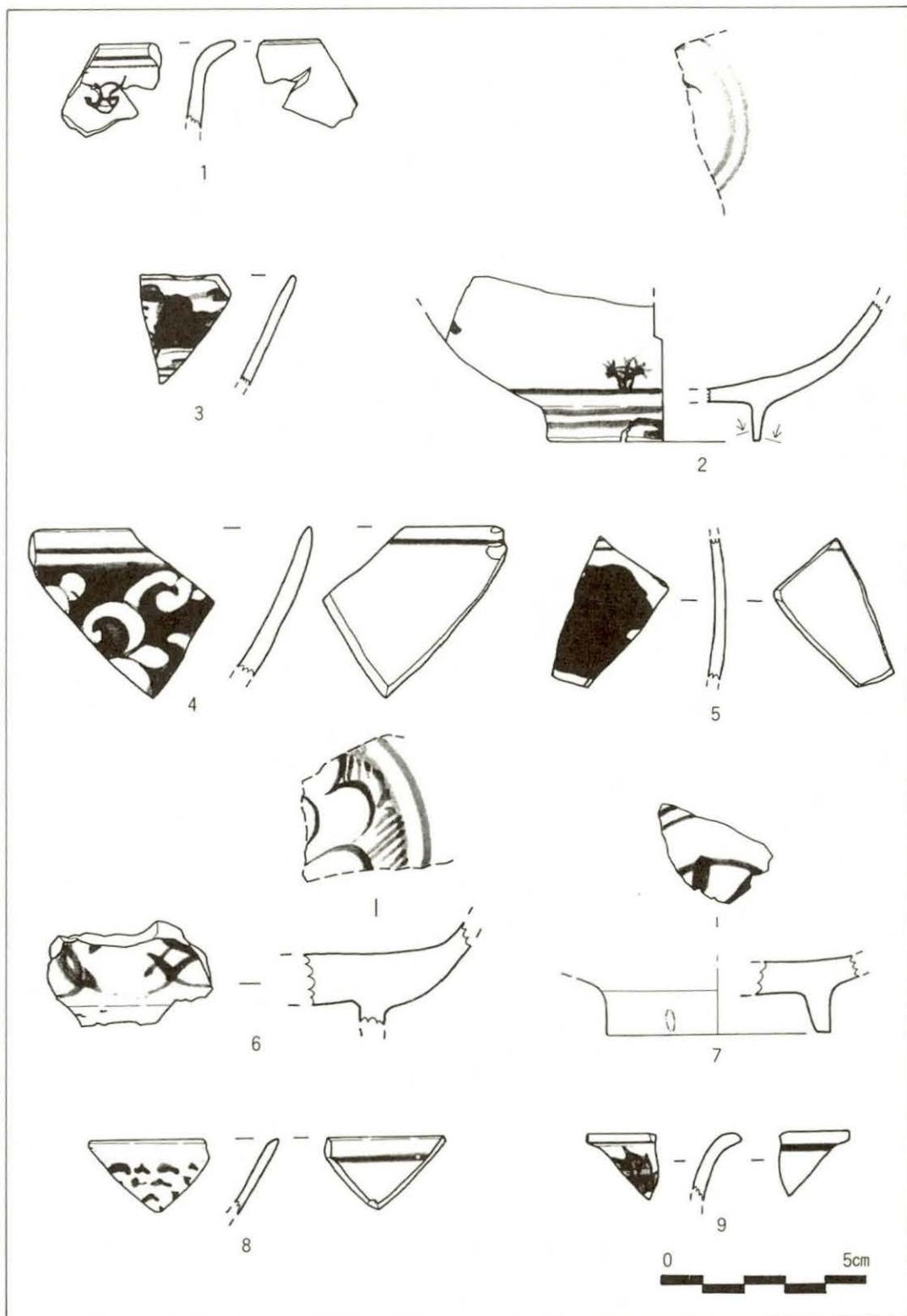
器種		年代	備考
①端反皿	中国景德鎮窯系	15c後半～16c中葉	
② "	"	"	
③ "	"	"	
磁器-白磁 皿	④口禿皿 中国	13c後半～14c中葉	
	⑤ "	15c	
	⑥端反皿 中国景德鎮窯系	15c後半～16c中葉	
	⑦ "	"	
瓶	⑧ 薩摩か	19c	



第20図 染付

第9表 第20図に対応する分類表

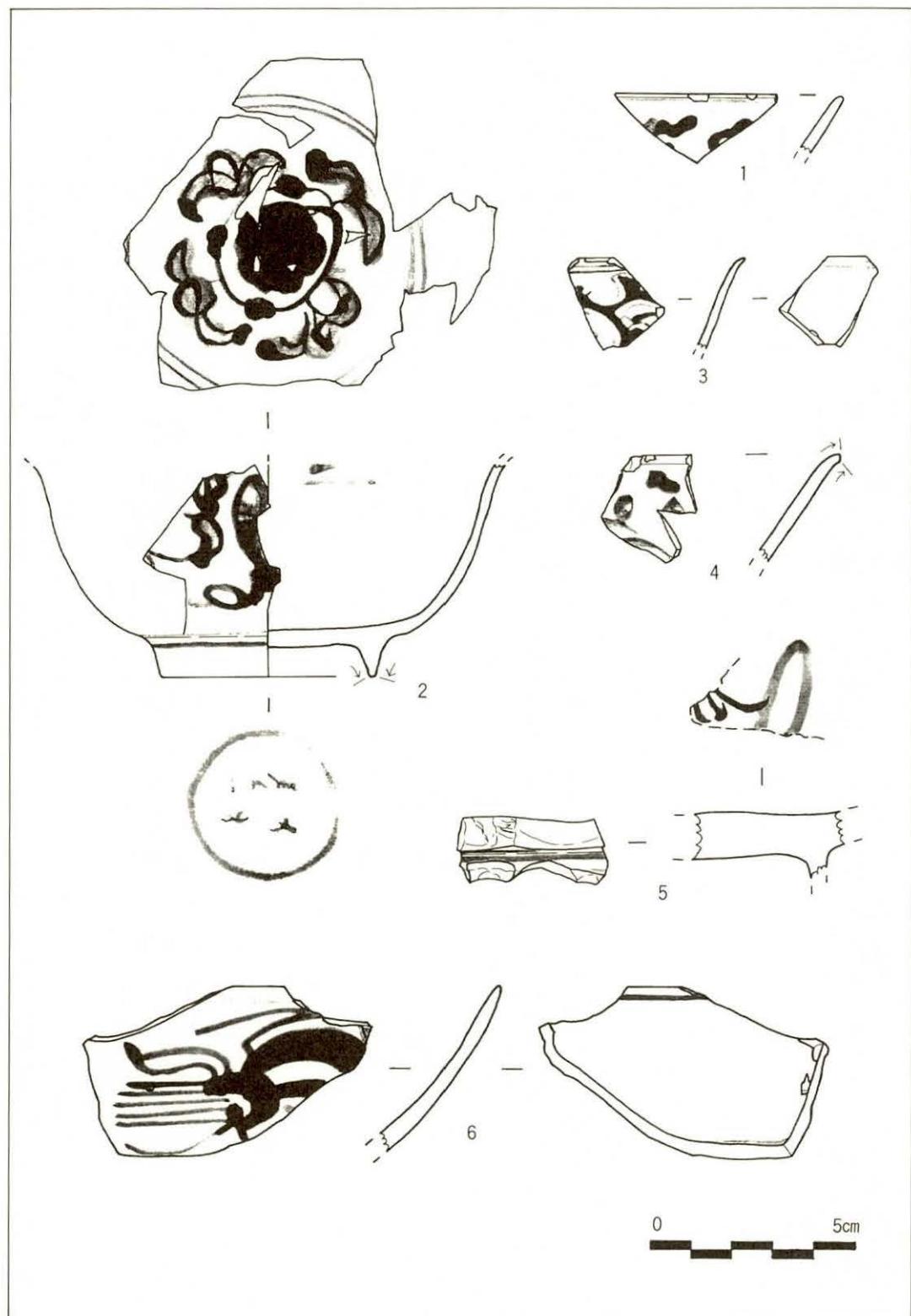
器種		年代	備考
磁器-染付-碗	①	中国景德鎮窯系 15c後半～16c前半	外面に折枝文 口縁部端反
	②	〃	15c末～16c中葉
	③	〃	〃
	④	〃	〃
	⑤	〃	16c後半～17c初 口縁部内側四方櫻文帶
	⑥	〃	〃



第21図 染付

第10表 第21図に対応する分類表

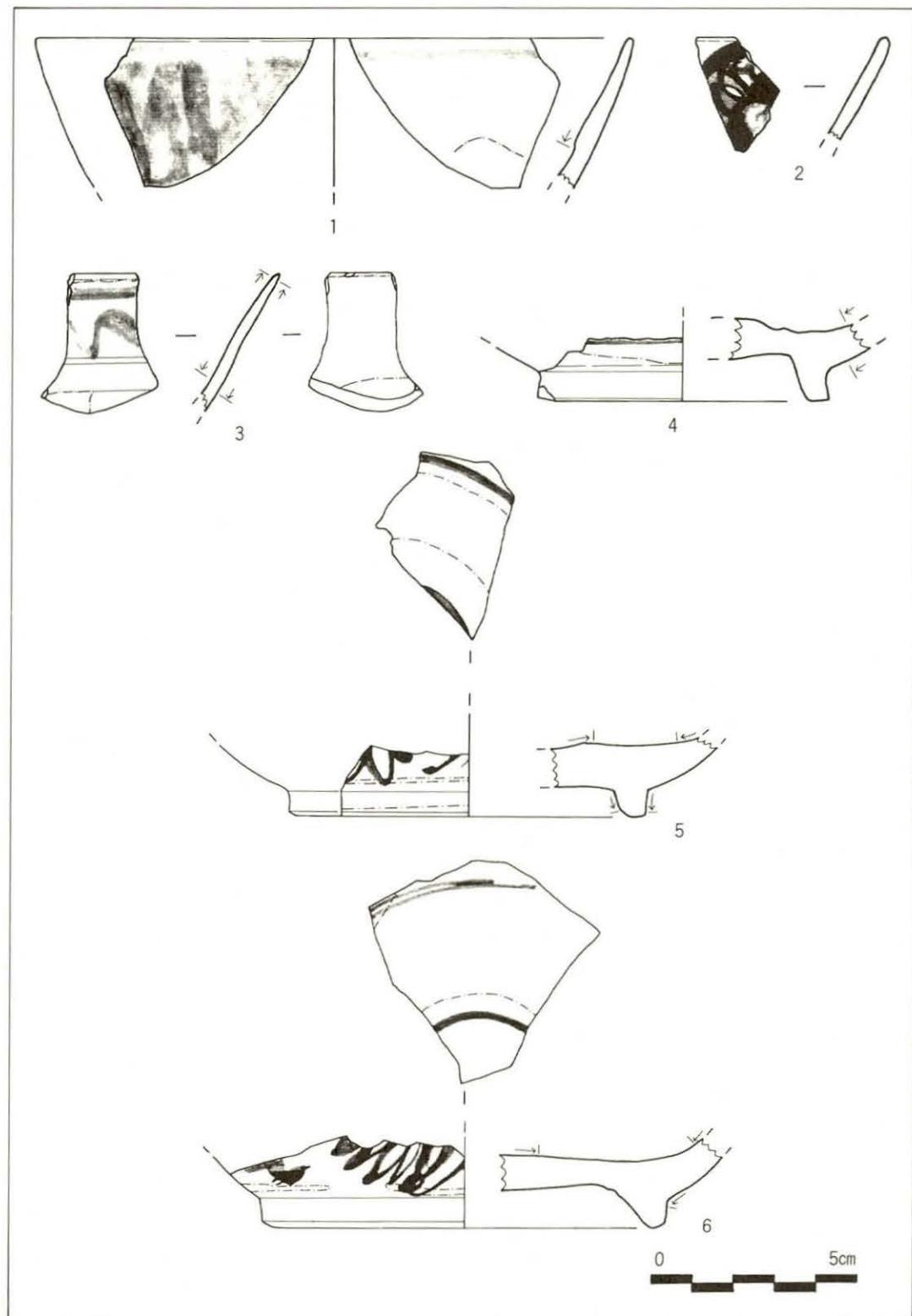
器種		年代	備考
磁器-染付-碗	①	中国景德鎮窯系 15c	外面に騎馬人物文 口縁部端反
	②	〃	外面に騎馬人物文 口縁部端反・置付のみ無釉
	③	〃	16c末～17c初 外面飛馬文
	④	中国福建・廣東系 16c後半～17c前半	外面花唐草文
	⑤	中国景德鎮窯系 16c末～17c前半	
	⑥	〃 15c末～16c中葉	見込に巻貝文か
	⑦	中国福建・廣東系 16c後半～17c前半	
	⑧	中国景德鎮窯系 16c	外面に列点文
	⑨	〃 15c後半～17c初	碗、小壺



第22図 染付

第11表 第22図に対応する分類表

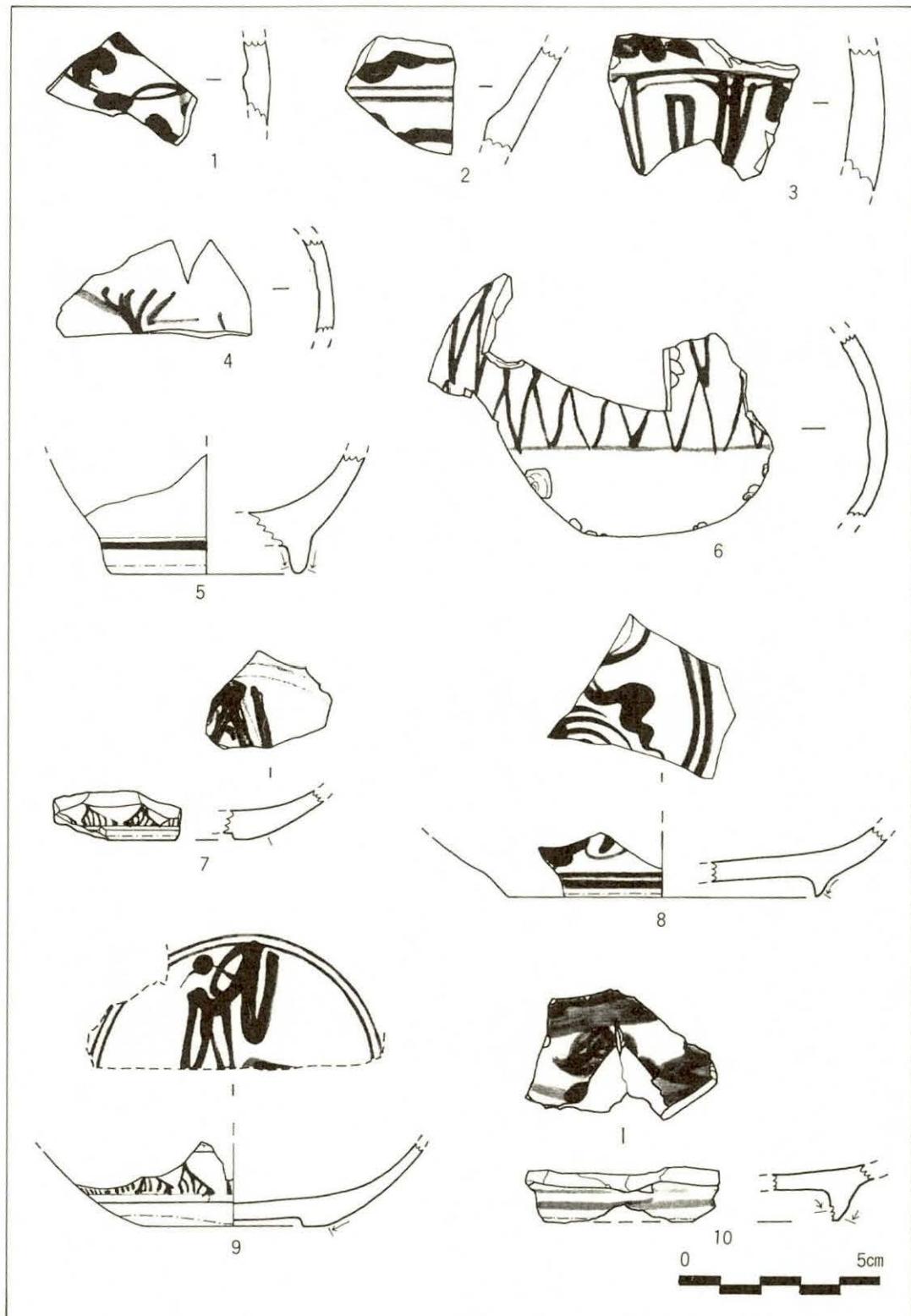
器種		年代	備考
磁器-染付	①	中国景德鎮窯系	15c後半～17c初 —碗、小壺
	②	〃	16c後半～17c初 —見込と外面花唐草文 高台内「大明年造」 口縁端反・疊付のみ無釉
	③	〃	17c
	④	中国福建・廣東産	17c後半～18c —口銹を施す
	⑤	肥前系	17c後半 —見込荒磯文・外側面龍文で あろう
	⑥	中国福建・廣東産	17c —外面龍文か



第23図 染付

第12表 第23図に対応する分類表

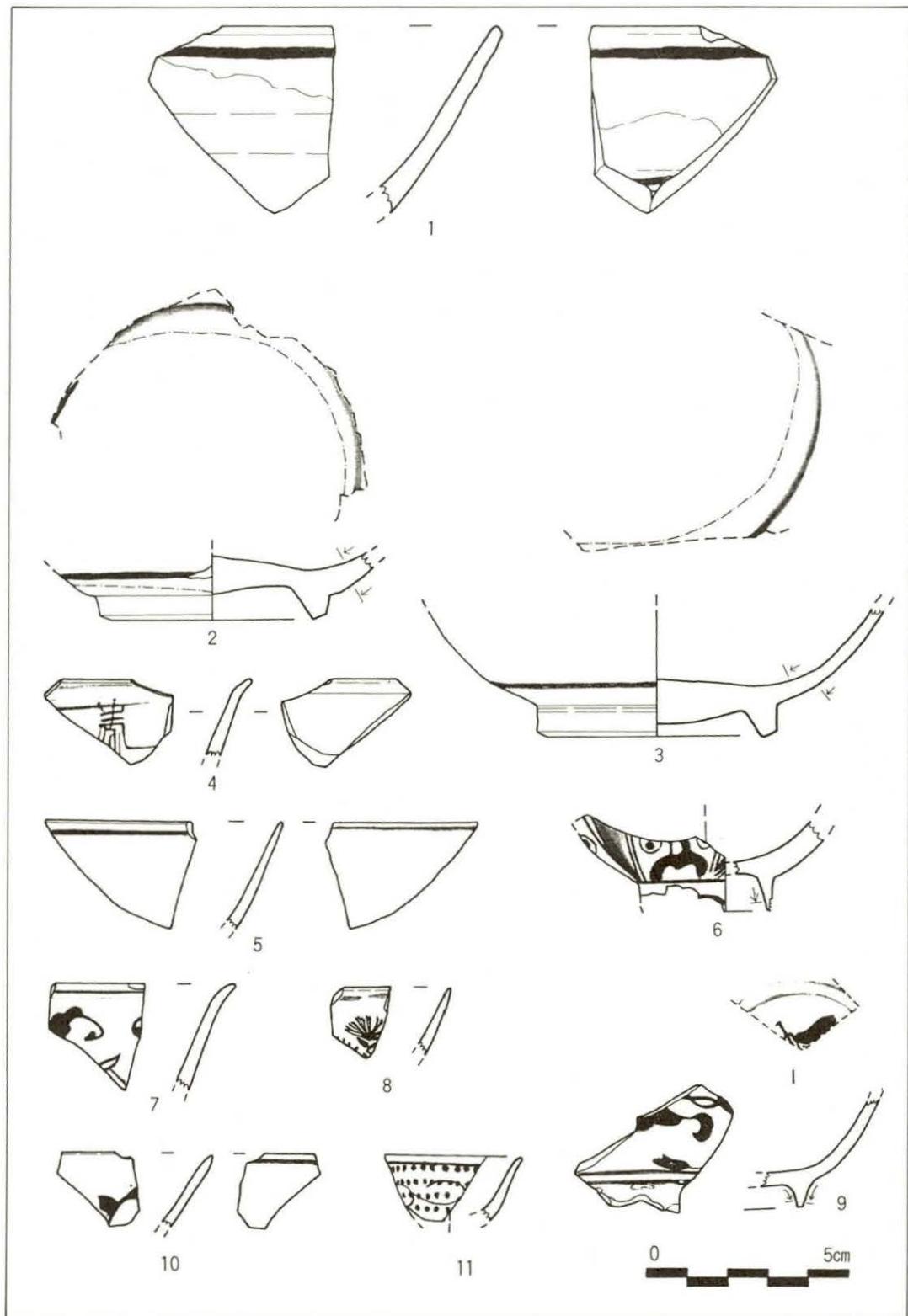
器種		年代	備考
磁器-染付-碗	①	中国福建・廣東産 17c後半～18c	
	②	〃	—外面花文を印判裝飾
	③	〃	—碗か皿 17c～18c
	④	〃	—碗か皿・底部内外無釉
	⑤	〃	—見込蛇ノ目釉剥ぎ・置付 無釉 17c後半～18c
	⑥	〃	—〃



第24図 染付

第13表 第24図に対応する分類表

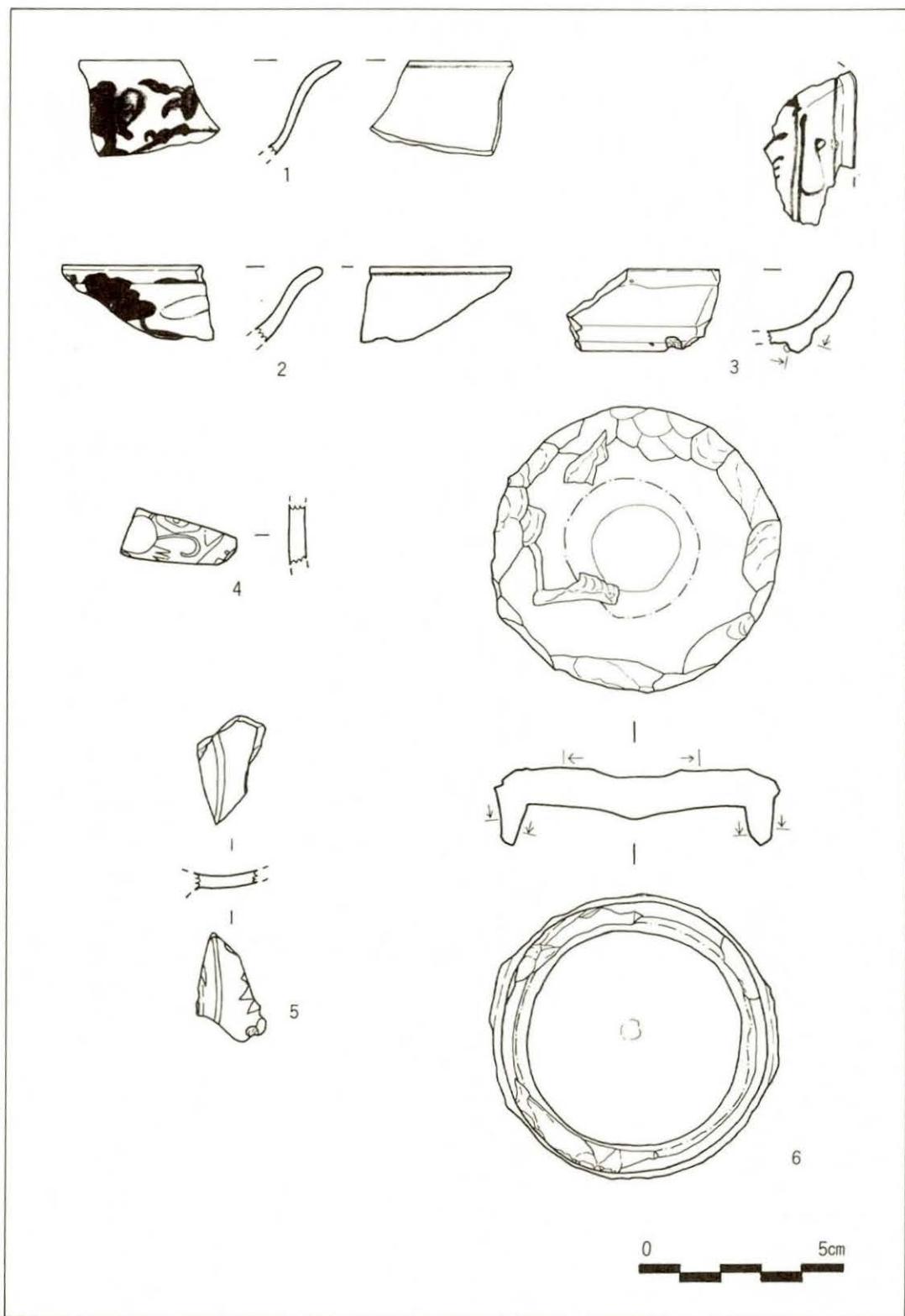
器種	年代	備考
磁器-染付	① 中国	16c~17c
	② "	"
	瓶 ③ "	"
	④ 肥前系	17c後半
	⑤ "	"
	⑥ "	"
	⑦ 中国景德鎮窯系	15c末~16c中葉
		基筒底・外面蕉葉文 見込植物文・脛付付近無釉
	⑧ "	"
	⑨ "	"
	⑩ "	15c末~16c



第25図 染付

第14表 第25図に対応する分類表

器種		年代	備考
①	中国福建・広東系	17c~18c	—碗か皿
②	"	"	— " 底部内外無釉
碗 ③	"	"	— " "
④	"	18c~19c初	—外面寿字草花文
⑤	国産か	明治以降	
⑥		現代磁器	
磁器-染付			
小碗 ⑦	中国	18c~19c初	
⑧	中国景德镇窯系	17c~18c	
小环 ⑨	"	17c	—外面花唐草文
⑩	"	"	— "
⑪	中国	19c	



第26図 染付・色絵

第15表 第26図に対応する分類表

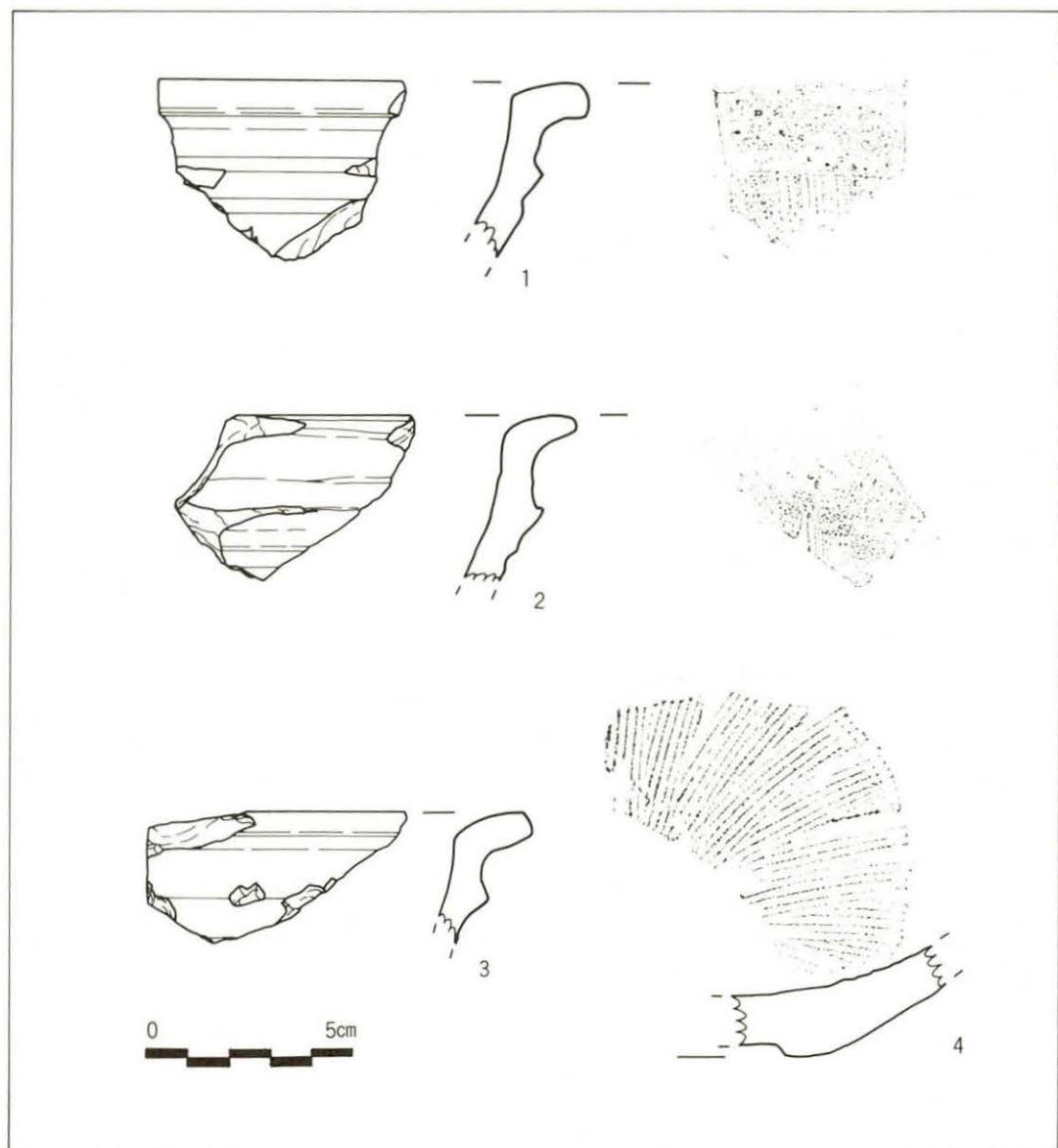
器種	年代	備考
磁器 染付 - 皿	① 中国景德鎮窯系 15c末～16c	
	② 中国 16c後半～17c初	外面唐草文
	③ 中国景德鎮窯系 16c末～17c初	角形
色絵	碗 ④ 中国福建系 18c～19c前半	外面に色絵を施すが剥落している
	皿 ⑤ 中国景德鎮窯系 16c	赤絵
染付 - 碗	⑥ 中国福建・廣東産 17c後半～18c	遊具か? 見込蛇ノ目釉剥ぎ・疊付無釉

ハ 陶 器

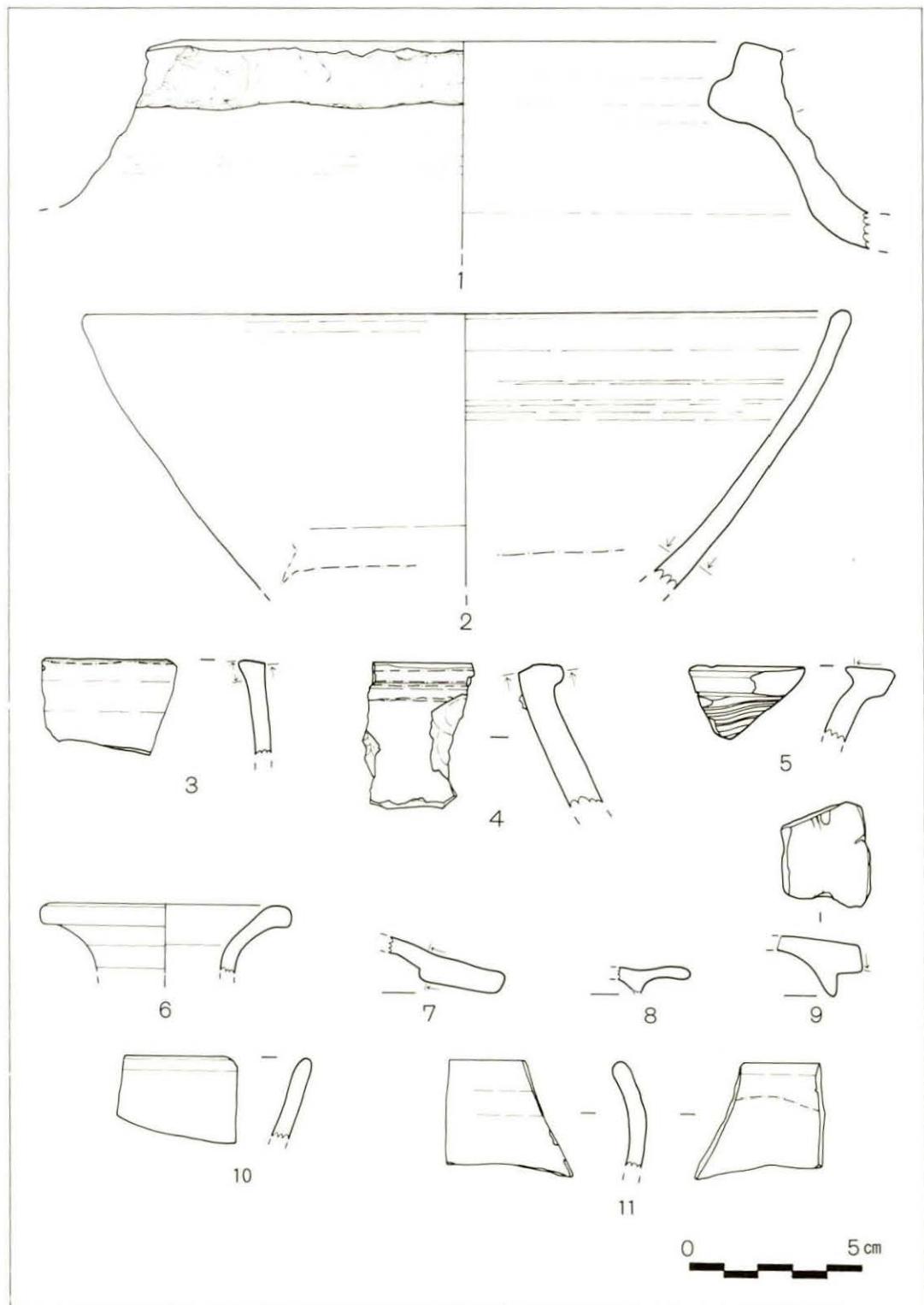
この項では、擂鉢と陶器について述べる。

擂鉢はいずれも破片で素材は陶器質である。櫛目の読めるものは1のみだが、7本の櫛目をセットにして内面口縁部まで搔揚げてある。口唇より2.5cmの間はナデ消してある。4の底部は碁笥底である。

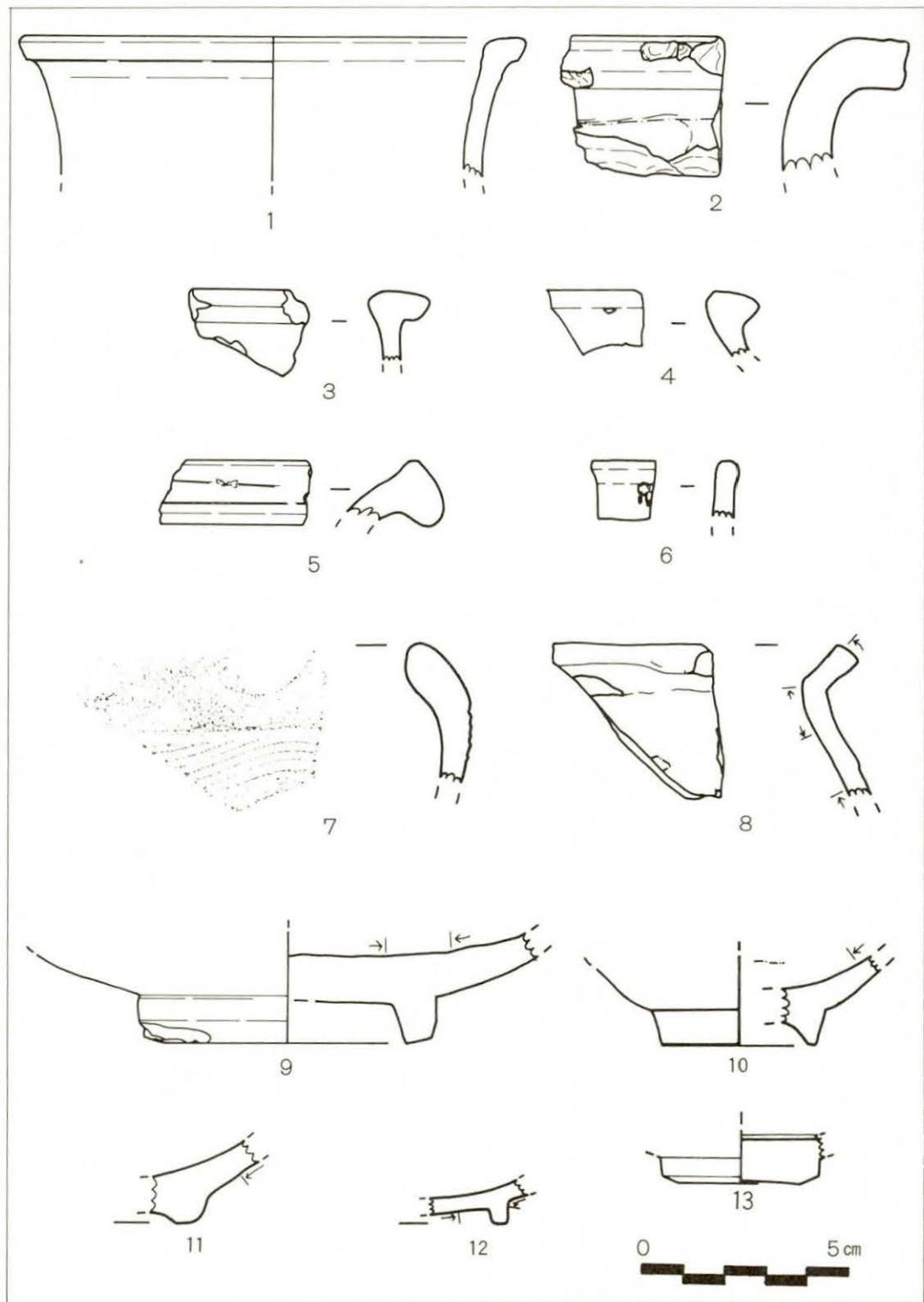
第28図～第30図に陶器をまとめた。第30図の10と11は、褐袖陶器であるが胎土などから国外から持ち込まれたものと思われる。



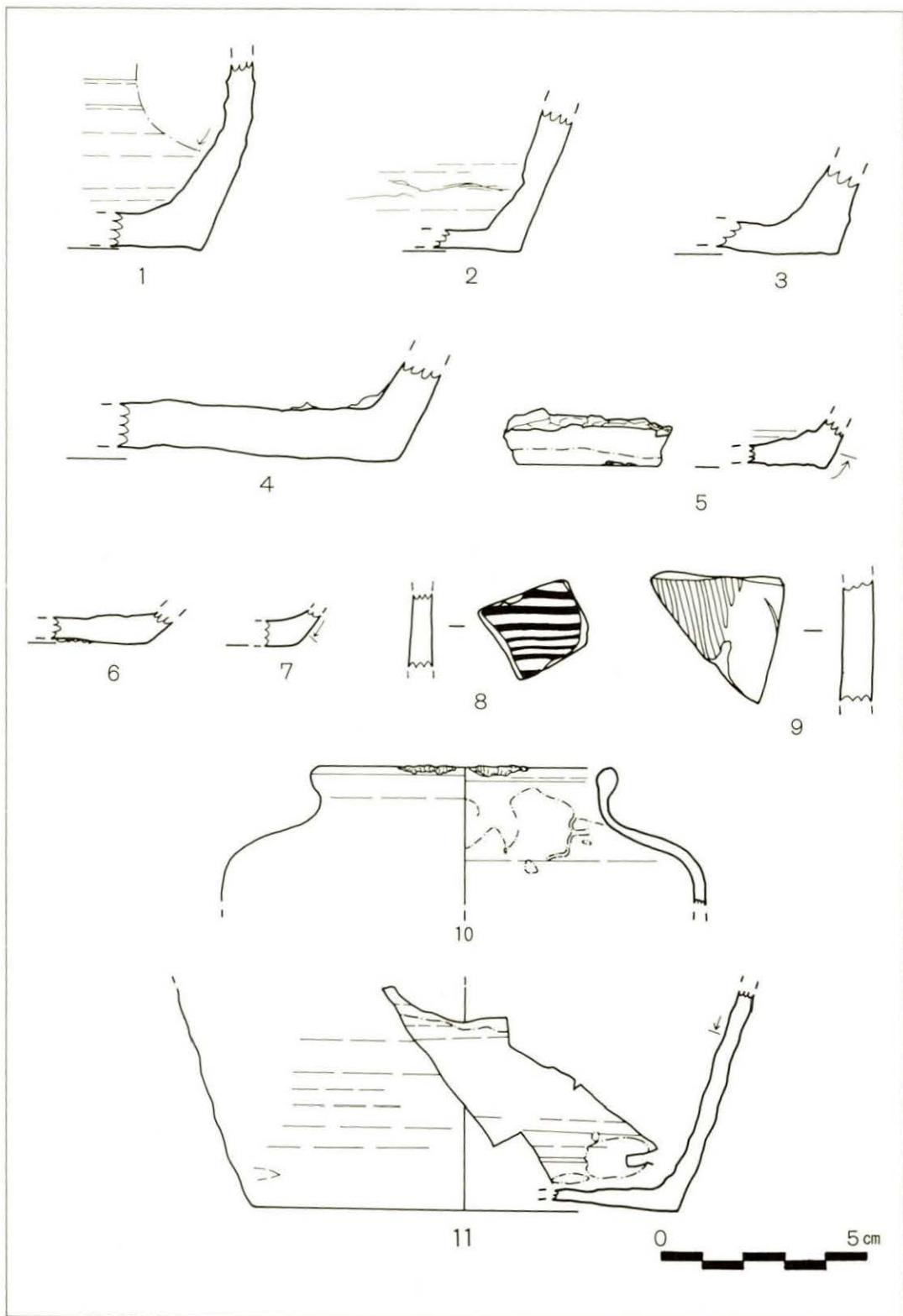
第27図 擂鉢



第28図 陶器



第29図 陶器

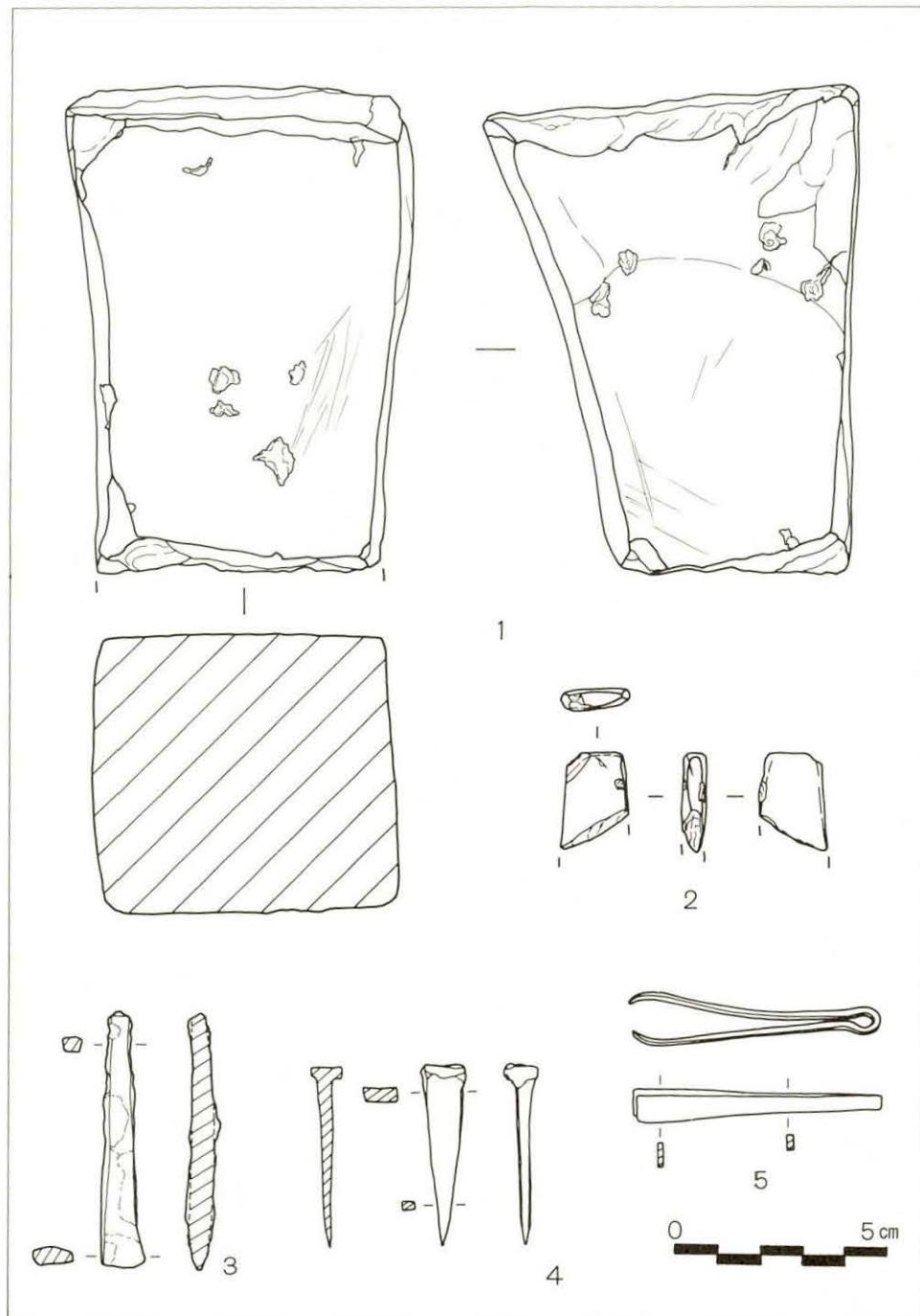


第30図 陶器

(二) 石製品・金属製品

砥石、石製品、鉄クギ、銅製の毛ぬきなどが出土した。

第31図の2の石製品は四面とも研磨が施してある。大半が欠損していると思われ全形をつかめなく残念である。

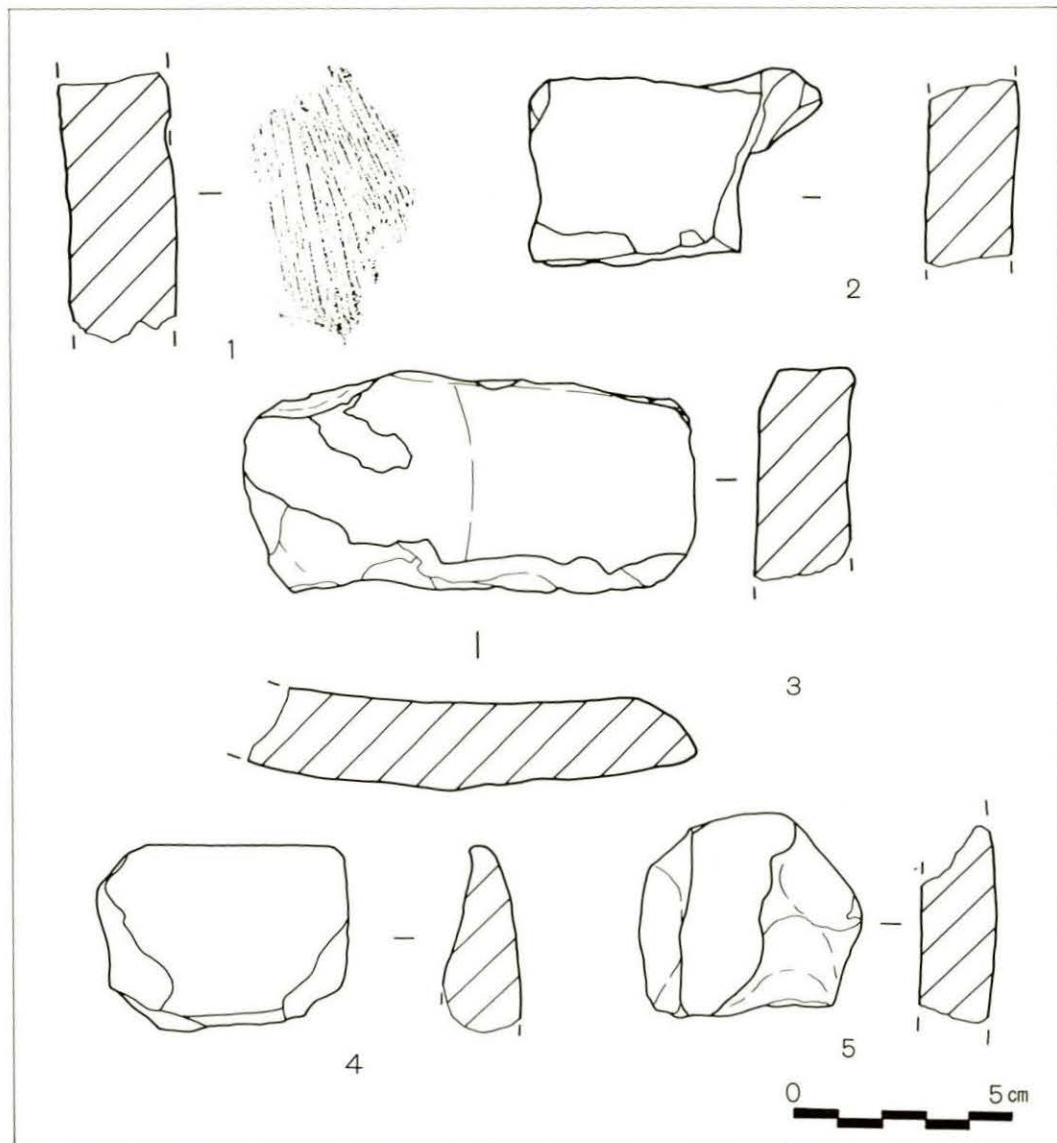


第31図 石製品・金属製品

木 瓦

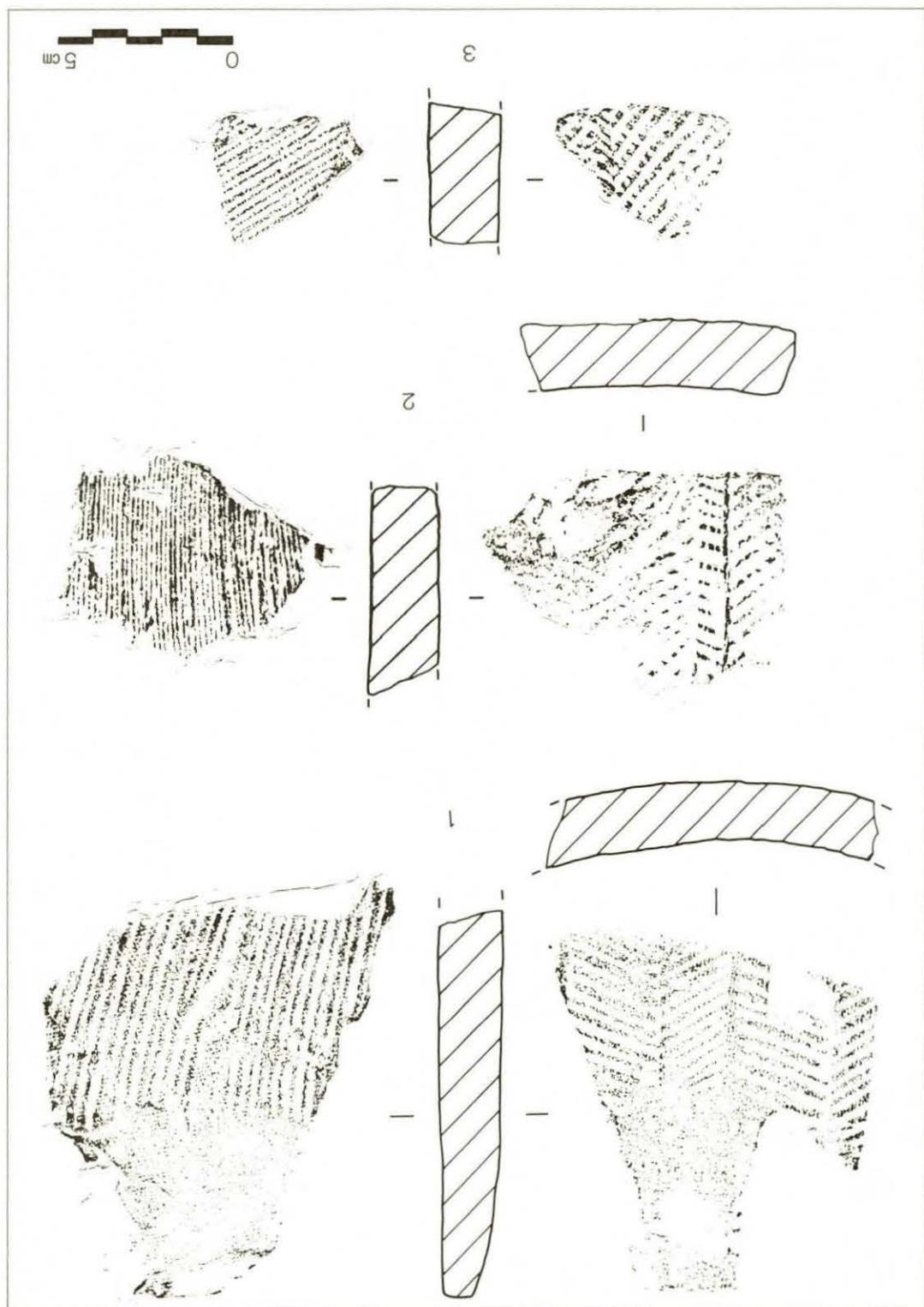
1960年に早稲田大学の大川清氏らが東屋部川口から高麗瓦を採集し、早くから注目されていた。一般的に高麗系瓦として扱っているが、本遺跡出土の古瓦は、「高麗瓦匠造」、「大天」、「天」などの型押銘文瓦は1点も検出されていない。

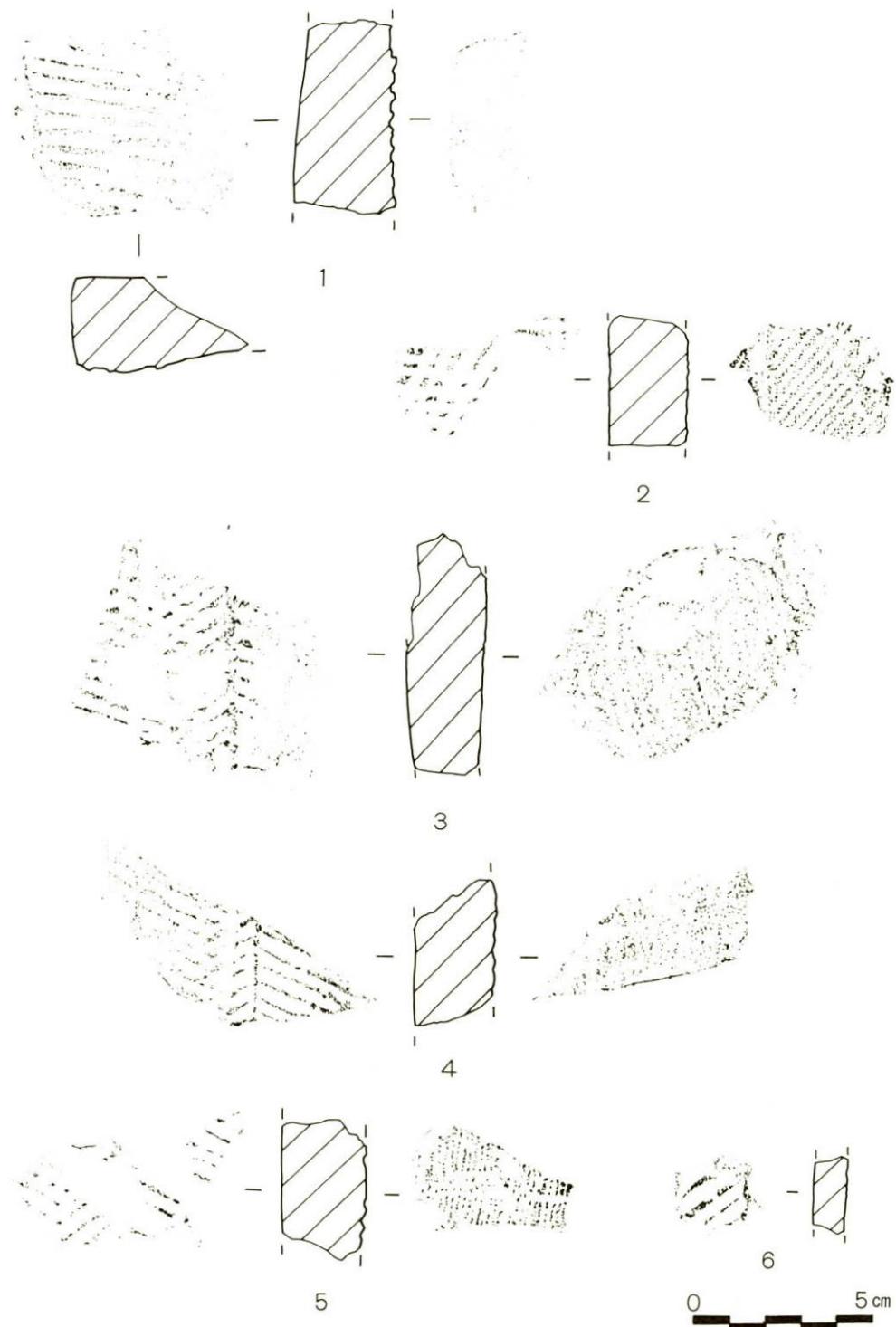
また、出土するのは、すべて女瓦で、なかには、第34図の1のように、一部膨脹がみられたり、第36図3のように、雑な仕上げのものがあったりする。また、なかには、焼成の良くないものなど、一見して不良品と思われるものが出土することに注目したい。



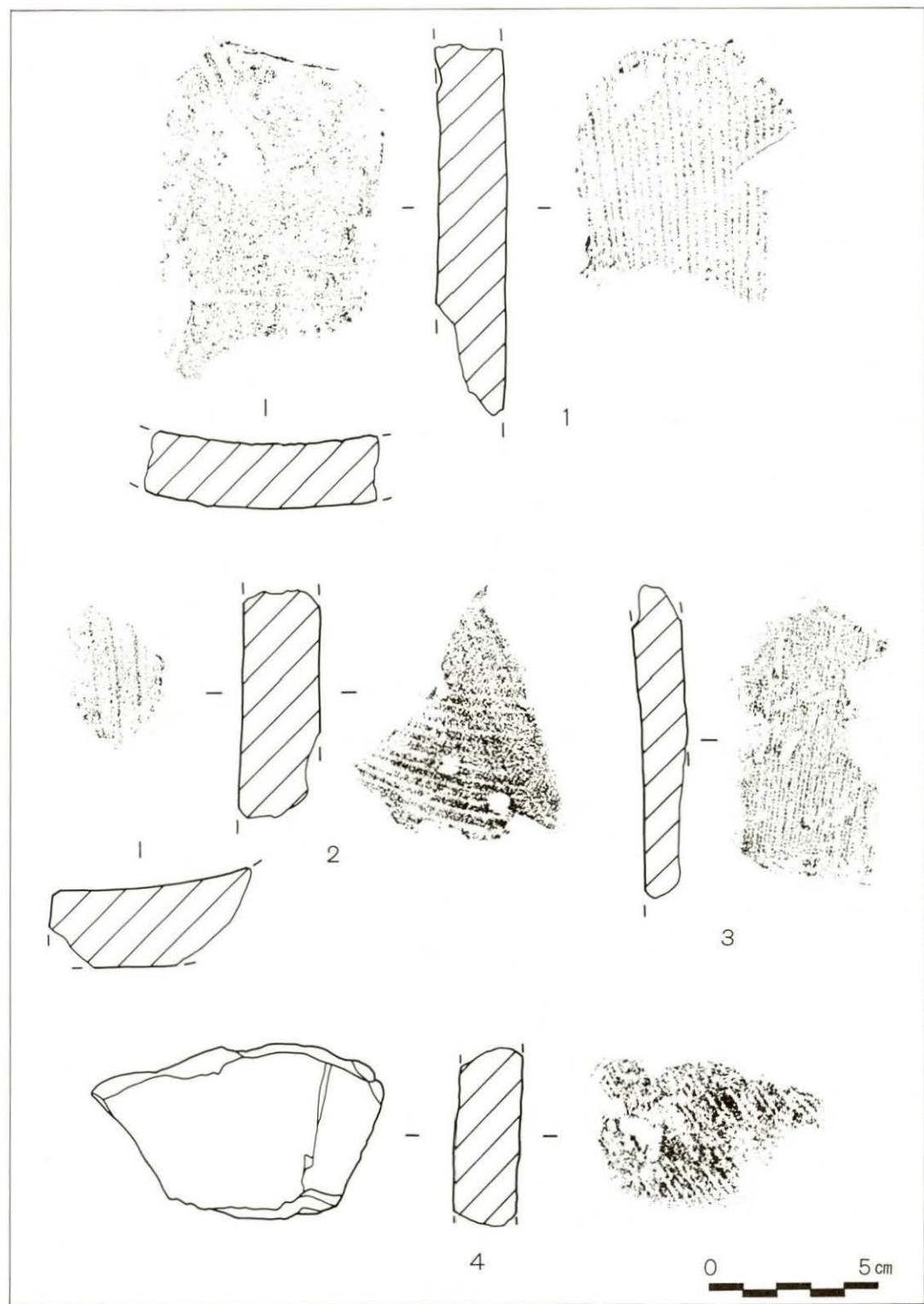
第32図 高麗系瓦

第33图 高麗菜瓦

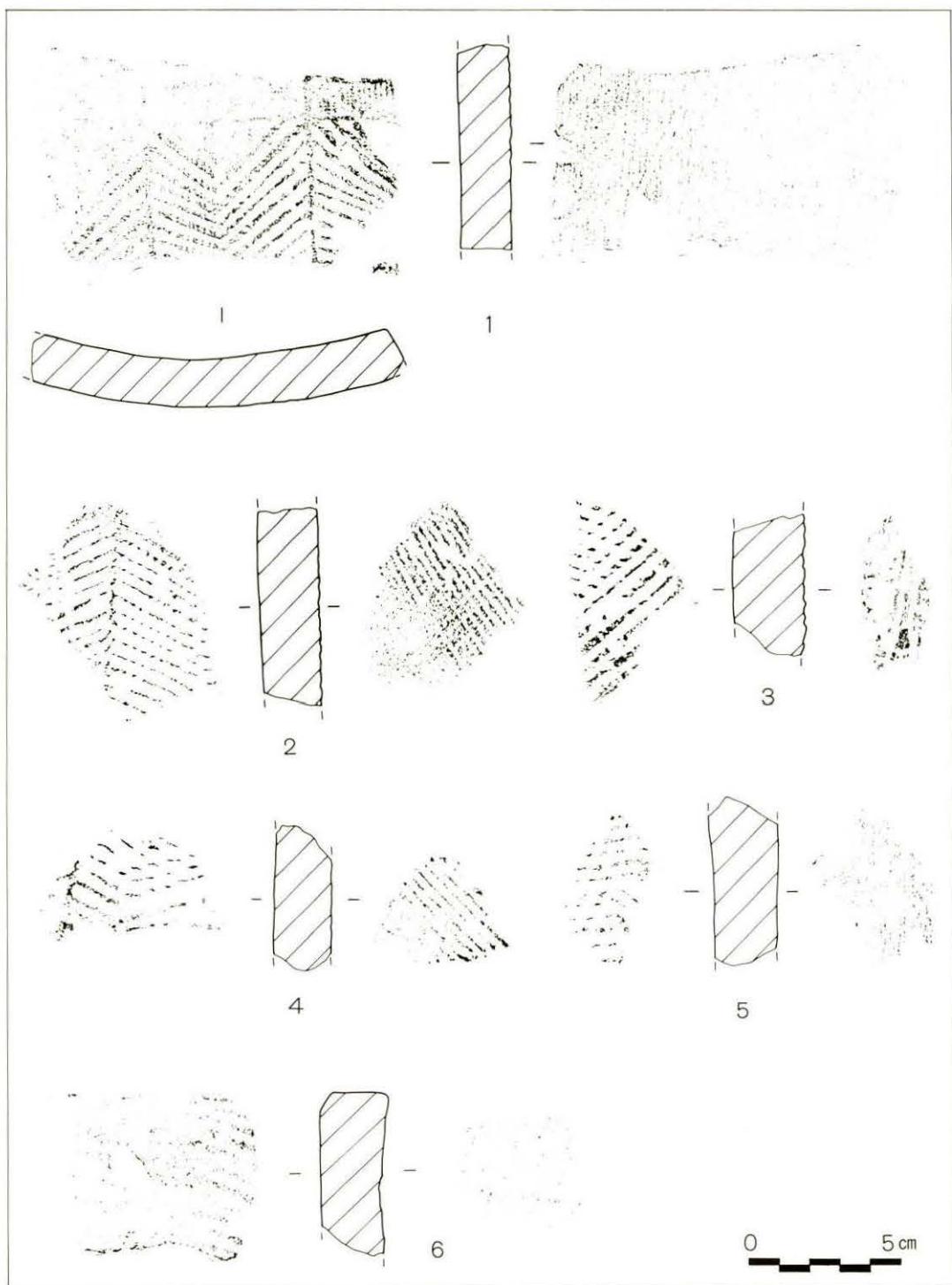




第34図 高麗系瓦



第35図 高麗系瓦



第36図 高麗系瓦

V. 高麗系古瓦の産地推定に関する一試み

高麗系古瓦は、「癸酉年高麗瓦匠造」銘のものを模して作ったものとされている。宇茂佐古島遺跡から出土する古瓦も、その形状から高麗系のものとみてよい。しかし、その古瓦の生産年代や、制作地はいまのところ決定的な証拠が見当たらず結論はでてない。本遺跡が、高麗系の瓦の消費地ではなく、生産に関わる遺跡としての可能性も考えられるということで、資料整理のなかで、この作業が行われた。

まず、第1の目的は、県内における高麗系の瓦の分布状況を把握し、それを胎土分析にかけることにより、生産地の究明に役立てようとのことであった。

また、2つ目には、瓦に使用する土の分析を数多く行うことにより使用土に関する情報が集まるのではないかということである。

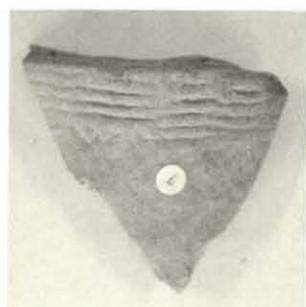
したがって、今回の分析は、高麗系の瓦を中心とするが、数点は、土そのものや、陶器、赤瓦なども項目に入れた。

高麗系瓦が現地生産か、輸入物なのかという議論をもっと深めるためにもこの作業を継続していく必要があると思う。そしてなによりも、分析データをもっと増やすことが重要だと思う。

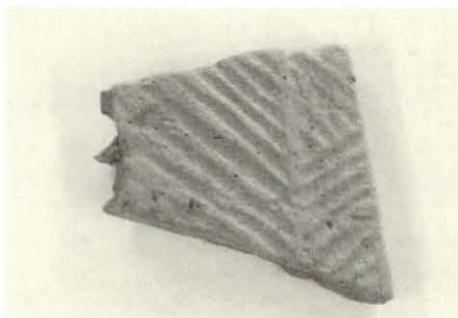
以下に各市町村に御指導、御協力いただいた分析調査の結果を報告する。



浦添グスク
(浦添市)



勝連グスク
(勝連町)



御細工所跡
(那霸市)

写真5 胎土分析をおこなった高麗系瓦

各教委社第275号
平成3年9月17日

各市町村
教育長殿

名護市教育委員会
教育長 玉城嘉眞

県内における高麗系瓦の分布調査と胎土分析について（協力依頼）

時下、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素から本市の文化財保護行政に対しご指導、ご協力賜り厚くお礼申し上げます。

さて、当市には、高麗系瓦を出土する宇茂佐（うむさ）古島遺跡、ナングシク遺跡などがあります。

この高麗系瓦について、

① 県内における分布状況の把握 ② 生産地の究明 ③ 使用土の分析等を主な目的に調査をしております。

つきましては貴市町村における分布状況と胎土分析に供する資料の提供をお願いします。

尚、提供いただきました資料は、当市教委でとりまとめ、奈良教育大学理学部教授 三辻利一先生へ胎土分析をお願いする手はずになっております。

また、同封の質問表は誠に勝手ながら9月30日までに御回答をお願い申し上げます。

調査の目的

1. 県内における高麗系瓦の分布状況の把握
2. 生産地の究明
3. 使用土の鑑定

質問表

1. 貴市町村に「高麗系瓦」の資料がございますか。

ある ない

2. ある とお答の市町村の方へ。この資料の出土あるいは採集された遺跡名をお書き下さい。

3. 出土あるいは採集した量はどのくらいですか。

完形品 点 破片 点

4. 胎土分析に必要な資料をご提供いただけますか。（最低1cm角は必要）
提供 できる できない

* 分析に使用した資料は破碎されますので、お返しすることはできません。

* 1. の質問で「ない」と答えた場合も質問表の発送をお願いします。

質問表に関する問い合わせ先

名護市教育委員会 社会教育課

tel. 0980-53-5429 内線131

第16表 高麗系瓦の分布調査表(1)

	市町村名	資料の有無	出土あるいは 採集場所		市町村名	資料の有無	出土あるいは 採集場所
1	国頭村			16	北中城村	無	
2	大宜味村			17	中城村		
3	東村			18	西原町	有	我謝遺跡 内間御殿
4	今帰仁村	無		19	浦添市	有	浦添城跡 沢嶽グスク 真久原遺跡 嘉門貝塚
5	本部町	無		20	那霸市	有	御細工所跡 崎山御嶽遺跡 久茂地古井戸遺跡
6	宜野座村	無		21	仲里村		
7	金武町	有	金武観音寺構内	22	具志川村	無	
8	伊江村	無		23	南大東村		
9	伊平屋村	無		24	北大東村	無	
10	伊是名村	無		25	豊見城村	無	
11	恩納村	有	山田城跡	26	糸満市	無	
12	石川市	無		27	東風平町	無	
13	与那城村	無					
14	勝連町	有	勝連城跡				
15	具志川市	無					

第16表 高麗系瓦の分布調査表(2)

	市町村名	資料の有無	出土あるいは 採集場所		市町村名	資料の有無	出土あるいは 採集場所
28	読谷村	無		40	具志頭村	無	
29	嘉手納町	無		41	玉城村		
30	沖縄市	無		42	知念村	無	
31	北谷町	無		43	佐敷町		
32	宜野湾市	有	大山前門原遺跡	44	与那原町		
			大謝名同原遺跡				
			喜友名西原遺跡	45	大里村	無	
33	下地町			46	南風原町	無	
34	上野村	無		47	渡嘉敷村		
35	伊良部町			48	座間味村		
36	多良間村	無		49	栗国村	無	
37	石垣市	無		50	渡名喜村	無	
38	竹富町	無		51	平良市		
39	与那国町			52	城辺町	無	

沖縄本島の遺跡出土灰色瓦の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1) はじめに

生産地である窯跡が残っている土器類、例えば、須恵器、瓦、中世陶器などの産地推定は蛍光X線分析のデータから窯跡へ結びつけることによって可能となる。この場合には、まず、窯跡出土土器を分析して、どの元素が地域差を表示するのか、前もって調べておかなければならない。全国各地の窯跡出土須恵器を分析した結果、K、Ca、Rb、Srの4因子が有効に地域差を表示することが発見された。さらに、全国各地の花崗岩類を分析した結果、窯跡出土須恵器の地域差に対応するようにして花崗岩類にも地域差があることが示された。日本列島の土台を構成する花崗岩類も決して一枚岩ではなかったのである。そして、K、Ca、Rb、Srの4元素は主として、花崗岩類中の主成分鉱物である長石類中に存在することが示された。この結果、窯跡出土須恵器にみられる地域差は地質に基因することが判明した。

他方、窯跡の残っていない土器類の産地推定は困難である。「産地」そのものの定義が困難だからである。だからといって、これらの土器類の元素分析が役に立たない訳ではない。これらの土器類を蛍光X線分析することによって、考古学に役立つ情報を引き出すことは可能である。この場合にも、前記のK、Ca、Rb、Srの4因子は有効である。これらの因子によって示される差違は地質に関係するからである。

今回分析した高麗瓦については沖縄本島内にこれまでのところ窯跡は発見されていない。また、これと同じ胎土をもつ瓦の窯跡も朝鮮半島側で確認されている訳ではない。高麗瓦の産地は全くわかっていない訳である。高麗瓦の産地を知る手掛りを求めて、今回の分析が行われた。

2) 分析方法

瓦片試料は表面を研磨して付着汚物を除去したのち、タンクステンカーバイト製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎された。粉碎することの意味は試料を均質化することと、成形して入射X線や検出器に対して一定の幾何学的条件を持つ試料をつくるためである。このあと、粉末試料は塩化ビニール製リングの枠の中に入れ、約15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmの錠剤試料を作成した。この錠剤試

料にX線を照射して発生する蛍光X線を測定した。蛍光X線スペクトルの測定には2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線スペクトロメータを使用した。2次ターゲットにTiを使用し真空中でK、Caを、また、Agを使用して空気中でFe、Rb、Srを測定した。バックグラウンドを差し引いて、蛍光X線強度としてピーク面積が求められた。分析値は同時に測定された岩石標準試料JG-1の各ピーク面積を使って標準化された。

3) 分析結果

分析値は表17にまとめられている。これらの試料を分布図上で分類してみよう。図37にはRb-Sr分布図を示す。須恵器の分析データから、この分布図が地域差を有効に表示することが示されている。図37をみると、No1、No2だけがずれて分布し、残りはよくまとまっていることがわかる。Sr因子でNo1、2は他の高麗瓦とは異質であることがわかる。図38にはK-Ca分布図を示す。同じ産地の須恵器はこの分布図上でもまとまって分布する。図38をみると、No1、2の他に、No5、8、13、14、17も少しずれて分布する。この結果、No3、4、6、7、9、10、11、12、15、16の10点の瓦は同じ胎土をもつことが示された。

K、Ca、Rb、Srの4因子を使い、クラスター分析で分類した結果を図39に示す。この図では横列に試料番号で類似したものから順に試料を並べてある。縦軸はK、Ca、Rb、Srの4因子を使い、最短距離法で計算した類似度を示す。類似したものから順に一本の枝に結び付けられていく。そして、類似していないところで縦軸にギャップが生じる。例えば、No15とNo14の間にギャップがあるが、No14とNo17の間にもある。さらに大きいギャップはNo13とNo2の間にある。これらのどこのギャップで区切るかについては本法は特に客観的な判断を下ろしてくれない。この点が本法の欠点である。それで、本法を使って区切る場合には筆者は必ずRb-Sr分布図上で確かめることにしている。今回はNo15とNo14の間で区切ることにした。そうすると、No3、11、4、12、6、7、9、10、16、15の10点がグループにまとめられることになる。これが前述した図37と図38による分類結果に他ならない。

この結果、同じ高麗瓦でも胎土は必ずしも一色ではないことが明らかになった。この違いが何に基因するかを考えるために、まず、年代と対応させてみた。ところがグループにまとめられた瓦の中には年代が別のものも含まれており、また逆に、異質と推定された瓦の中にもグループの瓦と同じ年代のものも含まれており、必ずしも瓦の年代

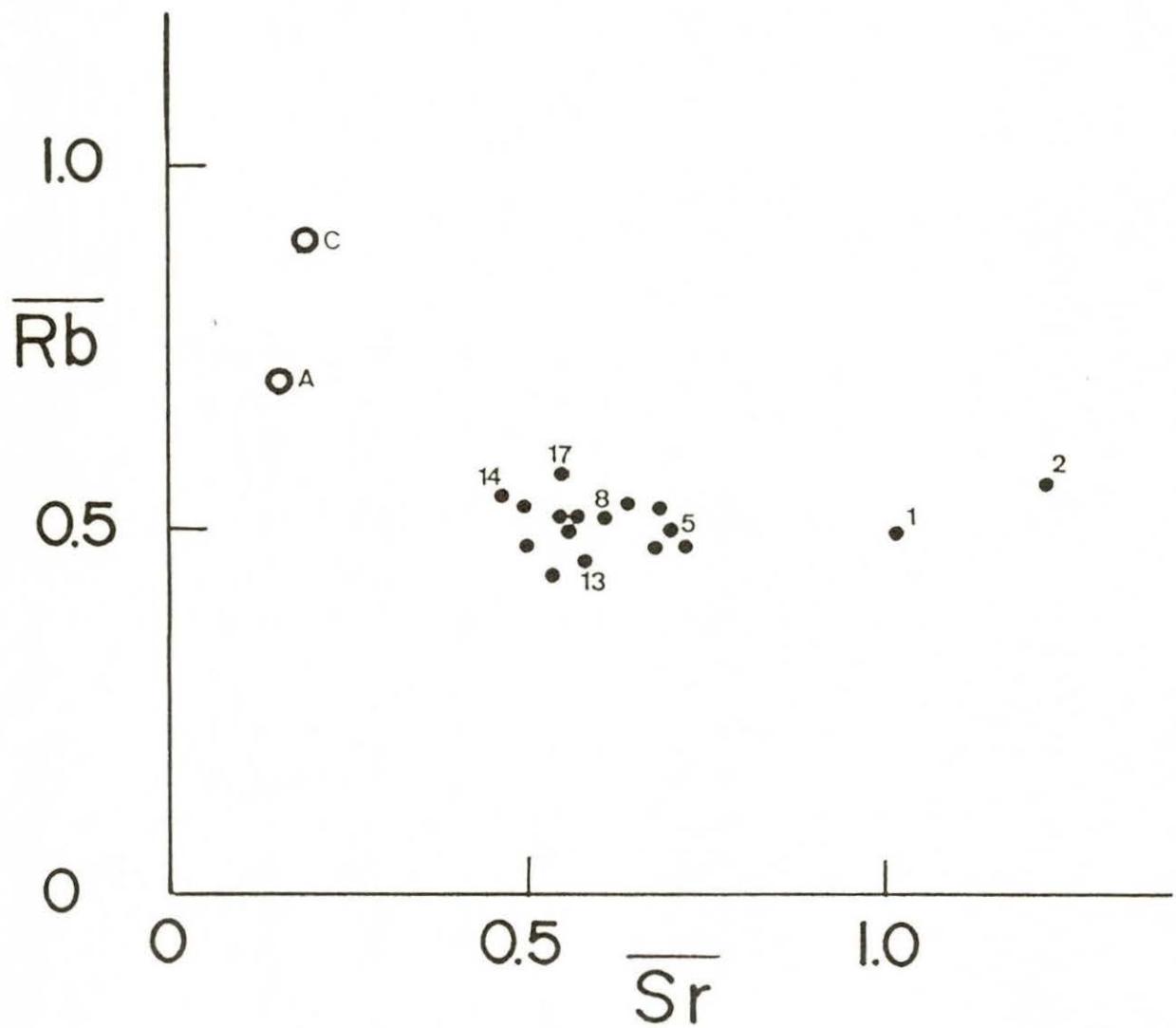
差が瓦の材質の違いには関係ないことがわかる。次に、出土遺跡との対応を試みた。図40には今回分析した瓦の出土遺跡分布図を示してある。表17をみて比較すると、浦添グスクのNo 7とNo 9は同じ胎土、したがって、同じ所で作ったと推定される瓦であるが、No 8は異質である。また、久茂地古井戸のNo11とNo12は同じ14C代の瓦であり、胎土も同質であるが、No13、No14は同じ14C代であるにもかかわらず胎土は異質である。ただし、No13とNo14は同質で同じ産地でつくられた瓦とみられる。このようにして、瓦の胎土の違いは簡単には遺跡にも対応しない。ただ、明快にいえることは高麗瓦の胎土は一色ではなく、いくつかの別産地でつくられた瓦が混じっているということである。したがって、このデータだけでは朝鮮半島から持ち込まれたか否かの判断はできない。

そこで、これら高麗瓦が沖縄本島産である可能性を確かめる一つの方法として、現代の沖縄の陶器を分析してみることにした。一例として、大宜味村窯元、山原窯で焼成された陶器片とその素材粘土を分析した。図37、38に示してある。Aが現代陶器、Cが粘土の分析値である。Rb量が多く、Ca、Sr量が少ないのが特徴であり、高麗瓦とは別胎土であることがわかる。これは一例に過ぎないので、この結果だけで高麗瓦が沖縄本島産ではないという結論も引き出せない。

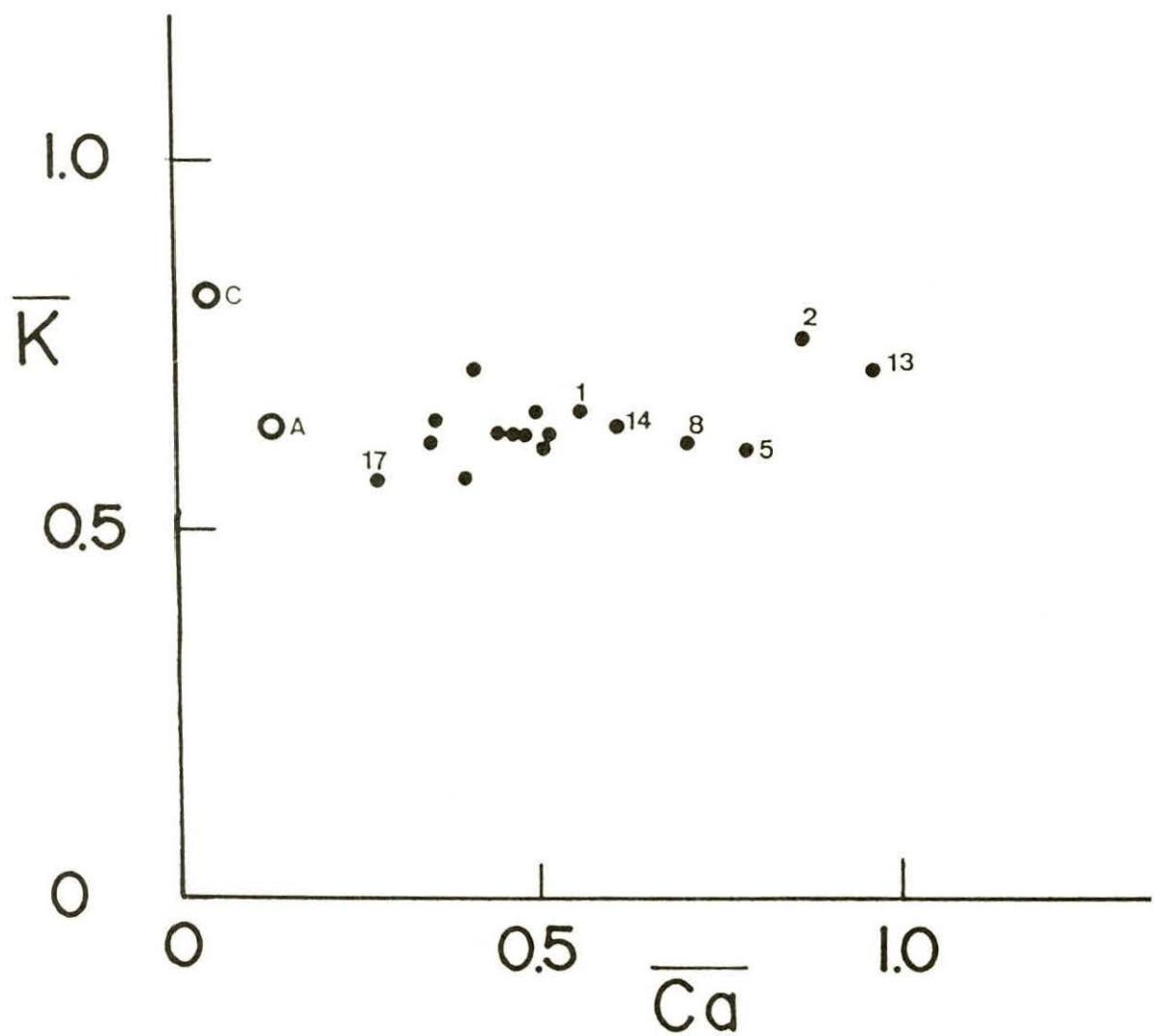
残念ながら、今回の分析データから高麗瓦が朝鮮半島産であるとも、沖縄本島産であるとも結論を下せなかった。高麗瓦の胎土は単色ではなく、産地の解明はそう簡単ではなさそうである。さらに多くの高麗瓦を分析し、また、沖縄本土の多くの陶器片を分析していく過程でその産地について手掛かりが得られるものと思われる。

第17表 沖縄灰色瓦の分析値

			K	Ca	Fe	Rb	Sr
宇茂佐古島遺跡 (名護市)	No 1	15~16c	0.658	0.557	2.90	0.498	1.02
金武観音寺構内 (金武町)	No 2	16~17c	0.759	0.873	3.34	0.570	1.23
金武観音寺構内 (金武町)	No 3	16~17c	0.654	0.360	3.16	0.481	0.499
内間御嶽 (西原町)	No 4	15c前後	0.630	0.467	2.46	0.478	0.684
勝連グスク (勝連町)	No 5	15c前半	0.610	0.794	3.38	0.504	0.699
勝連グスク (勝連町)	No 6	15c前半	0.633	0.524	4.02	0.522	0.566
浦添グスク (浦添市)	No 7	12~14c	0.656	0.495	3.38	0.509	0.555
浦添グスク (浦添市)	No 8	12~14c	0.615	0.713	3.25	0.523	0.613
浦添グスク (浦添市)	No 9	12~14c	0.613	0.512	3.91	0.536	0.636
崎山ウタキ (那霸市)	No 10	14c頃	0.629	0.446	3.66	0.532	0.499
久茂地古井戸 (那霸市)	No 11	14c頃	0.616	0.346	2.46	0.435	0.536
久茂地古井戸 (那霸市)	No 12	14c頃	0.634	0.483	2.68	0.480	0.724
久茂地古井戸 (那霸市)	No 13	14c頃	0.717	0.974	3.63	0.463	0.583
久茂地古井戸 (那霸市)	No 14	14c頃	0.637	0.613	3.61	0.549	0.466
宗元寺跡 (那霸市)	No 15	16c頃	0.722	0.411	3.60	0.517	0.564
御細工所跡 (那霸市)	No 16		0.571	0.397	3.12	0.530	0.688
御細工所跡 (那霸市)	No 17		0.571	0.277	1.89	0.579	0.551

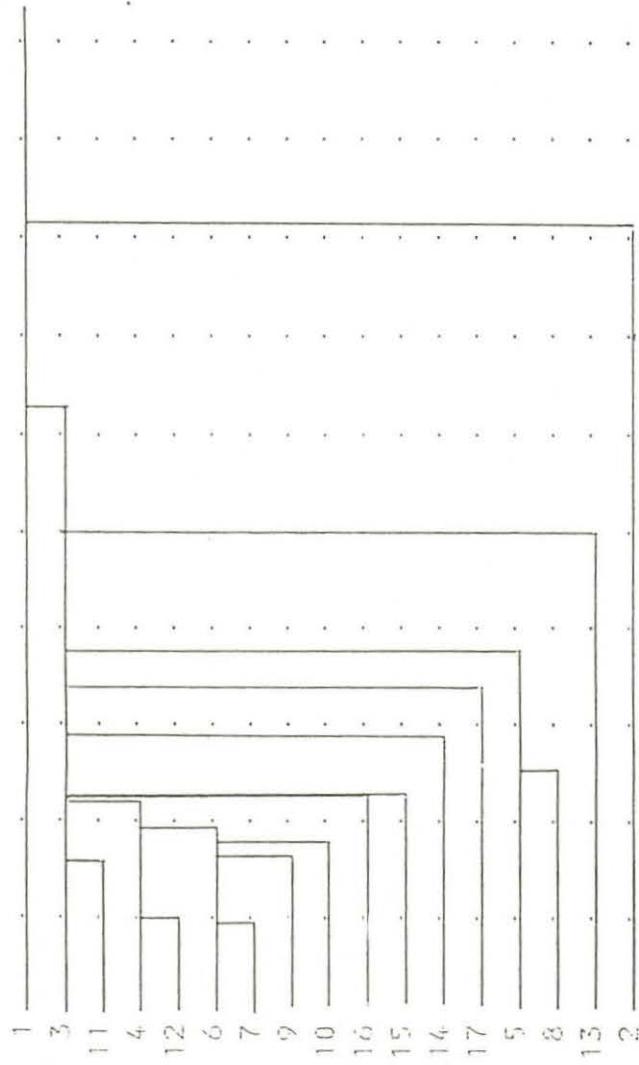


第37図 灰色瓦のRb-Sr分布図



第38図 灰色瓦のK-Ca分布図

1. $\lambda_{\text{eff}} = 0.5$ mm 2. $\lambda_{\text{eff}} = 0.7$ mm



Hit RETURN key

第39図 灰色瓦のクラスター分析



第40図 灰色瓦の分布図

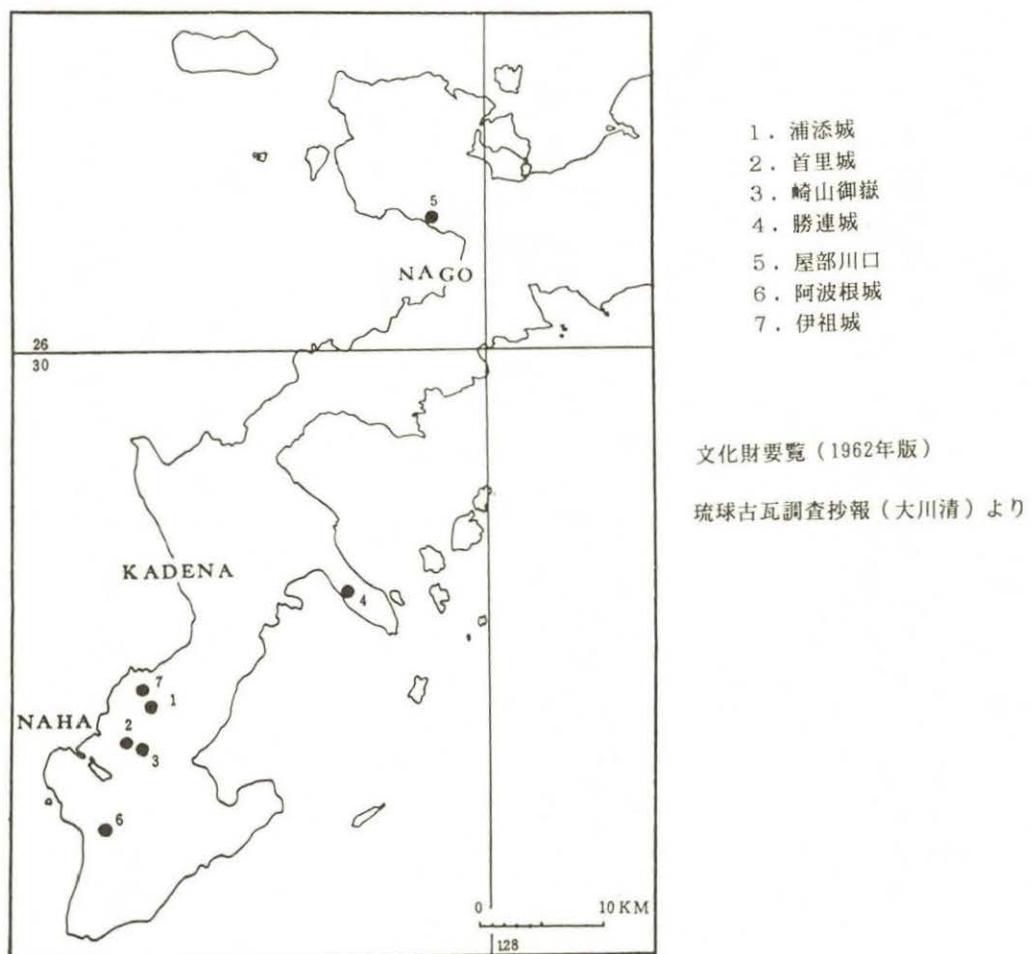
VI. 調査の成果と課題

本遺跡の調査の目的は、これから施行される区画整理事業との調整資料を整えるのが主な目的である。

遺跡の範囲については、第5図に示したように、一応のラインが把握された。遺跡の性格については、これまでの調査で決定的な資料が検出できず、小規模な限られた範囲の調査ということもあり、資料不足である。これからの本格調査の課題である。

次に遺物について述べると、土器、陶磁器、高麗系瓦、石製品、鉄、銅製品などが出土した。全体的には、遺物の量は多くなく、その大半は、陶磁器である。

遺物の中心をなす、陶磁器の年代は、14C～19Cまであるが、なかでも、14C～16Cのものが中心をなすようだ。



第41図 琉球古瓦出土地

第18表 琉球古瓦分類出土地一覽

遺構については、第9、10図に示したが、その遺構についての明快な答は出せなかつた。柱穴についてもいくつか確認できたものの調査範囲の制約があり、住居跡等のプランをつかむまでには到つてない。また、高麗系瓦の製作にかかる資料の検出も期待されたが、今のところ発見されてない。

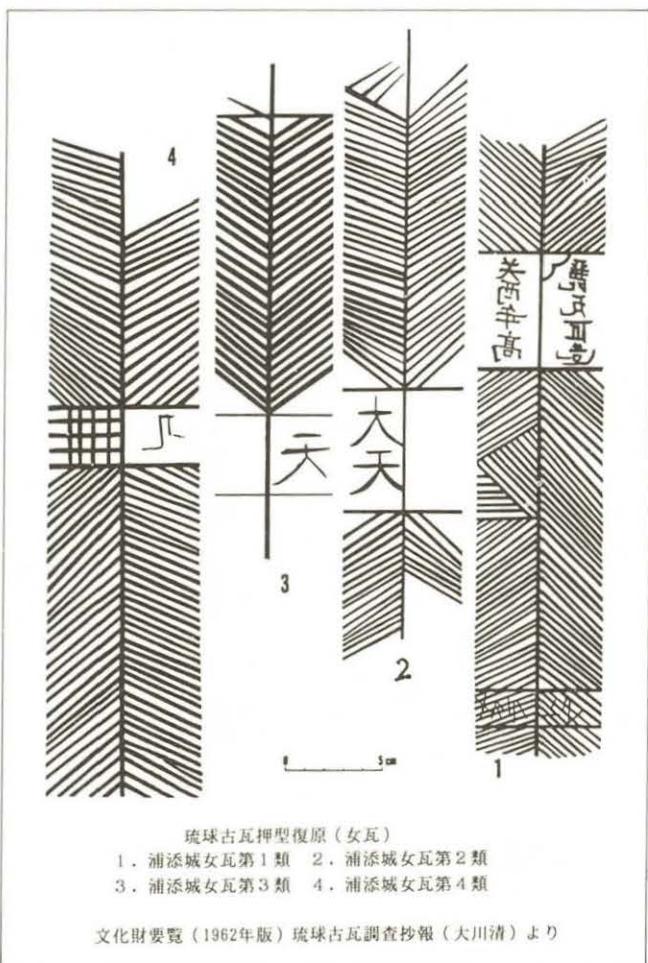
次に、本遺跡の最も注目すべきともいえる古瓦について若干の検討を加えてみたい。1960年9月2日に大川清氏らは、屋部川口を調査され、高麗瓦を採集している。そのときの調査報告を『琉球古瓦調査抄報』にまとめられているが、それによると、「屋部川口で、現在海岸ぞいの道路がこの川口で橋を渡る。この橋付近、つまり橋の南岸の河原に古瓦片、陶磁片が散在している。鎧、宇瓦は発見できなかつた。男瓦は浦添城跡1類、女瓦は浦添城跡4、5類があつた。」と記されている。

これまでの当市教委の調査では女瓦以外の発見はなく、今後の調査の進み具合によつては発見される可能性があり注目したい。

女瓦の文様については、本遺跡出土の古瓦はいずれも小片で断定はしがたいが大川清氏の浦添城女瓦第4類に属すると思われる。第34図1をみると、浦添城女瓦第2類と3類の要素も持ち合わせているので今後の検討課題である。

第32図1や第44図に示した瓦は文様の向きが逆になっている例である。先の方がいくぶん厚みが薄くなっているのがわかる。

次に、出土古瓦のなかに、不良品と思われる向きの物が混ざっていることについて考えてみたい。もし、高麗系瓦が高麗国あるいは、他の場所からの輸入品とすると、積み出す前に十



第42図 琉球古瓦押型復原

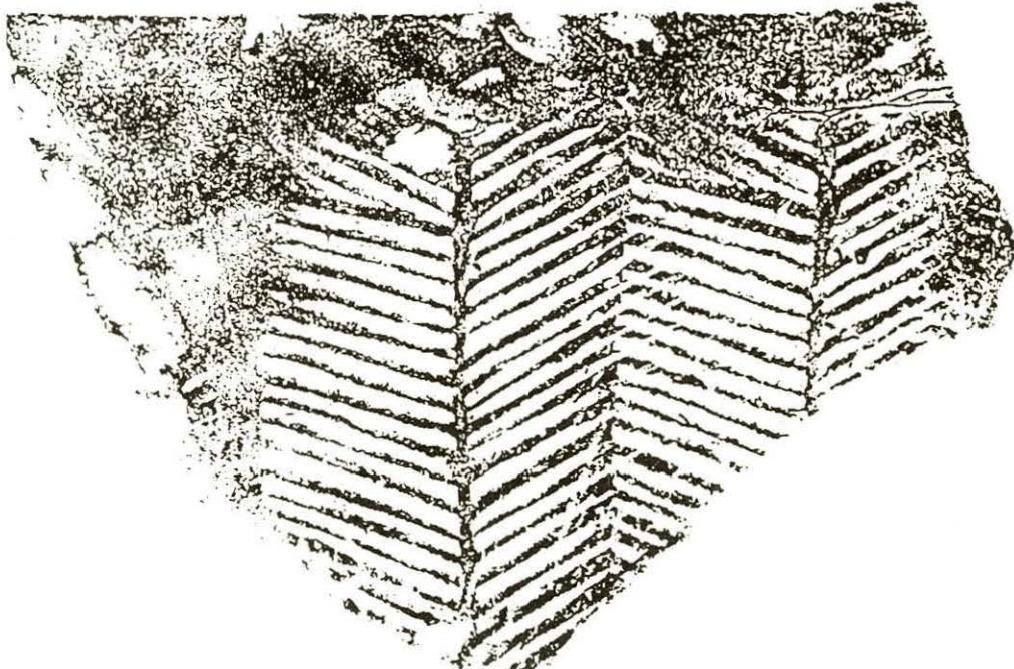
分選別をするというのが自然ではないだろうか。宇茂佐古島遺跡をもし、瓦の積み出し港と考えるならば、伝承や、写真5にみられるように、かつて山原船が停泊したというアジムンイシなどについてもう少し詳細な調査が必要である。

ペリー一行の航海記録『日本遠征記』に、「宇茂佐で、私達は、すばらしい船と木材置き場を発見した。そこはかつてジャンク船（帆のある船）を造っていた所である。」と記されている。また、地域の伝承にも、屋部川口にいっぱい灰色の瓦が積まれていたというのが伝えられている。これらのことと総合して考えてみると、宇茂佐古島遺跡がこれらの物資の搬出入口であったのではないかという視点から見ることも重要な検討事項ではないかと思われる。

それから最後に、高麗系瓦の産地については、今のところ全くわかってないが、もし沖縄現地生産という考えに立つならば、その産地推定はどのように行うかということが考古学的調査から重要な課題として浮かび上がってくる。

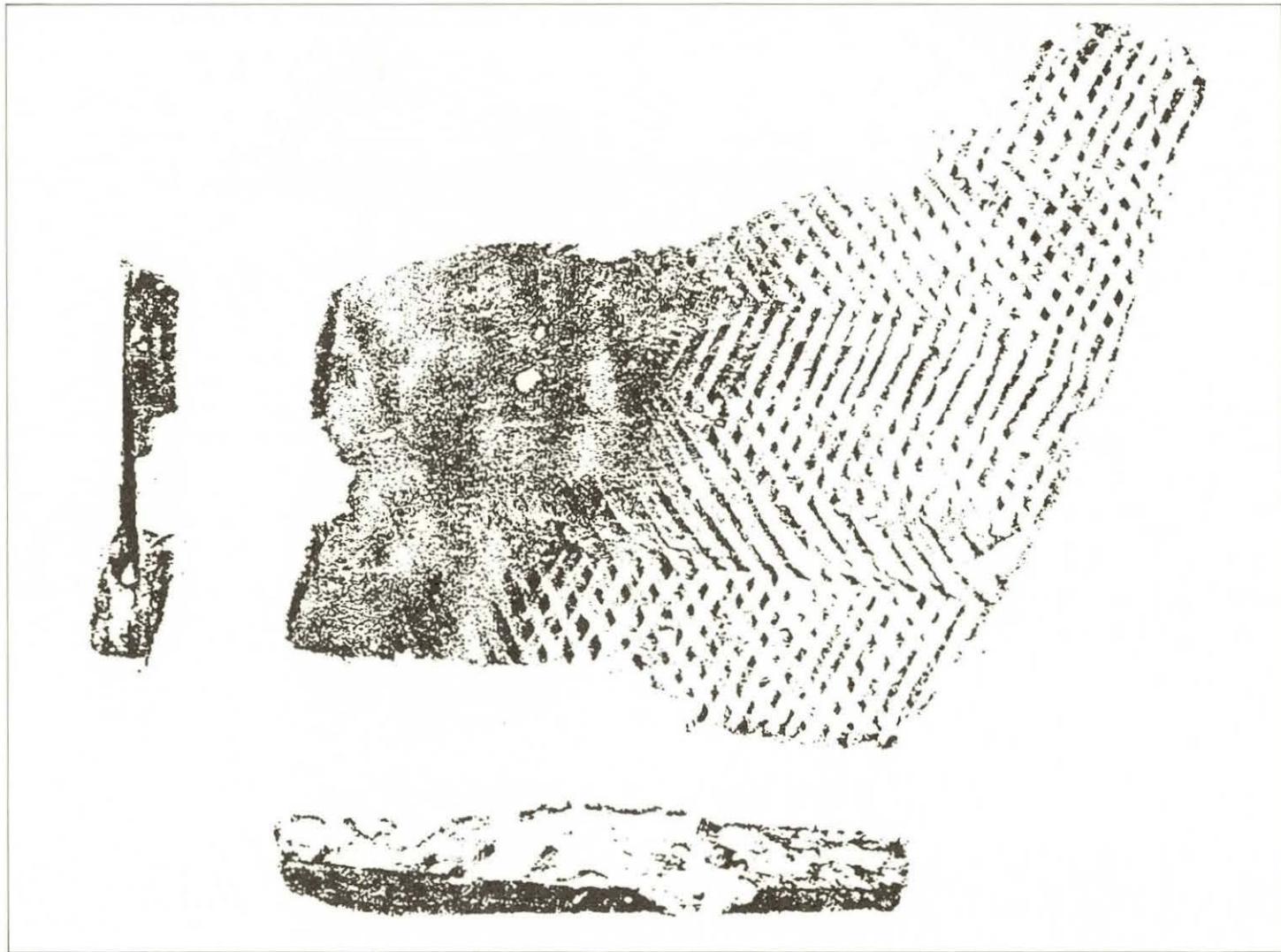
今回の奈良教育大学の三辻利一先生による「沖縄本島の遺跡出土灰色瓦の蛍光X線分析」のデータは、これらの課題に科学的な示唆を与えたものと思われる。

今後とも、分析を継続し、データを増やすことにより結論が得られるものと考える。



第43図 格子瓦 A型
屋部川口、1960 早稲田大学（小渡採拓）

第44図 格子瓦A型
屋部川口、1960 早稲田大学(小渡採拓)





上、東屋部川のアジムンイシ（宜保栄次郎氏撮影）
1本松の位置まで山原船が出入りしていた。

中左、現在の東屋部川（アジムンイシのあった付近）

中右、現在の東屋部川（北側から）

下、宇茂佐古島遺跡遠景



写真 6 東屋部川



写真7-1 発掘調査に向けて全員による安全祈願



写真7-4 中ヌ井



写真7-2 発掘風景

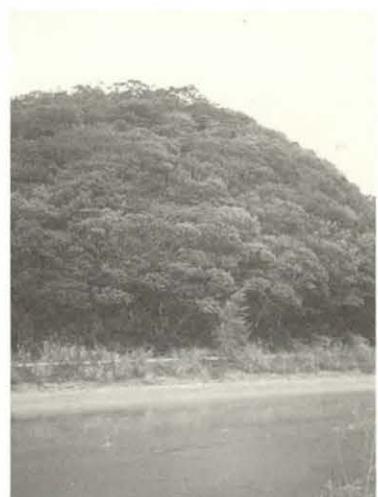


写真7-5 ピーザン森



写真7-3 下ヌ井

写真7 発掘風景



写真8-1 H-35、I-35、J-35
集石と柱穴遺構



写真8-4 現場説明



写真8-2 東側丘陵の試掘



写真8-5 現場説明

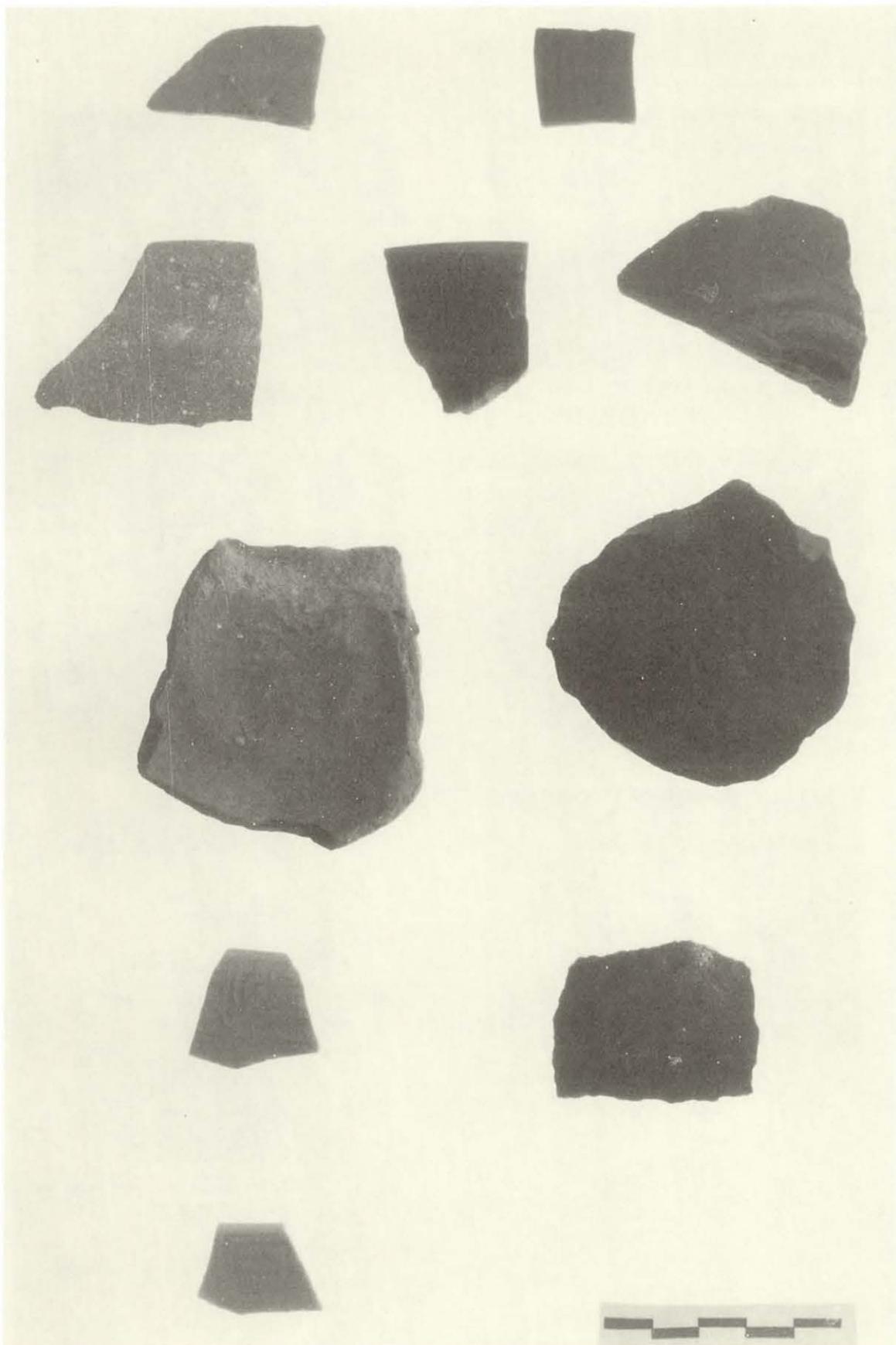


写真8-3 発掘風景



写真8-6 試掘トレンチ
実測風景

写真 8 発掘風景



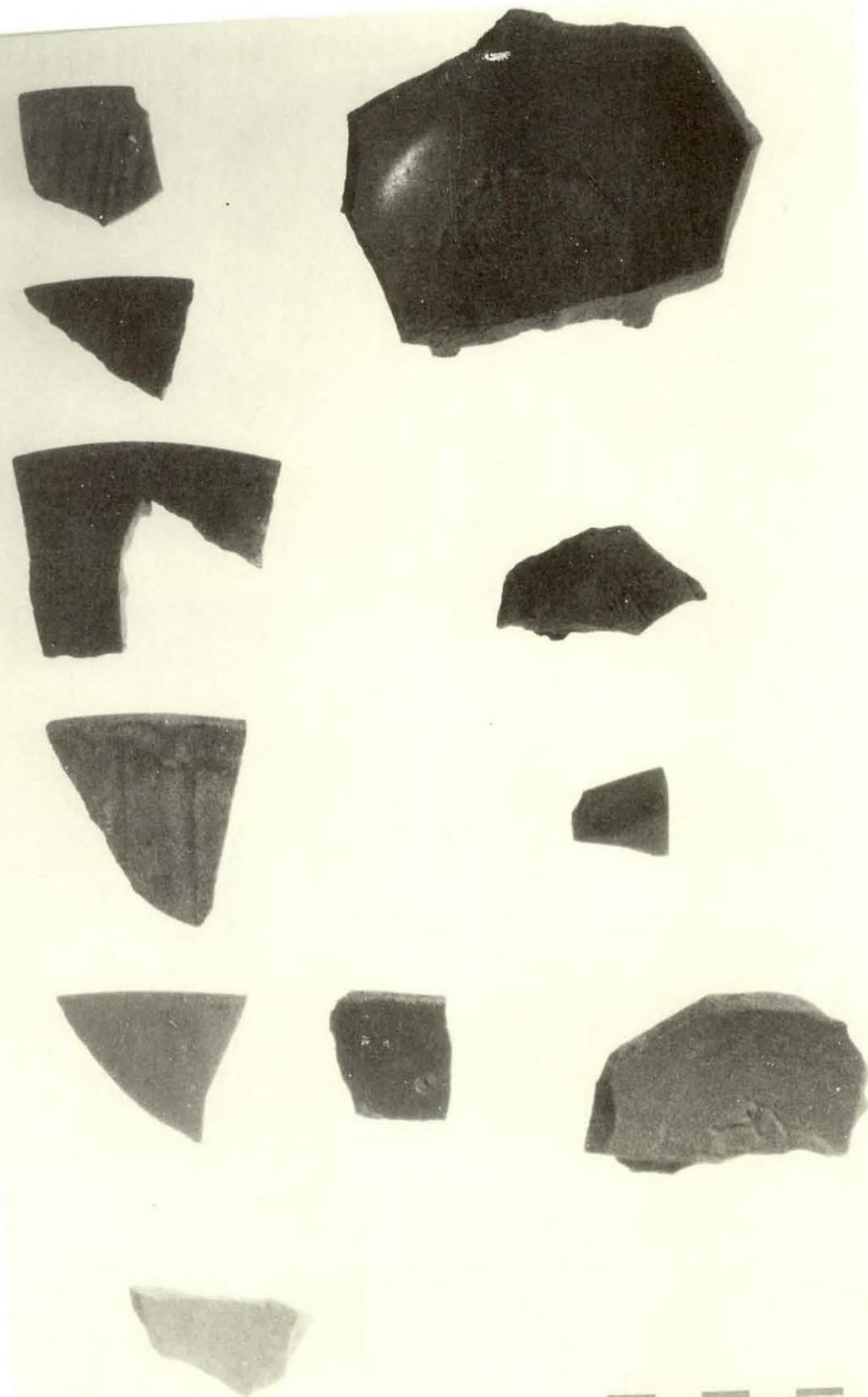


写真10 青磁

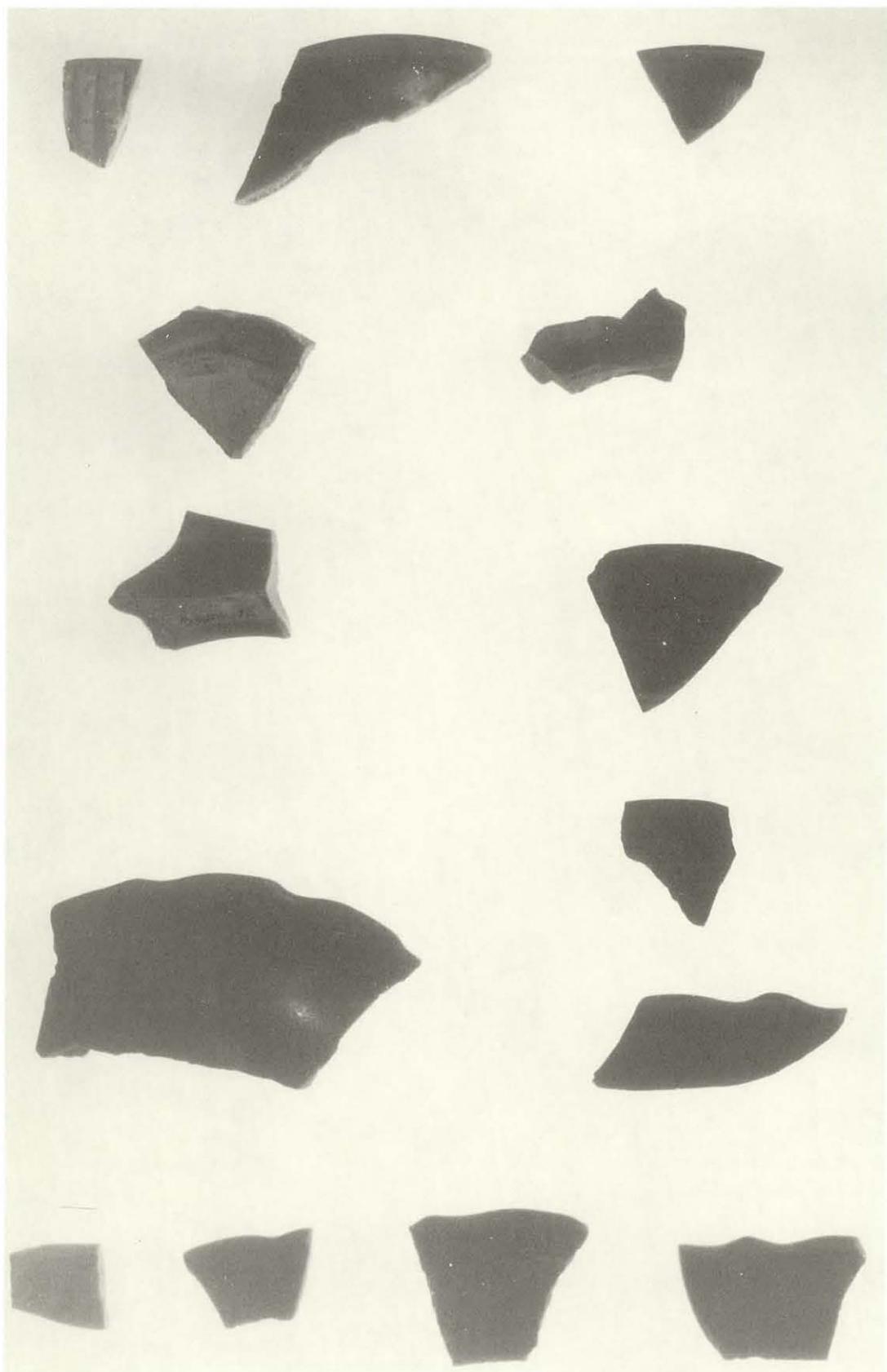


写真11 青磁

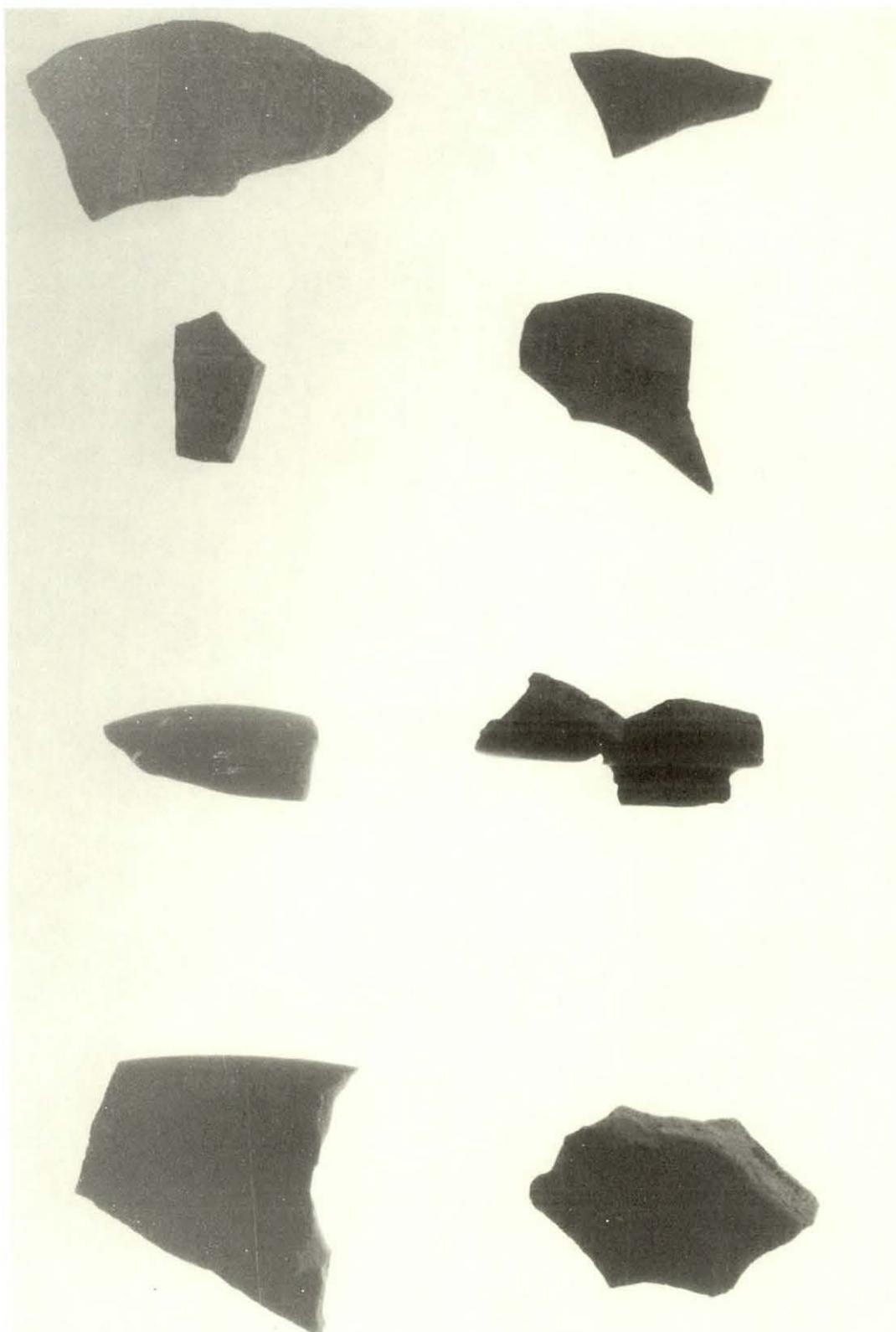


写真12 青磁



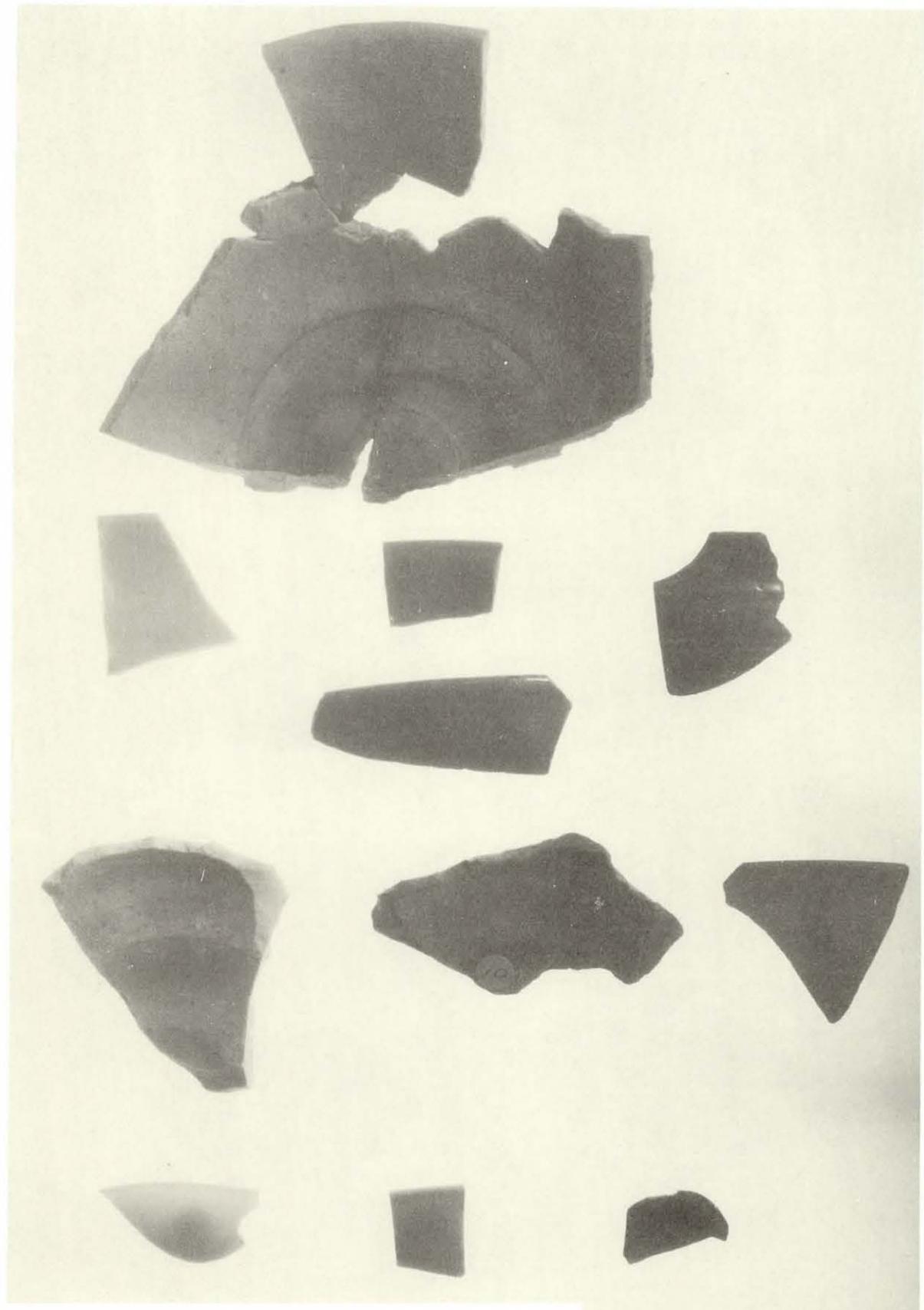


写真13 白磁



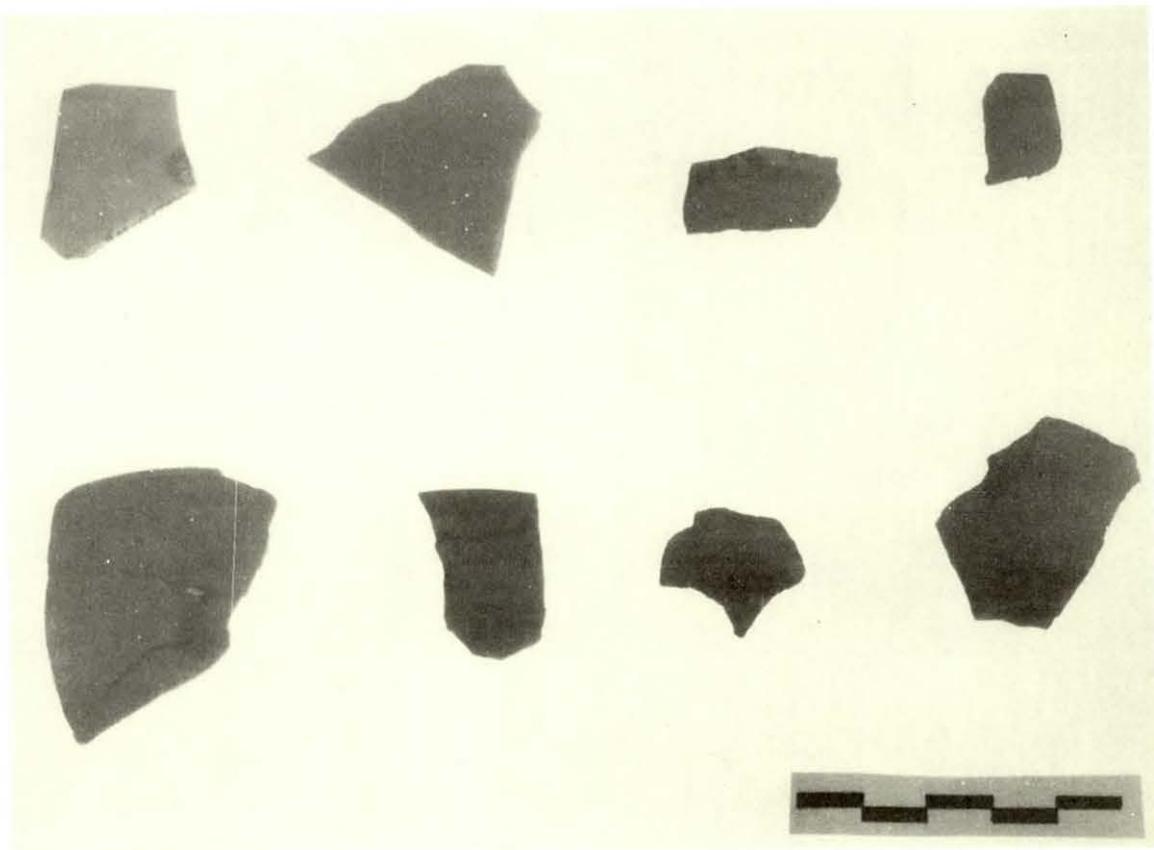


写真14 白磁

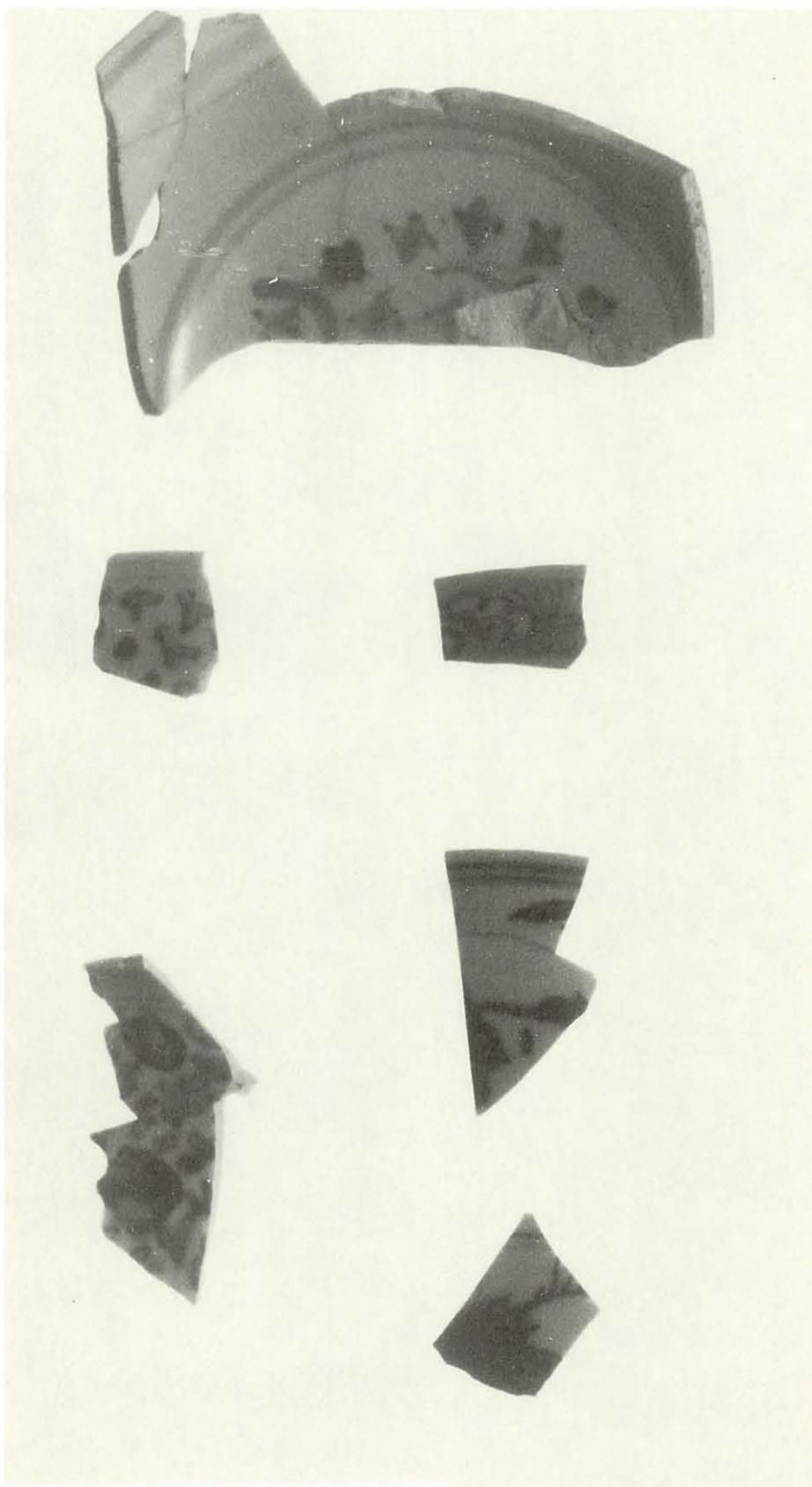


写真15 染付

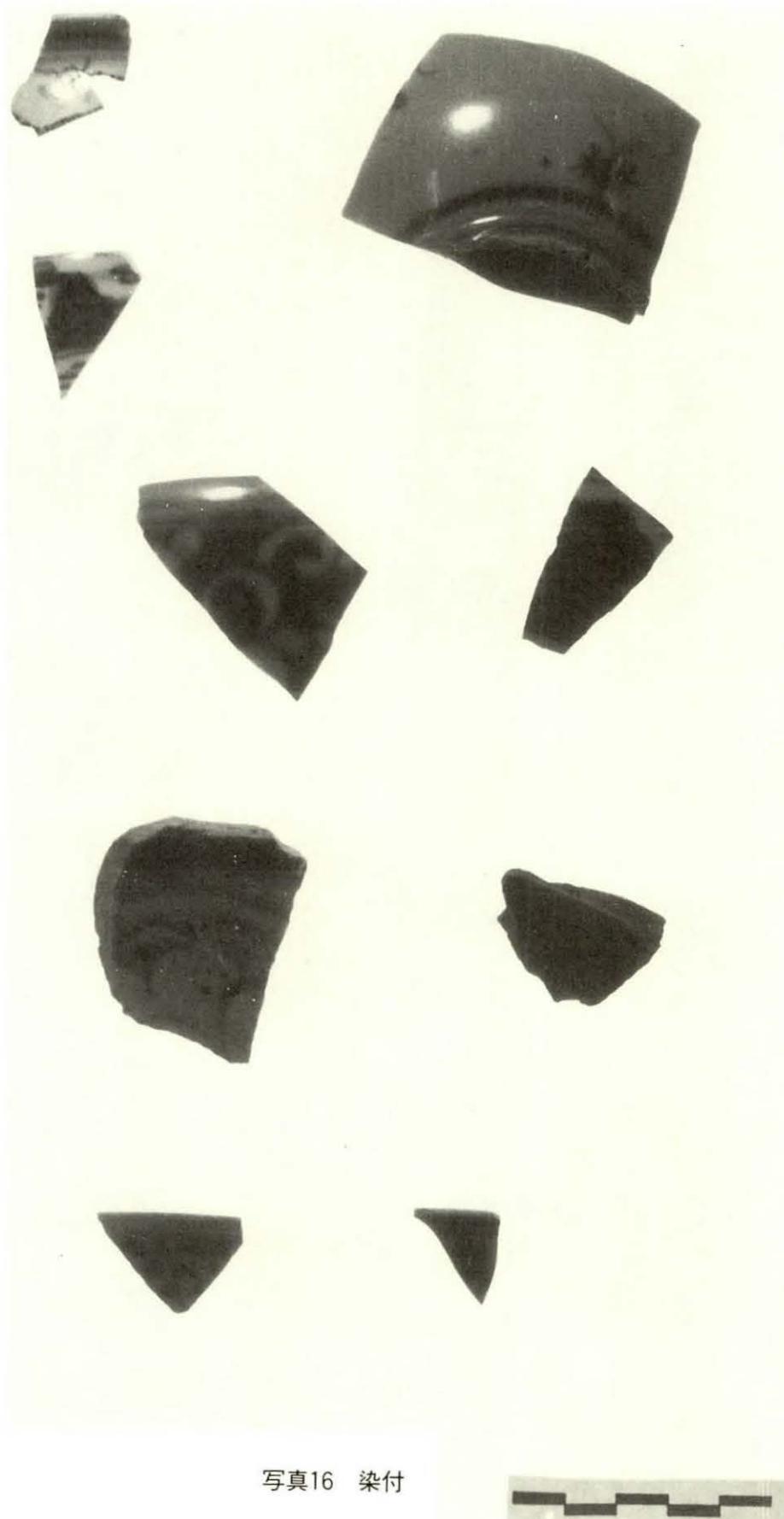
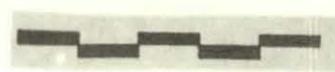


写真16 染付



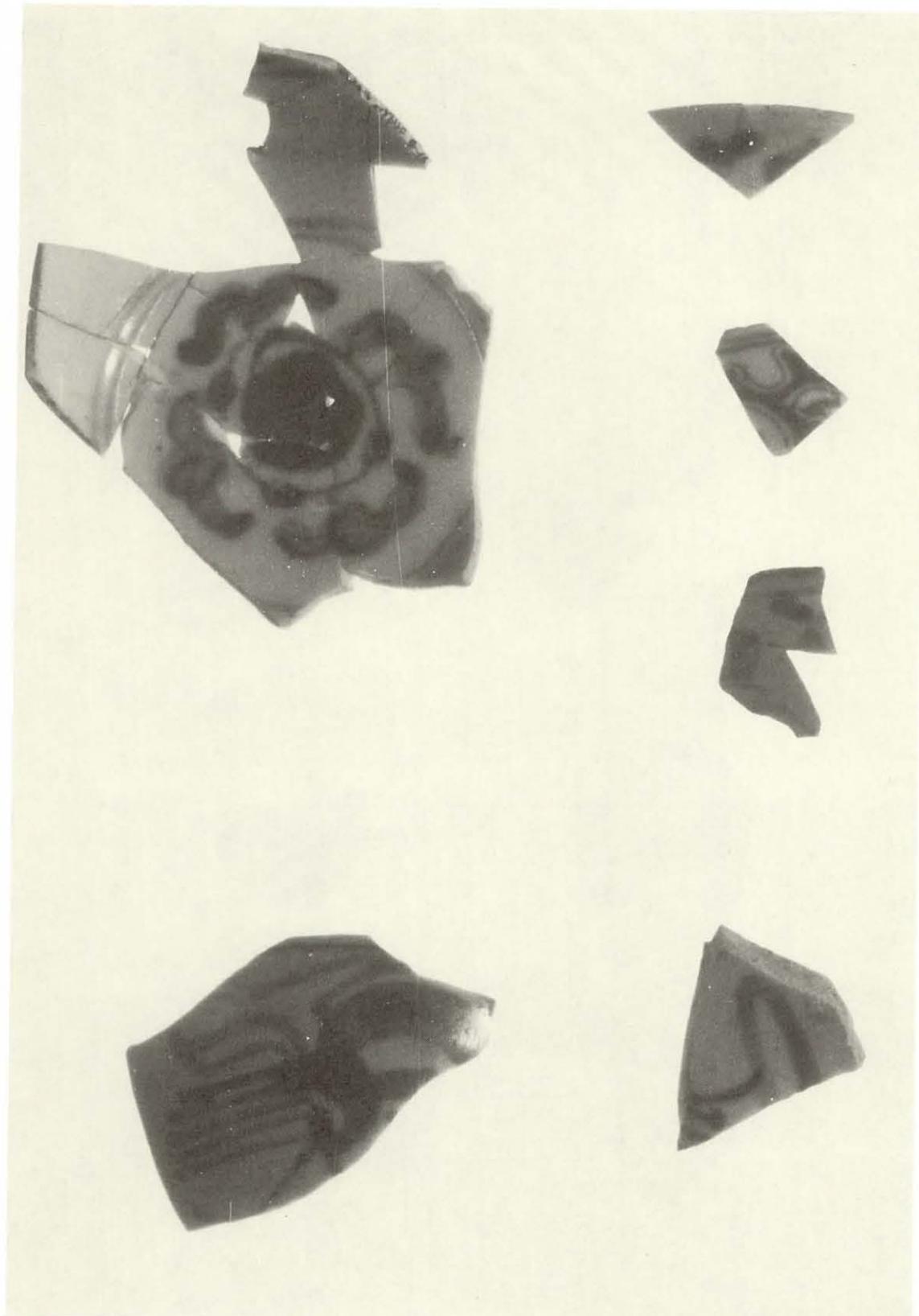


写真17 染付



※高台内に「大明年造」の銘が記される。

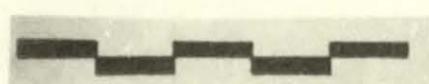


写真18 染付

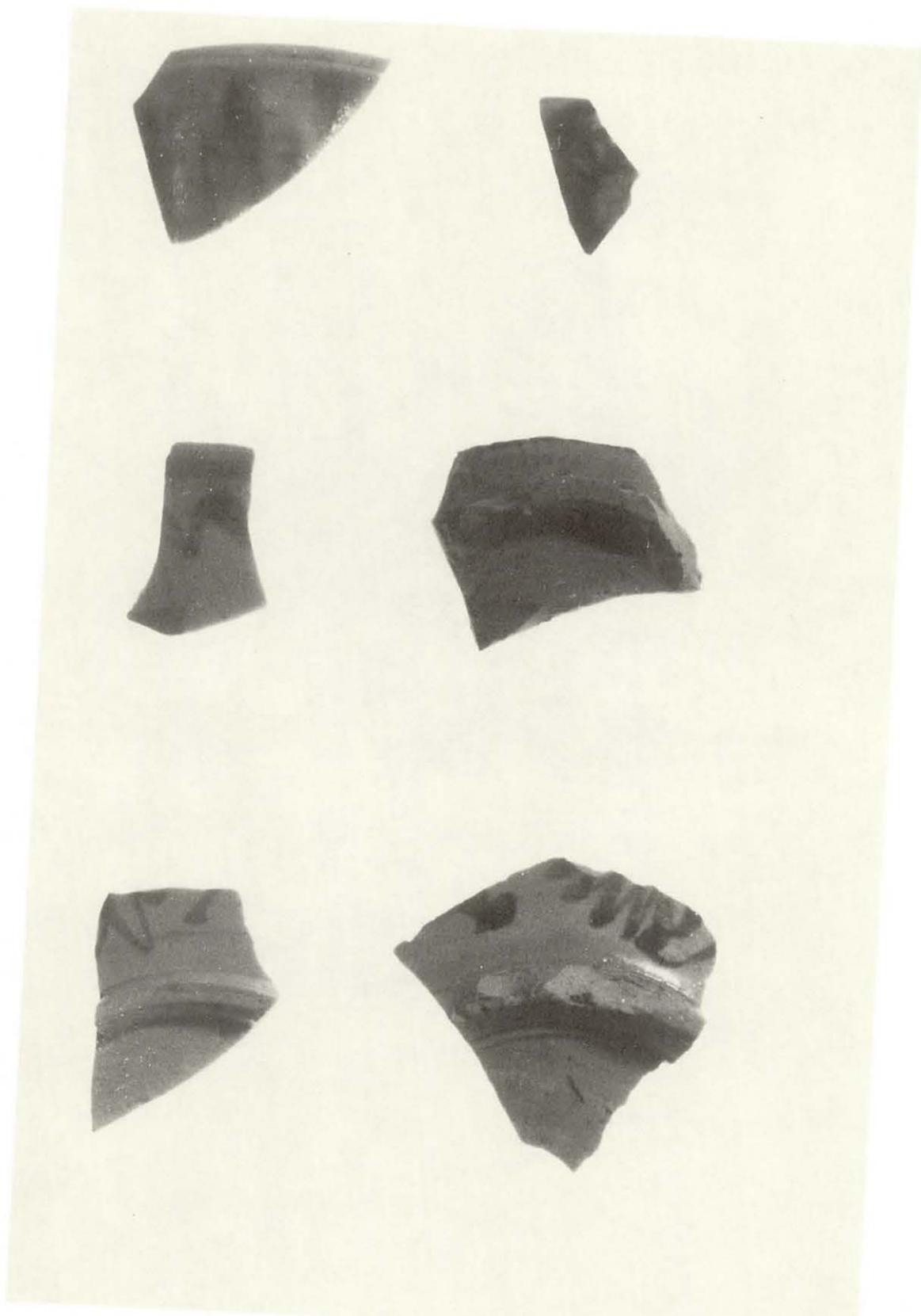


写真19 染付

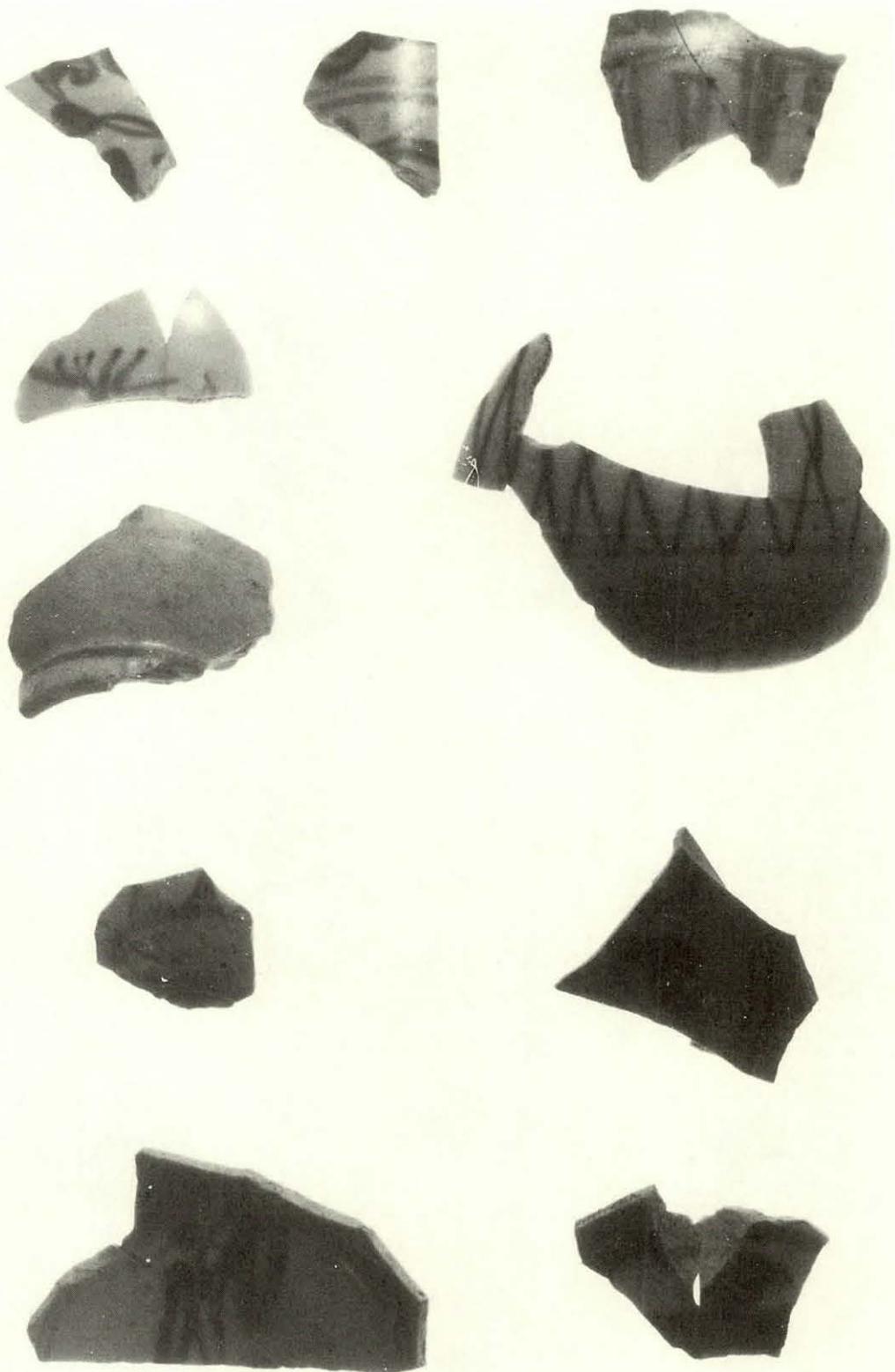


写真20 染付



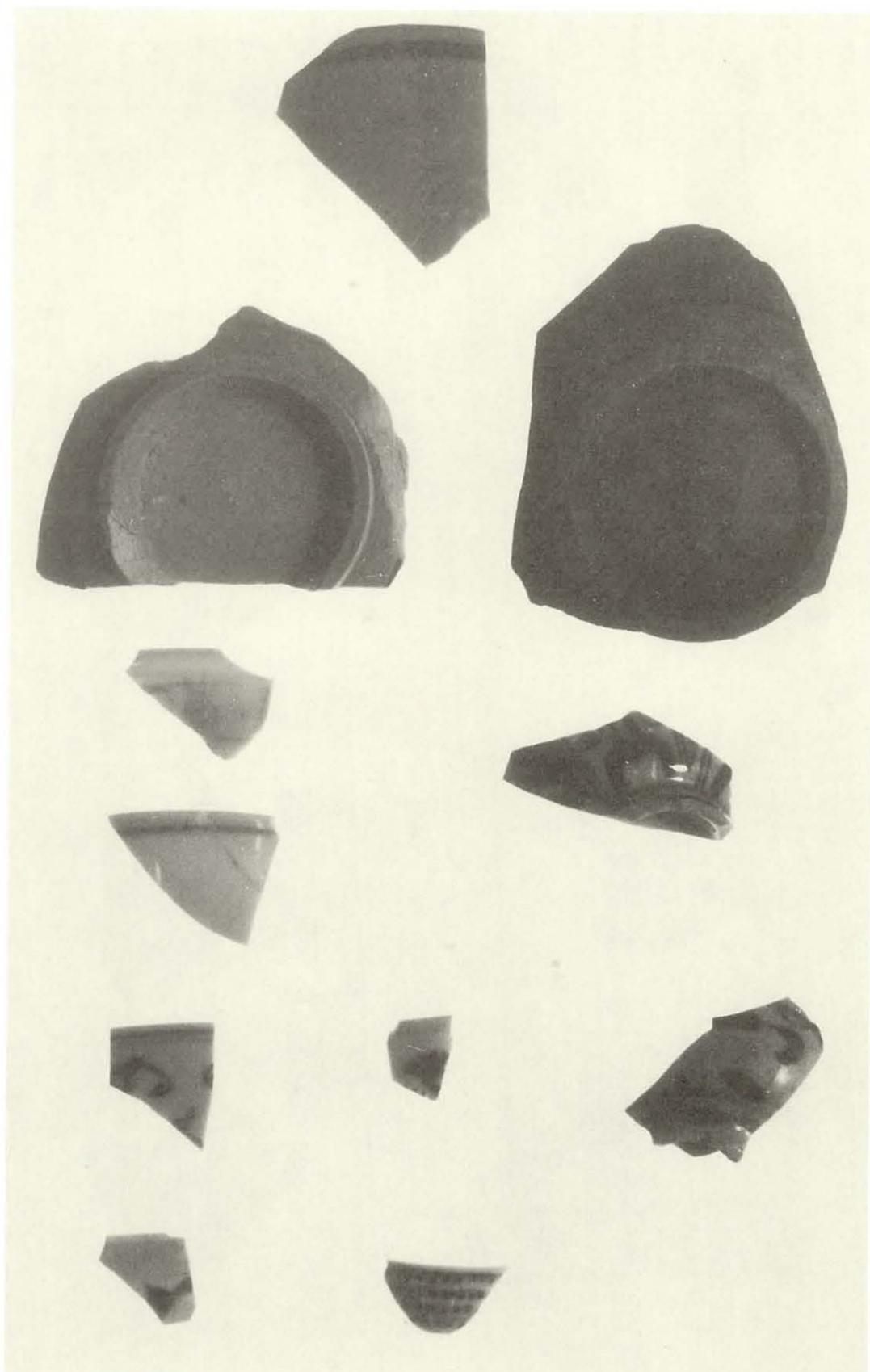


写真21 染付



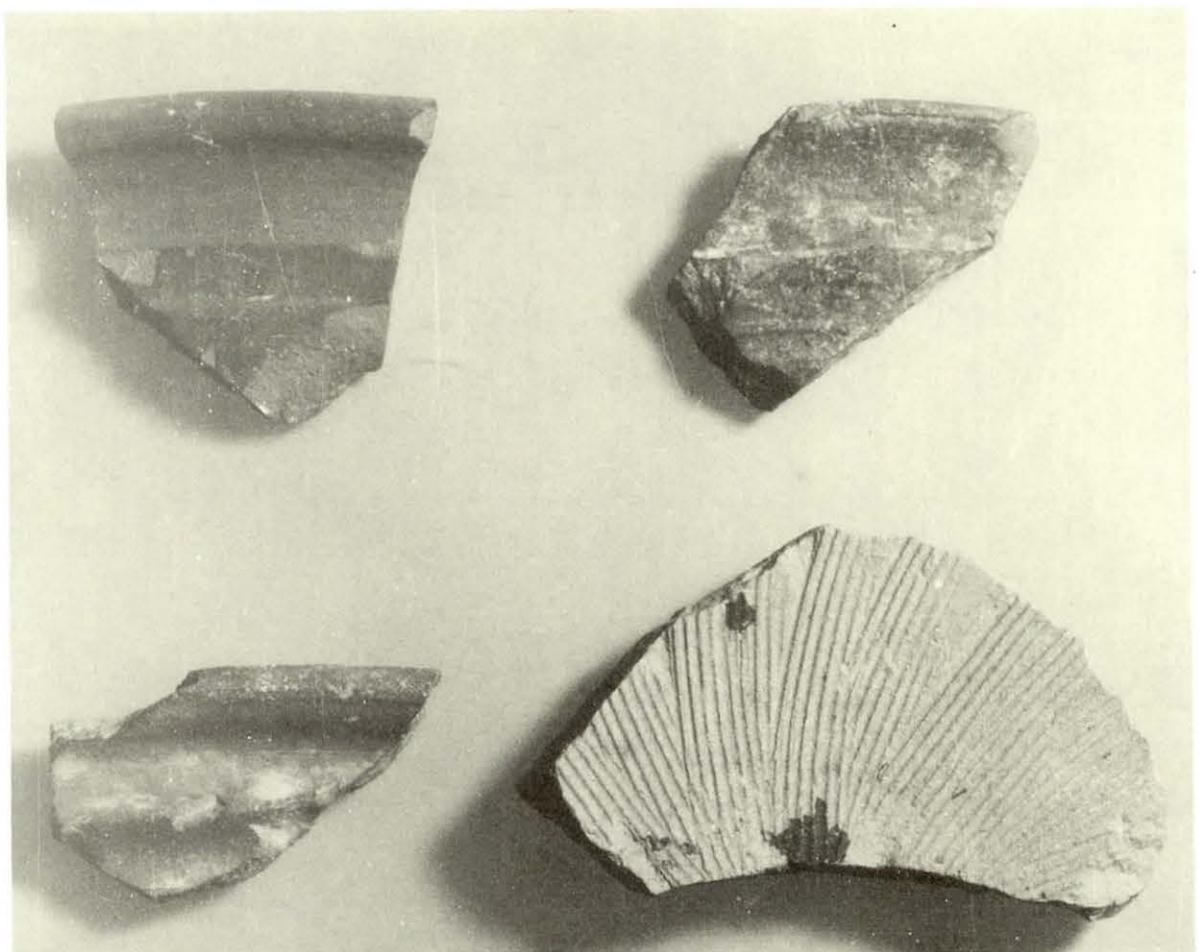


写真22 擂鉢

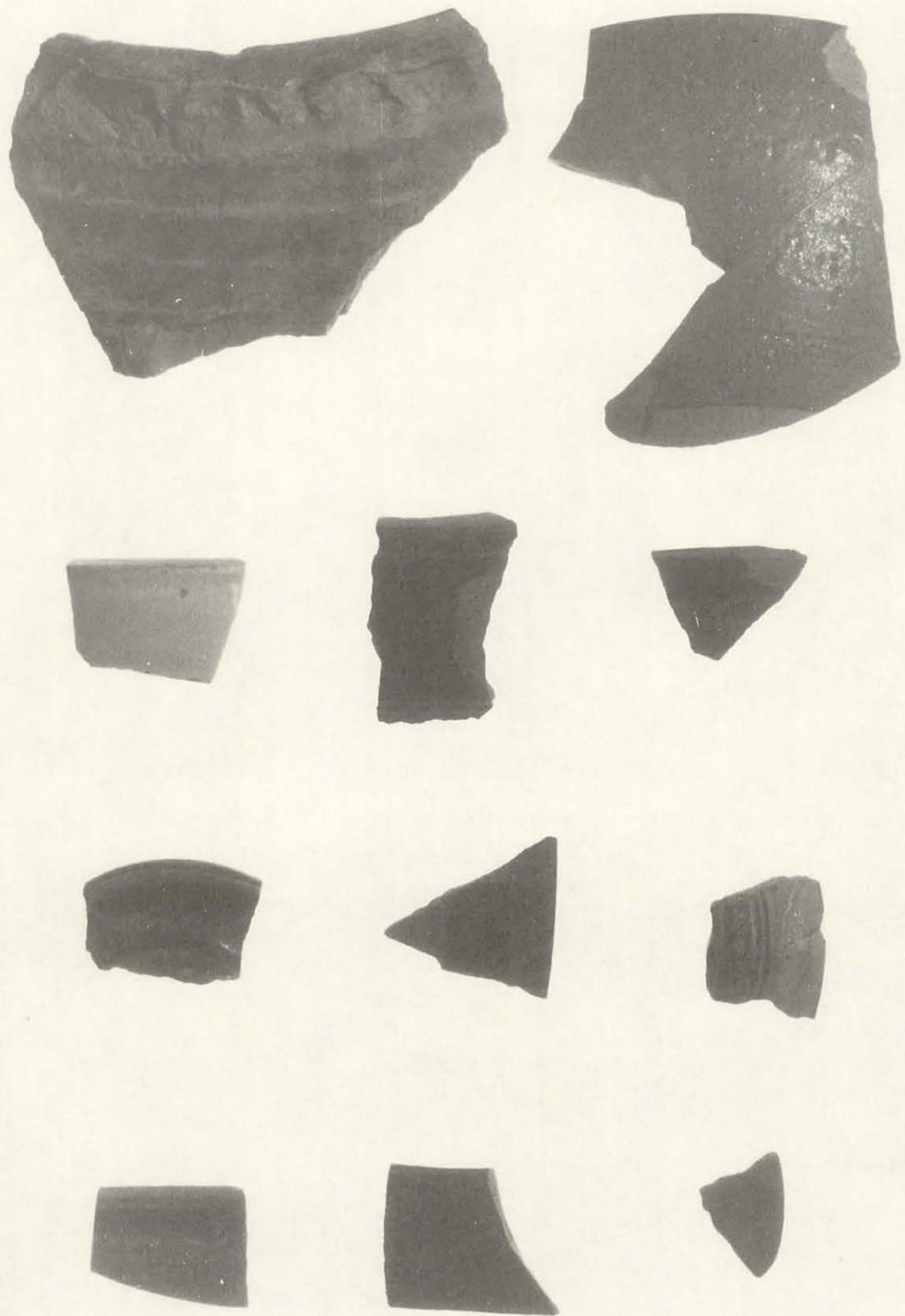


写真23 陶器

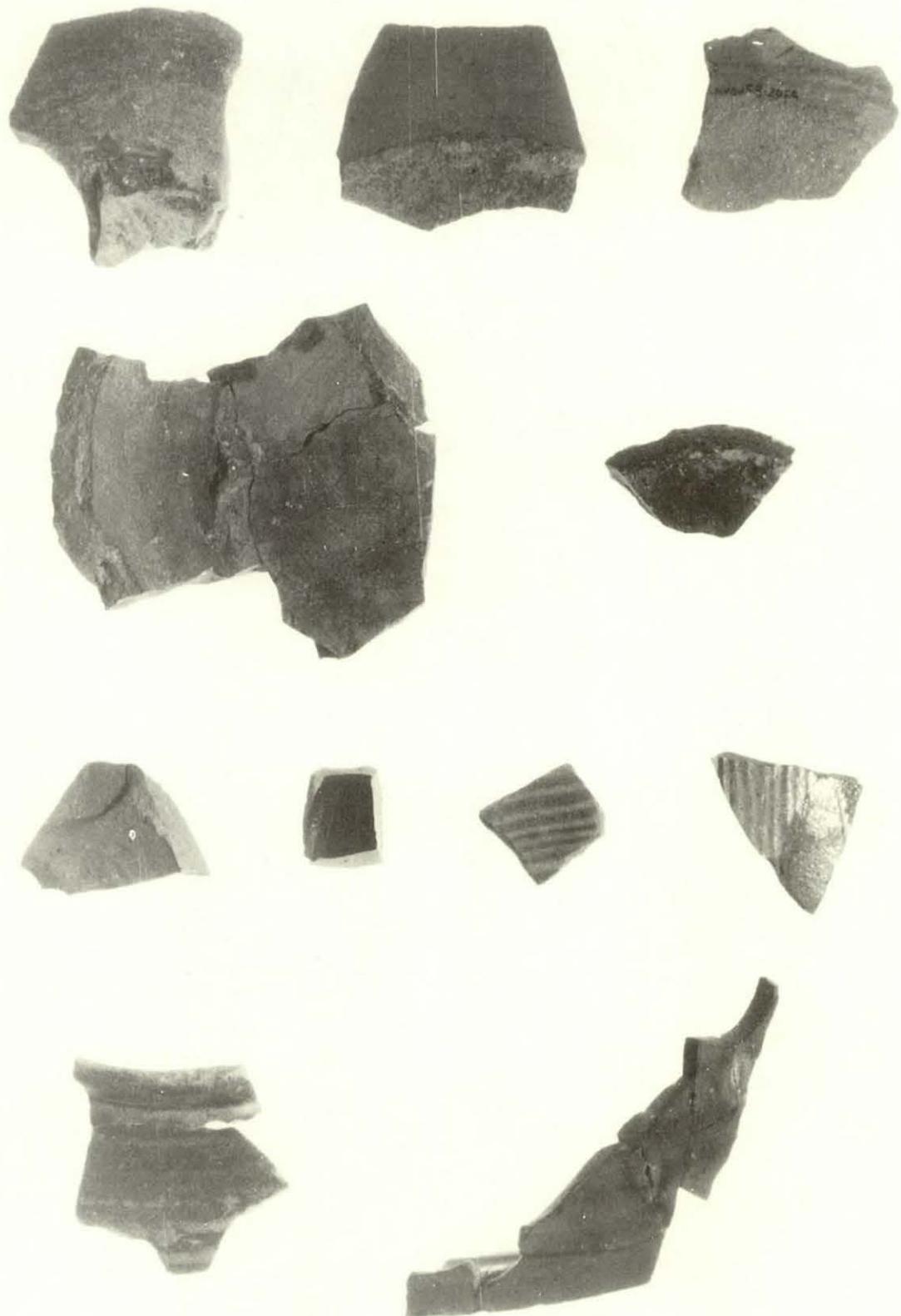


写真24 陶器

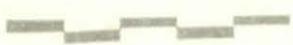




写真25 石製品、金属製品

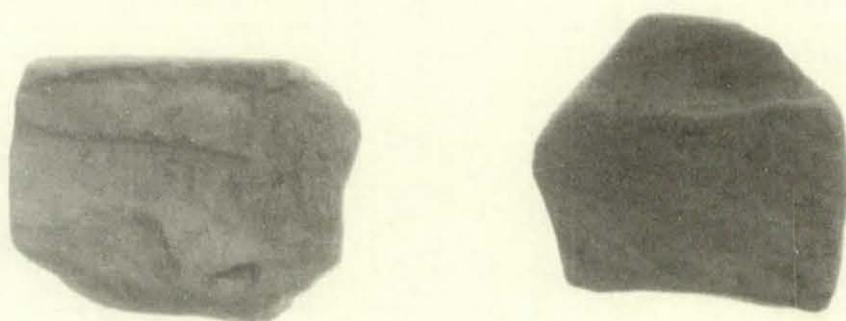
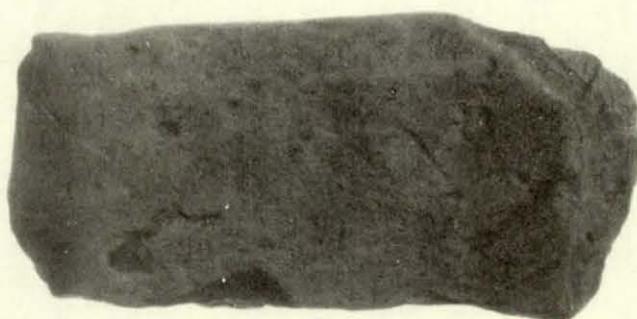
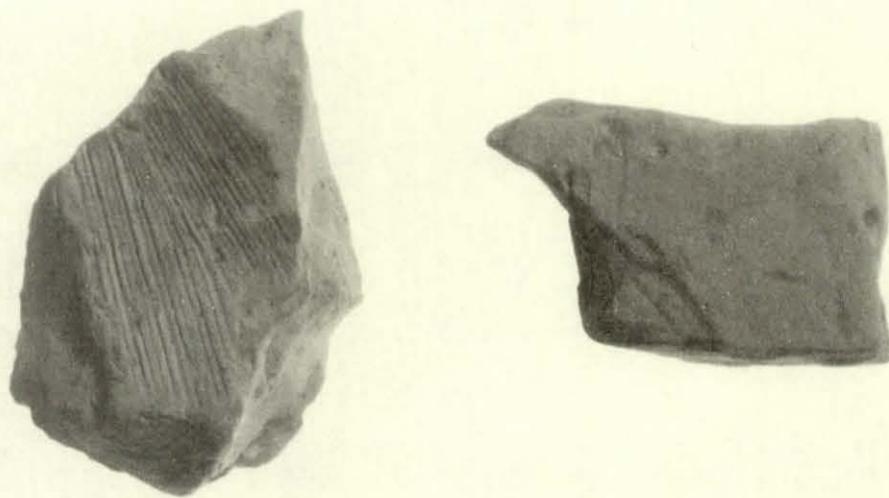


写真26 高麗系瓦



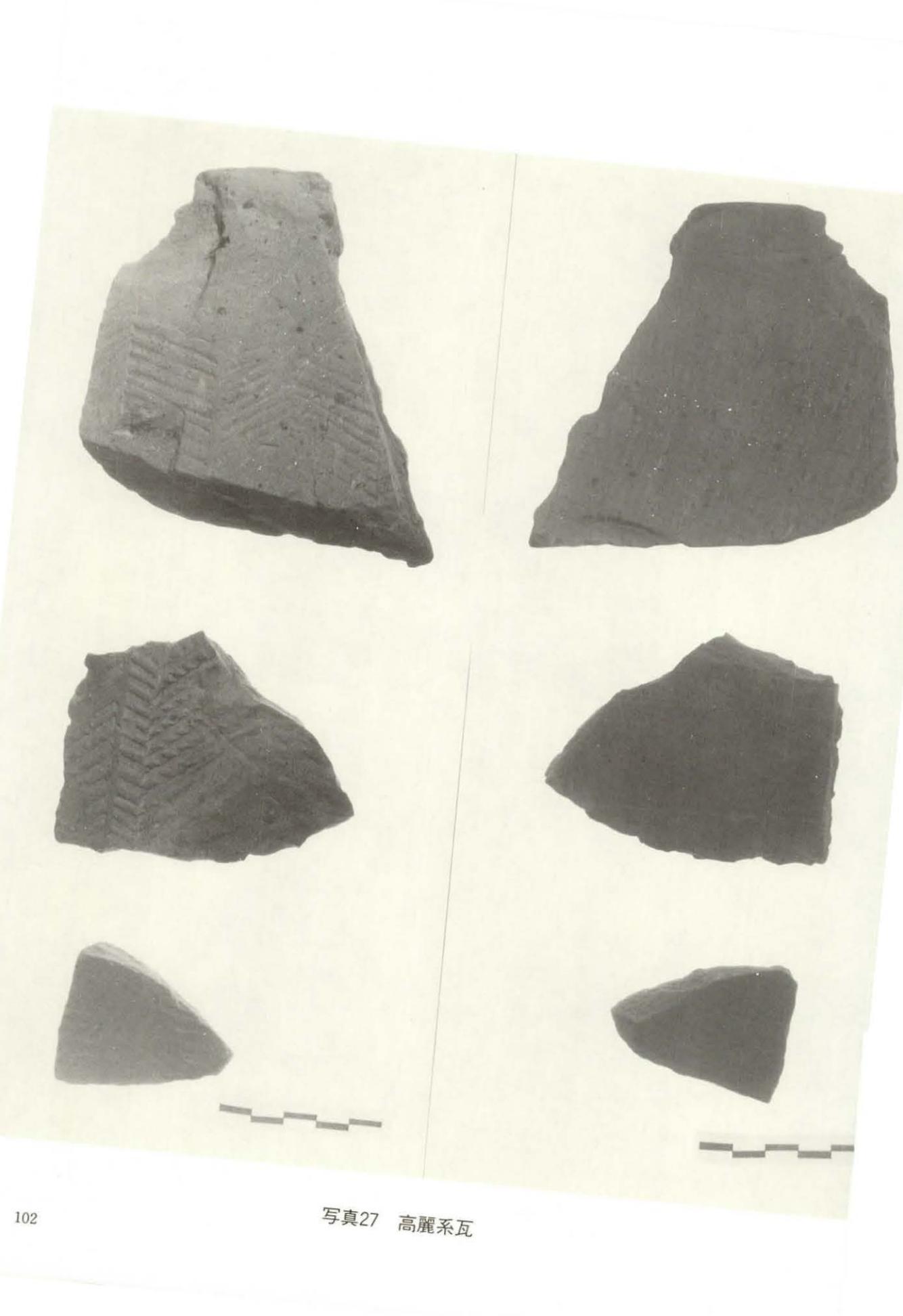


写真27 高麗系瓦

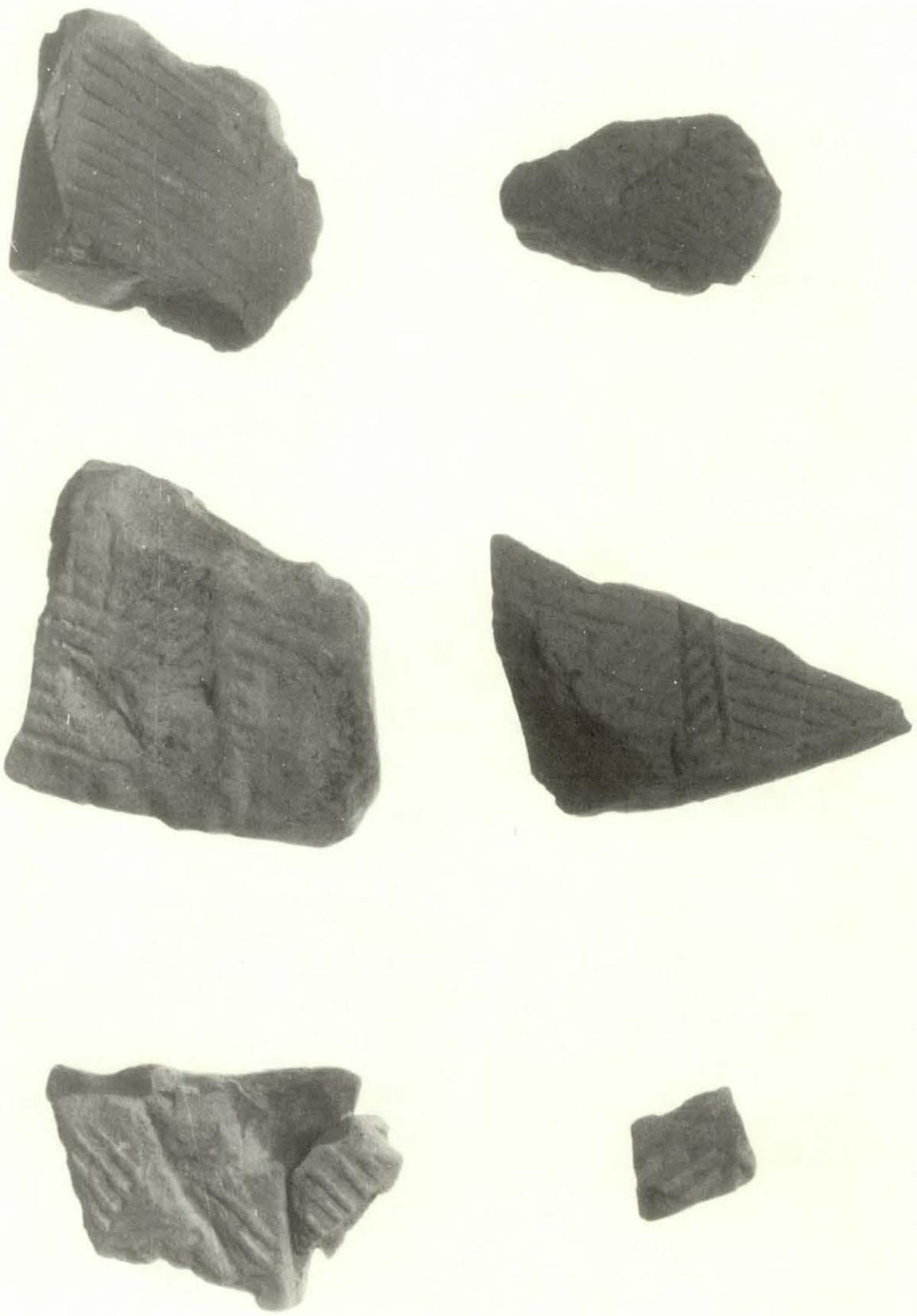


写真28 高麗系瓦





写真29 高麗系瓦

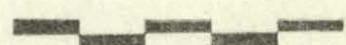


写真30 高麗系瓦

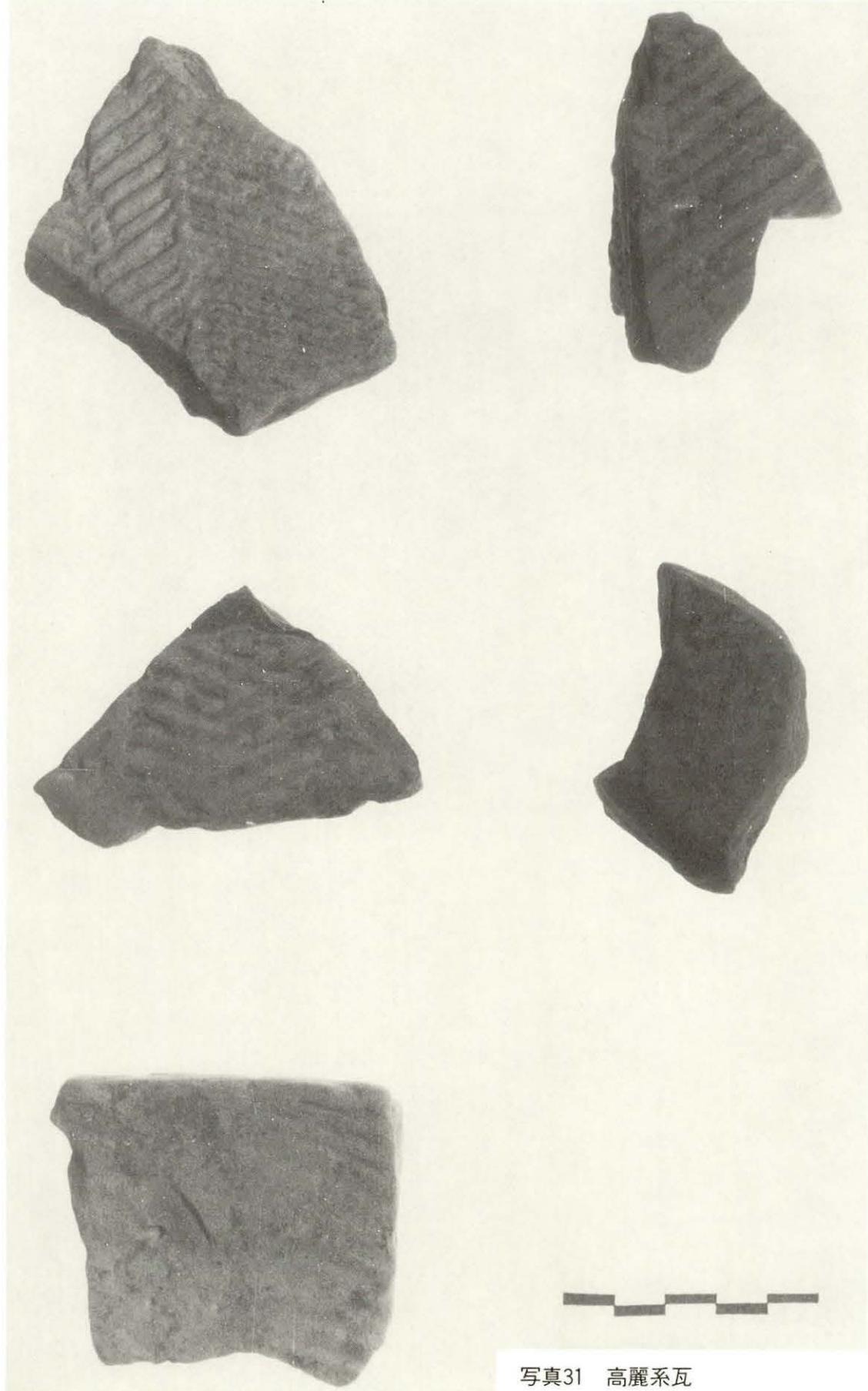


写真31 高麗系瓦

第19表 名護市の遺跡編年 — 時代区分表

西暦
何年前 8000 4000 3000 2000 1000 + 紀元前 0 + 1000 + 1500 + 1982

30000 10000 6000 5000 4000 3000 2000 1000 1000 500

中 国	旧石器時代	(仰韶・竜山)	殷 周	春秋戰國	前漢後漢	北魏	唐	北宋	南宋	元	明	清	中華 民國	人民 中国	
日 本	旧石器時代	(縄 文)	(弥 生)	(古墳)	大和	平安	鎌倉	南北朝	室 町	(戦国)	安土 桃山	江 戸	明治 大正	昭 和	
沖 縄 本 島 名 護 市 の 主 な 遺 跡	生産経済	魚 捕・狩 獵・植物採集										農 業	工 業		
	時代	原 始										古 代	近 世	近 代	現 代
	考古学 の編年 時代	先土器	早期	沖 縄 貝 塚 時 代			グ シ ク 時 代			古 琉 球					
				前 期	中 期	後 期	前 期	中 期	後 期						
	名 護 市	屋 我 地	大堂原貝塚			瀧天原サバヤ貝塚			シママハーブ貝塚遺跡群						
	縄 本 島	羽 地	高尾原遺跡			高尾原浜崎遺跡			屋我グシク遺跡群						
		屋 部	奥武原遺跡			フガヤ遺跡			親川グシク遺跡			瀧洲村遺跡			
		名 護	安和貝塚			東兼久原貝塚			宇茂佐古島遺跡			古我知城空跡			
		久 志	名護貝塚			ナングシク遺跡群			宮里古島遺跡						
	他 地 域 の 主 な 遺 跡	主 な 遺 跡	石井遺跡			久志貝塚			上里グシク遺跡			喜手新村遺跡			
		大川田原遺跡													
		室川貝塚下層(沖縄) 大山貝塚(宜野湾) 西長浜原遺跡(今帰仁)										稻福遺跡(大里)			
		野国貝塚(喜手納) 萩堂貝塚(北中城) 宇佐浜遺跡(国頭) 热田貝塚(恩納)										今帰仁グシク(今帰仁)			
		渡具知東原遺跡(波谷) 伊波貝塚(石川) カヤウチバンタ遺跡(国頭) 具志原貝塚(伊江)										根謝銘グシク(大宜味)			

* 名護市の遺跡 (2) より



名護市文化財調査報告－10

宇茂佐第二地区区画整理事業に
伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書

宇茂佐古島遺跡

1992年3月31日

K-202

宇茂佐古島遺跡
名護市教育委員会社会教育課

1992年

107P 25.6cm

×名護市文化財調査報告-10

名護市史編さん室

寄

502.3

-47.08

